博士論文

組物から見た中国宋・遼・金代建築の研究

温　静

博士学位論文

組物から見た中国宋・遼・金代建築の研究

2015 年 2 月

東京大学大学院工学系研究科
建築学専攻　藤井研究室

温　静

目　次

序　論 1
　1　研究の背景と目的 1
　　1－1　日中建築比較研究の現状と課題
　　1－2　中国建築体系化研究の難関
　2　研究対象 4
　3　研究方法 5
　　3－1　組物を要素に分解する
　　3－2　組物形式から探る組物の論理
　　3－3　遺構に対する現地調査
　4　論文構成 6
　5　用語について 7
　6　初出一覧 8

第一部　組物形式

第１章　組物形式の概論 9
　1　組物形式の歴史的変遷 9
　　1－1　組物の初期的形態
　　1－2　立体的組物層の形成
　　1－3　組物の構造発展
　　1－4　組物の装飾化
　2　組物形式の要素 14
　　2－1　跳出材
　　2－2　横材
　3　壁付き通肘木 18
　　3－1　壁付き通肘木の構成
　　3－2　壁付き通肘木における組物化
　4　おわりに 22

第２章　尾垂木の変遷 23
１　はじめに 23
２　下昂の変遷 25
２−１　斜材体系下昂
２−２　横材体系下昂
２−３　挿昂と擬似下昂の登場
２−４　下昂の機能における柱上組物から中備組物への転移
３　上昂の発展 33
３−１　柱上組物の上昂
３−２　中備組物の上昂
４　装飾尾垂木における日中の発展 38
４−１　中国建築の装飾尾垂木
４−２　日本禅宗様建築の装飾尾垂木
５　華頭子からみた日中建築の尾垂木形式 40
５−１　華頭子を持たない尾垂木の架け方
５−２　華頭子を用いる尾垂木の形式
６　おわりに 44

第二部　架構形式の変化と組物の発展

第３章　日中建築における架構形式の変化 45
１　はじめに 45
２　寺院建築における空間構成の変化 45
２−１　日本中世本堂の形成
２−２　中国の寺院建築における空間の変化
３　架構形式の革新 50
３−１　伝統的な「身舎＋庇」架構
３−２　中国建築における架構形式の複合化
３−３　日本中世本堂における野小屋の普及
４　架構形式の変化により軒廻り組物への影響 59
５　おわりに 60

第４章　中国建築における高級組物の発展 61
１　はじめに 61
２　簡単な組物における構造的限界 62

2－1　大斗肘木と平三斗の限界
2－2　出三斗と枓口跳の限界
3　唐・五代の北方建築に見られる組物の発展 65
4　遼・宋建築における架構技術の革新 69
4－1　北方系
4－2　南方系
5　おわりに 72

第５章 中国建築における中備組物の発展 73
1　はじめに 73
2　中備における組物化 74
3　跳出する中備組物の発展 75
3－1　類型Ⅰ
3－2　類型Ⅱ
3－3　類型Ⅲ
3－4　類型Ⅳ
4　台輪に関する考察 82
5　おわりに 85

第６章　仏宮寺釈迦塔（応県木塔）の組物 87
1　はじめに 87
2　各重による組物形式の異同 89
2－1　外部の組物
2－2　内部の組物
3　中備斜栱 93
3－1　モジュールである三重
3－2　平面構成を表す中備斜栱
3－3　中備斜栱の角度
4　おわりに 97

第三部　中国北方建築の組物多様化現象
第７章　組物の多様化について 99
1　はじめに 99
2　組物多様化現象の概要 100

３　組物多様化の要素 104
３－１　大斗下の支持材
３－２　木鼻
３－３　翼形栱
３－４　斜栱
３－５　尾垂木
４　おわりに 112

第８章　組物多様化の論理 113
１　はじめに 113
２　各立面を区分する原則 113
２－１　建築の正方位性
２－２　建築の正面性
３　同一立面の中で区別する 120
３－１　建築の中心性
３－２　出入口の強調
４　組物多様化意匠における時代的発展 123
５　おわりに 124

第９章　晋祠聖母殿の組物 127
１　はじめに 127
２　組物形式の考察 128
２－１　平出仮昂
２－２　下昂形木鼻
３　組物配置の考察 135
３－１　身舎と裳階の等級差
３－２　中備のバリエーション
３－３　翼形栱と菱形栱における使用位置
４　おわりに 138

第１０章　崇福寺弥陀殿・観音殿の組物 139
１　はじめに 139
２　組物形式 139
２－１　軒廻り組物と梁構造の分離
２－２　梁鼻と木鼻の併存

２−３　斜栱形式の変化
３　組物配置 144
４　おわりに 146

結　論 149
１　研究の成果 149
１−１　組物の要素分析から見た組物形式の成立
１−２　架構形式の変化に従った組物の構造発展
１−３　宋・遼・金代建築における組物意匠の分岐
１−４　組物多様化の意匠と論理
２　展開の可能性 151

付録 153
参考文献 158
図面・表目次 162

序　論

1　研究の背景と目的

近年、東アジアの各国では、建築史研究成果の蓄積に基づき、自国の建築の特殊性を十分に理解するために、東アジアを視野に据えた比較研究が部分的に展開され、「東アジア建築史」の構築への関心が高まっている[1]。しかし各国の間には、相互の理解と交流が未だ十分に行われていないのが現状である。このような背景の中で、比較研究における視点の開発は、東アジア内部での共同研究を行うための必須のことであると考えられている[2]。本論文は、これまで先学によって行われてきた日中建築の比較研究に対して、その成果を整理した上で、日中建築比較研究が直面している課題を把握し、比較研究における新たな視点を提示するものである。

1−1　日中建築比較研究の現状と課題

日中建築における比較研究は伊東忠太氏・関野貞氏・村田治郎氏・飯田須賀斯氏らの日本人研究者によって、日本各時代の建築の根源を探るために、建築様式史を中心に戦前から始められた。1970 年代以来、日本建築史研究が体系化されるのに伴い、日中建築における様式比較研究の精度も格段に上げられた。その中で、日本建築の様式史的系譜において、「中世」という時代を区分する要因となる大陸からの新様式の導入[3]が注目を集め、多くの研究成果が発表された。

中世新様式に対する研究は、主に 2 つの視点から行われてきた。それは第一に、「日本建築史からみた新様式伝来後の体系」と、第二に［中国建築史からみた中世新様式の祖形］である。

「日本建築史からみた新様式伝来後の体系」の視点から、日本に相次いで登場した中世新様式において、重源の大仏様・栄西の建仁寺様・蘭渓道隆の純宋風禅宗建築、そして終に定着した五山建築の禅宗様のような系譜が整理されている[4]。

また、［中国建築史からみた中世新様式の祖形］についての研究は、日本の田中淡氏・関口欣也氏、そして中国の傅熹年氏・張十慶氏によって展開されている。

田中淡氏による大仏様とその将来者である重源に関する研究は、大仏様と中国福建省の建

1　国立歴史民俗博物館：『日本建築は特異なのか――東アジアの宮殿・寺院・住宅』, 2009。

2　藤井恵介：「最近のアジア建築史交流動向」『建築雑誌』〈特集 建築年報〉, 2007. 9。

3　太田博太郎：『日本建築史序説』, 東京：彰国社, p. 102, 2005（初版 1947）。

4　田中淡：「中世新様式における構造の改革に関する史の考察」『日本建築の特質　太田博太郎還暦記念論文集』1976（「第六章　日本中世新様式建築における構造の改革」『中国建築史の研究』, 東京：弘文堂 , 1989 に収録）。

築との関連性を示唆した。それを踏まえ、中国研究者の傅熹年氏は福建省の遺構を調査した上で、福建省の宋代建築と日本大仏様建築の様式的共通性を明示した。それを契機に、傅熹年氏は地方様式的観点を中国建築史研究の中に取り入れ、中国の南方と北方遺構における系統的差異を概観した上で、同じ南方建築であるが、江南地方の建築とも異なる系統に属する福建省地方の建築様式論を立ち上げた[5]。その後、傅熹年氏の実証的成果に基づき、田中淡氏は大仏様建築と福建省建築の細部比較を通して、大仏様建築における様式内部の差異を見出した。さらに、田中淡氏は中国建築史上では、東大寺南大門を代表としたオリジナルの大仏様と完全に一致する様式が存在しないため、大仏様は日中工匠の合作によって編成された様式であると主張している[6]。

このように、傅熹年・田中淡両氏は「大仏様と関係する中国建築」、そして「中国建築史からみた大仏様」[7]という視点に交互に立ち、最終的に日本建築史あるいは中国建築史の内部だけでは得られない結論に辿り着いた。両氏による大仏様と福建様式に関する研究成果は、日中両国の建築史研究に貢献した上、日中建築比較研究の新境地を切り開いたと言っても過言ではない。

一方、日本禅宗様建築と中国江南地方の建築との比較研究の中で、関口欣也氏と張十慶氏の成果は先駆的である。

関口欣也氏は長年に亘って蓄積した日本の禅宗様建築の研究成果に基づき、禅宗様の祖形と言われる中国江南地方の建築との比較研究を行った。その研究成果は、江南地方内部の建築様式の推移が如何に日本の禅宗様の変遷に影響を与えたのかという経緯を解明できる精度にまで到達している。ただし、江南建築の実物が不足しているため、関口欣也氏は華北の遼・宋・金・元代の建築も比較対象として採り上げ、禅宗様建築との幾つかの共通性を指摘したが、最終的に禅宗様建築・江南建築・華北建築三者の関係については、明確な結論を得なかった[8]。

近年、張十慶氏を中心とする東南大学建築研究所は、江南地方の建築に対する長年の調査と研究に基づき、江南建築様式系統を『営造法式』及び北方建築と比較する研究を行った。その研究成果は、宋元時代の江南建築は同一様式系統に属することを解明した他に、江南建築様式は『営造法式』を代表とする官式以外の系統であると主張している[9]。また、張十慶氏は関口欣也氏と同様に、南方建築よりも中国の北方に多く現存する遼・北宋・金代の遺構を採り上げ、南方建築と北方建築の系統的差異を明確に指摘している。その研究成果は、南方

5　傅熹年：「福建的幾座宋代建築及其与日本鎌倉大仏様建築的関係」『建築学報』，1981 年 04 期。

6　田中淡：「大仏様建築―宋様の受容と変質」『論集 鎌倉期の東大寺復興―重源上人とその周辺』（ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集第五号），京都：法蔵館，2007.12。

7　田中淡：「中国建築史からみた〈大仏様〉」（建築歴史・意匠部門研究協議会「大仏様の源流を求めて」）『建築雑誌』，1999.2。

8　関口欣也：「中国両浙の宋元古建築―両浙宋代古塔と木造様式細部」（一）・（二）『仏教芸術』144，1982（「第二章 中国両浙の宋元古建築―両浙宋代古塔と木造殿堂の様式細部」『江南禅院の源流、高麗の発展』，東京：中央公論美術出版，2012 に収録）。

9　張十慶主編：『寧波保国寺大殿勘測分析與基礎研究』，南京：東南大学出版社，2012。

建築の影響を受けた北方建築における発展の傾向まで論じているが、北方建築を中心とした様式論を確立してはいない。

上述の先行研究によれば、中世日本に相次いで登場した新建築様式は、宋の時代に中国の各地方に存在した建築様式が渡来し、発展してきたものであることは確かである。それらの中世新様式に見られる系統的差異について、「それぞれの祖形が、中国建築のなかでの技術的発展過程において占める位置の相違」によるものであると、田中淡氏が指摘している[10]。そのため、日中建築の交流史を全面的に語るには、中国にかつて存在した様々な建築様式を体系化し、それらの建築様式における中国建築史の中での位置付けを明確にすることこそが、今後の日中建築の比較研究、さらに東アジア建築史を構築するための第一の課題であろう。

1―2 中国建築体系化研究の難関

長年の間、中国建築史研究の中では、一つの時代の中で語られる建築様式論は成立していなかった。その原因は主に以下の3点にあると考えられる。

①王朝史に従った建築史の語り方

中国建築は東アジアの建築文化圏のなかでも、連綿と継続的発展を遂げた特異な伝統をもつものであると周知されている。それは中国建築において、日本や朝鮮半島よりも、外来様式・技術を主体的・独善的に吸収し、自律的な体系を形成することに至ったからである[11]。そのため、中国建築史は日本や朝鮮半島の様式史を中心とした建築史と異なる語り方を用いている。田中淡氏もこれまでの中国建築通史を類型別の叙述と年代順の叙述とに分け、膨大な情報が更新し続ける現在において、正確かつ簡明に中国建築の通史を書くために年代順の叙述を勧めている[12]。

中国建築の全体像を描くには、年代順の叙述が疑いなく有効な手法であり、時代軸に沿った発展史的考え方も長年の間、中国建築史研究の主流であり続けた。しかしその反面、中国建築史研究において、一つの時代の中に併存した多様な文化圏に対する視点、又は文化圏の間の繋がりについての叙述は不足していた。

②官式建築の正統性を強調する単一価値観

宋代の『営造法式』と清代の『工程做法』という2つの官式建築の規範書は、中国建築史研究に大きく採り上げられ、体系化された研究が多く行われてきた。それと対照的に、官式

10　前掲注4，田中淡。

11　田中淡：「中国建築の伝統とその優越性―東アジア建築文化の諸相」『国際交流』第56号，1991.7。

12　田中淡：「中国建築の年代学的通史を如何に叙述するか」『建築雑誌』vol.119 No.1514，2004.2。

以外の建築に対しては、地方技術であると説明して済ませる傾向が強い。それによって、建築史研究は単一文化圏の価値観に囚われ、歴史の中にかつて存在していた文化の豊かさを失ってしまう恐れがある。

前述の傅熹年氏による福建建築様式の研究と張十慶氏による江南建築様式の研究は、日中建築の比較研究を契機に、官式建築を中心に語られ続けた宋代建築史の枠を突破することに成功した。それらの研究成果は中国建築史研究を体系化研究へと導くものとして評価されるべきである。

③北方建築を中心とした体系化研究の空白

先行研究の中で幾度も指摘された通り、中国では北方建築と南方建築における系統的差異が明らかである。中国に現存する最古の木造遺構は北方に位置する他に、宋代南方建築の実物の不足と対照的に、北方の遼・金代建築はより多く現存している。遼・金代遺構を中心とする北方建築に対して、その基礎調査は戦前から日中の研究者によってすでに始められていた[13]にも関わらず、その体系化研究は今だに空白である。

その原因を追求すると、恐らく上述の①と②に影響される他に、北方建築は特に多様な文化が併存・交替した広い地域に所在しつつ、かつバリエーションの多い建築形式を用いているため、その系統性は南方建築よりも不鮮明であると考えられてきたからであろう。

上述のように、東アジアを視野に据えた日中建築比較研究を推進するためには、日本の建築様式と対峙できる中国建築体系の構築が不可欠であると考える。そのような中で、宋代南方建築の体系化研究は初歩的な成果を得ているのとは対照的に、同時代の北方建築の体系化研究は遅れている。そのため、この時代の建築の全体像が明らかにされておらず、南方建築に対しても正確・公平な評価が与えられているとは言えない。このような問題を解決するために、本論文は中国北方建築における系統性を検証する上で、北方建築体系を構築することを目的とする。

2 研究対象

中国北方建築の体系化研究の切口を探るために、東アジア木造築様式における最も特徴的な要素である組物の発展に着目し、組物様式の変遷を次のように要約する。中国において、唐滅亡以降の 10 世紀から、様々な文明による衝突・融和をくり返すなか、技術革新に従った木造建築における最も大きな出来事は、柱上だけではなく、柱間にも組物を用いるようになっ

13　その主要な成果として、「薊県独楽寺観音閣山門考」（梁思成，1932）「大同古建築調査報告」（梁思成・劉敦楨，1933）「河北省西部古建築調査紀略」（劉敦楨，1935）『支那の建築と芸術』（關野貞，1938）、『遼金時代の建築と其佛像』（竹島卓一，1944）が挙げられる。

たことであろう。すなわち、従来の疎組系と異なる詰組系建築の登場である。一方、日本では、唐から伝来した疎組系建築が国風化を経て、「和様」建築として定着し、13 世紀末期に伝来した詰組系の「禅宗様」と共に近代まで伝わった。朝鮮半島は日本と類似して、疎組系である「柱心包」様式は 13 世紀まで主流であり、その後に輸入された詰組系の「多包」新様式と共に後世まで伝わった。よって、「疎組系」と「詰組系」という組物を中心にした分類は朝鮮半島と日本の建築様式史を構築する主体と言える。そのため、10 ～ 13 世紀の段階は、東アジア木造建築の技術が最も飛躍した時代であり、各国で後世に伝わる様々な建築様式が成立した時代であるとも言える。しかし、朝鮮の「柱心包」や日本の「和様」など、後世にまで伝わった疎組系を扱う上で注意すべきことは、14 世紀以降の中国建築では、ほとんど詰組系の組物で統一され、疎組系建築はほとんど姿を消している点である。すなわち、中国建築においては、この段階を経て組物様式の交替が徹底的に行われたのである。

このような東アジア建築組物様式史の中で、中国の北方建築は他に例のない特徴を表している。それは「柱間に組物を置く」という詰組系の基本的な特徴を表しながら、完全な詰組系建築と異なり、多様な組物を用いている点である。このような組物多様化現象は、北方建築における詰組系である宋代官式建築との分岐を表す他に、東アジア建築の二大体系である疎組系と詰組系の間に位置づけられる体系の存在を示していると考えられる。

本論文は、東アジア木造建築史における詰組系建築の登場時代に注目し、即ち唐王朝が滅亡した後から元代に中国が再び統一するまで、北方と南方が長い間に亘って対峙した宋・遼・金代を研究対象とする。また、宋・遼・金代の北方建築に見られる多様な組物に関する研究を通して北方建築体系における特質の解明を試みる。

3 研究方法

本研究は、組物の構造特徴とその由来を探ること、そして組物の意匠を解読することを含め、組物における構造発展と意匠展開の両面から北方建築の組物発展史を考察していく。これまでの様々な組物に関する先行研究を参考に、本論文は主に下記の方法を用いて研究を行う。

3−1 組物を要素に分解する

組物形式についての先行研究として、飯田須賀斯氏の『中国建築の日本建築に及ぼせる影響』[14]、関口欣也氏の「中世禅宗様仏堂の装飾細部」1・2・4[15]、そして近藤豊氏の『古建築の細部意匠』[16] は、いずれも［組物を要素に分解する］方法を用いて組物形式を解説している。

14 飯田須賀斯：『中国建築の日本建築に及ぼせる影響』，東京：相模書房，1953。

15 関口欣也：「中世禅宗様仏堂の装飾細部」1・2・4，『日本建築学会論文報告集』vol.150・151・153，1968。

16 近藤豊：『古建築の細部意匠』，東京：大河出版，1972（初版 1967）。

本論文はその方法を参考に、各時代の中国建築の組物を様々な要素に分解して考察する。特に上記の先行研究では明確にされなかった組物における構造性及び装飾性の発生と変遷について検討を行いたい。

3−2 組物形式から探る組物の論理

日本建築の組物形式に対して、藤井恵介氏は独特な視点から意匠論を中心に組物の形式を解説している。その研究成果としての『日本建築のレトリック——組物を見る』[17] では、組物の外観の持つ意味を理解するという視点に立ち、構造論理から相対的に独立した組物の意匠論の存在を指摘し、和様建築における組物の論理を解読している。

一方、中国建築の組物において、日本建築に多く見られる見せかけ現象はそれほど存在しないが、構造論理から逸脱する組物形式が宋・遼・金代の北方建築に確認される。本論文は上記の研究方法を参考に、宋・遼・金代の北方建築の組物論理に対して構造面と共に意匠面からの解読を試みる。

3−3 遺構に対する現地調査

本論文は現存する遺構を中心に研究を展開する。現存遺構についてより正確な情報を得るために、修理工事報告書と公表された調査報告を中心に、遺構における建立・修理の経緯に関する歴史資料を収集する。それに基づいて、本論文の中で採り上げるすべての遺構に対して現地調査を行い、実物を確認する。本論文を作成する際に、資料収集と現地調査で得た情報に対して対照・訂正を行った上で、資料の引用・図版の作成に取り入れる。

もちろん、現存遺構の分布は限定的であり、時代判別にも粗密があると考えられる。本論文では、遺構に対して、明確な年代ではなく、発展段階に注目して検討をするため、発展の流れを解明することは可能である。なお、遺構の情報は今後の調査研究によって更新されることが想定される。それによって、本論文が築いた枠組みの内部で、研究の精度が上がっていくことは期待できる。

4 論文構成

本論文は、大きく三部で構成される。各部分の内容の概要は以下の通りである。

第一部は組物の形式に注目し、時代や地域に囚われず、組物の形式発展における大きな流れを再度整理する上で、組物形式の由来について検討を行う。その際に、［組物を要素に分解する］方法を参考に、組物形式を様々な要素に分解して考察する中で、組物が持つ構造性及び装飾性の発生と変化を検討する。第 2 章では、組物要素の中から尾垂木を採り上げて日本の和様・禅宗様建築と、中国の北方・南方建築における様式の比較を試論する。

17　藤井恵介：『日本建築のレトリック——組物を見る』，東京：INAX，1996。

第二部では、10 世紀以降の日中建築における架構形式の革新と、それに従った組物形式の発展を考察する。第 3 章は日中建築の架構形式の革新を起こした要因を探求する他に、それ以降の日中建築における性格の差異を指摘する。第 4・5 章は架構形式の革新がもたらした組物の発展について考察し、建築の構造発展史の視点から組物多様化現象の源流を探求する。第 6 章は遼代遺構である応県仏宮寺釈迦塔を一事例として採り上げ、その多様な組物形式に対して、構造発展の段階を反映する要素を解明すると共に、装飾要素の存在とその自律性を述べる。

第三部では、専ら中国宋・遼・金代の北方建築を中心に、その多様な組物形式に対して分析を行う。第 7 章は組物多様化の構成類型を考察する上で、組物形式のバリエーションにおける構造的要素と意匠的要素を解明する。第 8 章では、系統性を表す北方建築における組物の内在論理を探求し、組物多様化現象に対する解釈を試みる。さらに、それまでの考察に基づき、第 9・10 章では組物多様化現象の代表的な実例を採り上げて個別研究を行う。その対象として選択したのは、宋代官式建築と真逆な組物意匠を用いている宋代の晋祠聖母殿、そして多様化組物の集大成的作品である金代の崇福寺仏殿群である。これらの事例を分析することによって、宋・遼・金代の北方建築体系に対する理解を深める効果が期待される。

5 用語について

本論文は東アジアを視野に据えた日中建築の比較研究を推進するために、原則的に日本建築用語を用いて説明を行う。ただし、日本建築にない概念を解説するために中国建築用語を採用する場合に、その箇所に説明を追加する。また、一つの概念に対して多数の用語が存在する以下の場合においては、本論文の内部で用語を統一する。その詳細は次の通りである。

①「組物」と「鋪作」

宋式建築用語である「鋪作」は、「一つの組物」と、「組物における積層形構造の一層」という 2 つの概念をもっている。概念の混乱を避けるために、本論文では「組物における積層形構造の一層」として「鋪作」を用い、一つの組物を示す場合には日本建築用語の「組物」を使う。また、中国建築の組物は「斗栱」とも一般的に呼ばれるが、「斗栱」は清代官式建築の用語であり、本論文が検討する時代とのずれがあるため、それの使用を控える。

②「柱上組物」と「中備組物」

『営造法式』による「柱頭鋪作」と「補間鋪作」の呼称もあるが、「鋪作」の概念の混乱を避けるために、本論文では田中淡氏の先行研究[18]を参考に、「柱上組物」と「中備組物」を採用する。

③「中備」と「中備装置」と「中備組物」

本論文では、柱間に設けられる組物層の部材をすべて「中備」と総称する。なお、組物のよ

18　前掲注 4，田中淡。

うな階層構造ではない人字形割束や蟇股、又は通肘木に施された組物模様の浮彫を、すべて「中備装置」と呼ぶ。それと対照的に、跳出する組物である中備を「中備組物」と明示する。

6 初出一覧

本論文の一部は、日本と中国の学術論文集に掲載された投稿論文及び学会発表に基づき、それに修正・加筆を行ったものである。その詳細は次の通りである。

第 1 章［3］：「通肘木からみた日中建築の様式」（『日本建築学会大会学術講演梗概集』，2012 年 9 月）

第 2 章［1－4］：「結合中日遺構探討昂装飾性的演変」（『寧波保国寺大殿建成 1000 周年学術研討会暨中国建築史学分会 2013 年会論文集』，2013 年 8 月）

第 2 章［5］：「華頭子で読み解く日中建築の尾垂木における発展過程」（『日本建築学会大会学術講演梗概集』，2013 年 9 月）

第 3 章：「中世日中建築における組物と架構変遷の関連性」（『日本建築学会大会学術講演梗概集』，2014 年 9 月）

第 4 章：「論多様化外檐斗栱的外観与布局――日本和様仏堂与中国北方遼宋金建築的比較研究」（『中国建築史論彙刊』第十輯，2014 年 10 月）

第 5 章：「中国遼・金代の建築における補間鋪作の形式」（『日本建築学会計画系論文集』Vol.78，No.683，2013 年 1 月）

第 7 章：前掲第 4 章（2014 年 10 月）

第一部　組物形式

第1章　組物形式の概論

1　組物形式の歴史的変遷

組物は東アジア木造建築における特徴的な構成要素で、構造的役割を果たしながら、強い装飾性を持たされている。そのため、組物の歴史的変遷から木造技術の発展を読み取れる一方で、時代に従った建築意匠の変化も捉えられる。本章では、木造建築の組物形式における歴史的変遷を整理し、その発展の流れを把握する上で、組物形式を構成する様々な要素に対してその構造性と装飾性を共に考察し、組物形式を変遷させた要因を解明することを目的とする。

1−1　組物の初期的形態

中国に現存する建築模様の石刻や陶器の実物から、組物の初期的形態を考察することができる。組物の起源とその初期的形態について、劉致平氏・楊鴻勲氏・漢宝徳氏による先行研究がある。劉致平氏によれば、漢代の石刻建築には横方向の双斗系秤肘木が多く見られるが、跳出材は隅部にのみ用いられていた。また、人字形割束については、その構造的役割は小さいと指摘している[1]。漢宝徳氏は漢代の建築陶器を考察し、跳出材と井幹構造（校倉造）との関連性を主張し、劉致平氏と同様に出跳する組物が隅部に登場し始めたと指摘している[2]。楊鴻勲氏は出跳方向の挿肘木と横方向の秤肘木に対して、それぞれの起源を論じた上で、両者の構造的差異を指摘している（図１−1）。また、両者を結合した挿肘木の上に秤肘木をのせる形式は、紀元前５−３世紀の青銅器の隅部に類似するものが見られるが、秤肘木を持たずに跳出する組物は隋代まで主流であったとも指摘している[3]。

上述の先行研究を踏まえ、筆者は組物における跳出材と横材の初期的差異に注目し、両者の関係についてさらに述べたい。まず、初期の跳出する肘木は先行研究が述べたとおり、軒の出を深くするための部材であり、屋根の隅部のような構造が最も弱い部分に登場し始めた。初期の跳出材は挿肘木であるため、その先端に秤肘木を設けるものはあるが、その間では横方向の連結が必要なかった。

一方、初期の横材はその荷重の伝達方によって二種類のものに分けられる。第一の種類は肘木類で、様々な秤肘木や実肘木の組合せが挙げられ、上の荷重を横に分散させて受ける、そして桁の継手を受ける役割を果たす。第二の種類として人字形割束が多く見られ、通肘木

1　劉致平：『中国建築類型及結構』（新一版），北京：中国建築工業出版社，p. 61，1987。
2　漢宝徳：「漢代遺物上的斗栱」『斗栱的起源與発展』，台北：境與象出版社，pp. 6-13，1988（初版1982）。
3　楊鴻勲：「斗栱起源考察」『建築考古学論文集』，北京：文物出版社，pp. 253-267，1987。

楊鴻勲氏による挿肘木の起源説

楊鴻勲氏による秤肘木の起源説
（『建築考古学論文集』）

図 1-1 楊鴻勲による組物の起源説

（劉敦楨『中国古代建築史』）

（『建築考古学論文集』）

漢代埴輪の跳出材

漢代石刻の横材
（『劉敦楨全集』第一巻）

跳出材と横材を同時に用いる事例
（劉敦楨『中国古代建築史』）

図 1-2 漢代の組物

が発展した後に登場し、下方の材に伝達する際に荷重を分散させる効果をもつと考えられる。そのため、漢代以降に人字形割束を秤肘木と対に用いる形式が多く見られる。

よって、組物における初期段階に、跳出材と横材は使用目的によってはっきりと分けて用いられ、その間の関連性は弱かった（図１－２）。

1−2 立体的組物層の形成

漢代以降、跳出材と横材はそれぞれに発展を遂げ、終に結合することになった。まず、横材に関して、北朝建築の組物を採り上げて、その形式の発展を考察した傅熹年氏による先行研究がある[4]。傅熹年氏によれば、北朝建築には５つの類型の架構形式が見られ、これらは土木混合構造から全体木造構造への発展過程を表している（図１－３）。その先行研究に基づき、以下筆者は北朝建築の架構形式の変化に従った横材の変遷に注目する。

（『中国古代建築史』第二巻）

図 1-3 傅熹年氏による北朝建築の構造分類

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ型の組物は、柱の上に置かれている通肘木の上に並べて、軒を受けている。そのため、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ型の組物において柱上と柱間の区別は事実上なく、漢代建築の横材と同様に均質な性格を表している。Ⅳ型の場合、柱は直接軒を受けるが、飛貫を用いているため、飛貫の上に横材を配している。Ⅳ型において、柱上と柱間の組物構成は異なり、柱間に配されている人字形割束は中備装置として認められる。さらに、Ⅴ型になると、頭貫の使用によって、柱上と柱間の装置は同じ水平位置に置かれるようになった。後世の柱上組物と中備装置で構成される側廻り組物はⅤ型の段階で完成したと考えられる。

4 傅熹年：『中国古代建築史』第二巻 両晋、南北朝、隋、唐建築，北京：中国建築工業出版社，pp. 287-288，2001。

（『中国古代建築史』第二巻）

（『古建築の細部意匠』）

図 1-4 構造材として登場した通肘木

莫高窟第321窟建築絵
（『敦煌建築研究』）

図 1-5 通肘木の間に
出現する組物要素

また、跳出材における最も大きな変化は、跳出材が柱に挿し込まれる挿肘木から、柱の上にのせられる力肘木になった点である。またその変化に従い、跳出材において横方向の連結が必要となり、それに応じて通肘木は大きく発展した。その発展過程を示す事例として、河南省で発掘された北朝後期の陶屋、又は日本の飛鳥時代の建築が挙げられる。この段階に至ると、組物は出跳方向と横方向の両方で組立てられ、立体的な組物層が成立した。

ただしここで注意すべき点は、北朝陶屋と飛鳥建築に用いられる壁付き通肘木において、柱間の部分に他の部材や装飾を一切用いていないことである。このような壁付き通肘木は跳出材を連結する構造上の必要な付属品に過ぎず、装飾性を持たされなかったのだろう（図1−4）。

さらに時代は下り、敦煌石窟の唐代の壁画では、壁付き通肘木の変化が見られる。通肘木の間に束のような支持材が柱間の部分に出現し、さらに通肘木と頭貫の間に人字形割束や蟇股が用いられるようになった（図１−５）。それは、中備としての横材が跳出材の系統に取り入れられた結果であると思う。後世には、壁付き通肘木の間に斗や平三斗が設けられ、通肘木自身に肘木の彫刻が施されることが多く見られる。ただし上述の考察によるように、これら横材の中備装置と跳出する組物と同時に用いられるのは唐代以降のことである。

1−3　組物の構造発展

組物の構造発展については、第２部においてその詳細を検討するが、本節ではその発展過程を以下のように概説する。

前述のとおり、隋代以降に、壁付き通肘木の普及によって組物の横方向の連結が強化された後、唐代の建築に柱上組物と中備装置で構成された組物層が成立した。その後の唐代建築において最も注目される２つの出来事は、高級組物の普及と出跳する中備組物の登場である。唐代初期の壁画の中に、四手先の柱上組物がすでに見られる。唐代中期に、中備組物は出跳するように発展したが、柱上組物より小さく、丸桁まで跳出していないものが一般的であった。

五代に柱上組物と同じ高さの中備組物が遺構の中に確認される。後の遼・宋・金代に、柱

仏光寺大殿（唐・857年）

奉国寺大殿（遼・1020年）

保国寺大殿（宋・1013年）

善化寺三聖殿（金・1143年頃）

（筆者撮影）

図 1-6 組物の構造発展

上組物における架構形式との関係は変化していく。それと同時に、中備組物は発展し続け、最終的に柱上組物と相等しい格式に到達した。宋代の官式建築を代表する『営造法式』は「鋪作」[5]という名称を使い、柱上組物と中備組物とを均等に並べ、高度に発達した組物層を表現している。一方、斜栱などの装飾材を用いる、柱上組物よりもボリュームの大きい中備組物もこの時代に出現した。そのような現象は、組物の構造性よりも装飾性を重視する意匠を反映し、組物における元代以降の傾向性を示している（図１－６）。

1−4　組物の装飾化

元代以降、架構形式の簡略化に伴い、組物の構造的役割は弱くなり、用材の等級も宋代建築より大きく下った[6]。それと同時に、組物の装飾性はさらに重視され、装飾性を高めるために、様々な工夫がされていった。

明代になると、梁の発達に伴い、柱上組物と中備組物との用材の差異が現れた。尾垂木などの構造部材は構造的機能を失い、装飾材となった[7]。さらに、清代以降組物は架構と完全に

5　鋪作：読み「ほさく」、斗栱の宋名（竹島卓一氏『営造法式の研究』三「用語解説」）。

6　朱光亜：「第九章第一節　大木技術」『中国古代建築史』第四巻　元、明建築，北京：中国建築工業出版社，p. 436，2001。

7　前掲注 6，朱光亜：p. 441。

天鎮慈雲寺釈迦殿（明15世紀）　（筆者撮影）　故宮太和殿（清・1695年）

図 1-7 組物の装飾化

分離したため、建築の内部では使用されなくなった。そして、軒廻りでは柱間に最大 5 組の中備組物が用いられるものも存在し、組物はもっぱら建築の等級を示す装飾要素となった[8]（図 1－7）。

2　組物形式の要素

前節で考察したように、唐代以降の組物においては、構造的機能と同時に装飾的意味も求められていた。前述の跳出材と横材における初期的性質の差異は、後世の組物の中にも反映されている。以下では、組物形式における様々な要素を跳出材と横材に分けて解説する。そして特にその構造性及び装飾性の変遷に注目する。

2−1　跳出材

組物の中で、跳出方向の部材には力肘木・尾垂木・木鼻がある。

日本建築の場合、組物における跳出方向の形式を説明する際に、「手先」という言葉を使うが、それをもって中国建築の組物を説明しようとすると、表現できない部分がある。それは、日本建築の組物は一般的に最上の手先に秤肘木を必ず用いるからである。中国建築の場合、最上の手先の上に秤肘木をのせるかどうかによって、組物の構造層は一層異なるが、手先の数は同じであるため、「〇手先組物」ではその構造的差異を表すことができない。

中国建築の場合、現存する建物は柱上組物の最上手先に秤肘木を必ず用いて丸桁を受けるが、敦煌石窟の唐代中期の壁画に手先が直接丸桁を受ける柱上組物も確認される。一方、中備組物は唐代以降に構造発展を行い、遼代までに手先で直接丸桁を受ける中備組物が多く見られる。日本建築の中でも、珍しく四手先の組物を用いている東大寺鐘楼に、最上の手先に秤肘木を持たない詰組が見られる。

8　孫大章：『中国古代建築史』第五巻 清代建築，北京：中国建築工業出版社，p. 407-411，2002。

（『営造法式注釈』）

図 1-8 梁思成氏による「鋪作」の計算方法

上述の問題を避けるために、本論では中国宋代の建築用語である「鋪作」を用いて組物の構造層を解説する[9]。梁思成氏による「鋪作」の数の計算方法に従い、跳出材の中で、力肘木・尾垂木・木鼻は手先を増やすかどうかに関わらず、すべて 1 鋪作として計算される。最上の秤肘木は一般的に木鼻と対に用いられるため、両者は同じ鋪作層に属する。

以下では、最上の手先の上に木鼻と秤肘木を用いることの意味について検討を行う。まず、出跳する肘木の上にのせられ、丸桁を受ける秤肘木は漢代建築にすでに確認される。その構造的利点について、跳出材と丸桁の接触面を拡大し、丸桁を安定させる役割を果たせると指摘されている[10]。また、木鼻を用いることで、屋根からの斜め方向の荷重による秤肘木の内転びを防止することができる。木鼻が外へ出せば、秤肘木をさらに安定させる効果が期待される一方、木鼻の形状に装飾性も持たされるだろう。

唐代の壁画の中に、手先の上に実肘木をのせて丸桁を受ける組物も見られる（図 1－5）。実肘木のみを用いる場合、上述の秤肘木と同じ構造的機能をもつが、木鼻を出さないものが一般的であるため、組物の外観に差異が現れる。唐代後期から、秤肘木の上にさらに実肘木を用いる組物が出現した。この段階では、最上手先にのせる部材の構成によって組物のバリエーションが現れる。例えば、敦煌莫高窟の第 172 窟の壁画の中で、３種類の二手先組物が同時に用いられている。それら組物の相違点は二手先の上に秤肘木や木鼻の有無というところにある。この事例から、部材の構成を変えることで組物の外観を調整し、組物の格式に区別を付ける意図が読み取れる（図 1－9）。

9　梁思成氏は「鋪作」に対して 2 つの意味があると解釈している。第一の意味は一組の組物である。第二の意味は組物の中、一層あるいは一跳の肘木又は昂及びその上の斗を示す。また、鋪作の数え方について、『営造法式』では明確に記載されていないが、梁思成氏は自ら解読をした（梁思成：『営造法式注釈』巻上，北京：中国建築工業出版社，pp. 119-122，1983）。後に韓一城氏と何建中氏は「鋪作」の概念について論争をしたが、いずれも梁思成氏の計算方法を継承している（韓一城：「斗栱的結構、起源、与『営造法式』―“鋪作”与“跳、鋪之作”辨析」『古建築園林技術』2000 年 01 期，pp. 14-17；何建中：「疑義相与析―読「斗栱的的結構、起源、与『営造法式』」」『古建築園林技術』2001 年 01 期，pp. 27-30）。そのため、本論は「鋪作」の概念について意見を保留するが、その計算方法を梁思成氏の説に準ずる。

10　前掲注 3，楊鴻勲：pp. 260-261。

莫高窟第172窟南壁
（『敦煌建築研究』）

図 1-9 跳出材のバリエーション

また、一部の唐代から金代の遺構に、襯方頭が外側に木鼻を出している手法が見られる。その手法は元代の中国建築及び朝鮮半島の建築にも確認されるが、明清代以降の中国建築からは姿を消した。組物の外観意匠を反映する一要素として、襯方頭木鼻について第 10 章で実例に基づいて詳しく検討を行う。

2–2　横材

組物の中で、横方向の部材は、水平に広がる肘木類と垂直に荷重を受ける蟇股類に大きく分けられる。蟇股類は装飾性の強い部材で、初期の人字形割束から発展してきたものと考えられている[11]。後世の日本建築に平の中備装置として用い続けられたが、中国では跳出する中備組物の大斗下に用いられるものにまで発展したが、遼代の後に姿を消した。本節では、装飾性を明確に示している蟇股類を除いて、横方向の肘木類を対象にして考察を行う。

まず、漢代建築に見られる横材として「替木」と「横栱」の二種類の形が見られる。楊鴻勲氏は横栱が替木から発展してきたものと主張している[12]。日本の建築用語の中では、「替木」を「舟肘木」と言い、「横栱」である肘木と同じ起源を持つことを示している。

前述の考察で示したように、出跳する組物において、舟肘木や秤肘木のような横材は最初に最上の手先の上に登場し始めた。後に、組物の鋪作数の増加に従い、秤肘木は他の手先の

11　張十慶：「古代建築象形構件的形制及其演変–従駝峰与蟇股的比較看中日古代建築的源流和発展関係」『古建園林技術』，1994 年 03 期，p. 12–15。

12　前掲注 3，楊鴻勲：pp. 260。

（『営造法式解読』筆者加筆）

図 1-10 横材の発展

上にも出現し、様々な形式のバリエーションを表した。

敦煌石窟の壁画から見ると、唐代初期までに最上以外の手先に秤肘木を用いるものは確認されていない。しかし、唐代中期から、すべての手先の上に重栱（二重秤肘木）を設ける建築が出現し始めた。蕭默氏は、このような組物技術の急速な発展が、唐代初期から中期までの社会や経済の飛躍的発展を反映していると指摘している[13]。宋代の『営造法式』では、手先の上に秤肘木を用いる形式を「計心」と、手先の上に秤肘木を持たずに、さらに手先を出す形式を「偸心」と定義している[14]。また秤肘木の形式によって、一重の秤肘木を「単栱」と、二重の秤肘木が積み上がるものを「重栱」と言う[15]（図 1－10）。

上述のような手先の上に用いられる横材において、その構造的役割は、組物の横方向の連結をさらに強化するための通肘木（羅漢方[16]）を受けることである。それ以外に、横材の形式が「単栱」か「重栱」か、「計心」か「偸心」かによって、組物の外観は大きく左右される。様々な形式の中で、「重栱逐跳計心」は宋代以降の最高級組物における不可欠な特徴となり、組物を後世の装飾化へと導いた要素の一つでもある。

13　蕭默：『敦煌建築研究』，北京：機械工業出版社，p. 232，2002。

14　凡鋪作逐跳上、下昂之上亦同、安栱謂之計心。若逐跳上不安栱、而再出跳或出昂者、謂之偸心。（『営造法式』巻四　大木作制度一「総鋪作次序」より）訳文：凡て鋪作の出跳上（下昂の上もまた同じ。）ごとに栱をおく場合は、これを計心という。もし出跳上ごとに栱をおかないで、そのまま再度出跳するか出昂するものは、これを偸心という（竹島卓一：『営造法式の研究』一，東京：中央公論美術出版，p. 313，1997（初版 1970））。

15　凡鋪作逐跳計心、每跳令栱上、只用素方一重、謂之単栱。（中略）若每跳瓜子栱上施慢栱、慢栱上用素方、謂之重栱。（『営造法式』巻四大木作制度一「総鋪作次序」より）訳文：凡て鋪作が逐跳計心の場合、跳ごとに令栱を施し、その上にただ素方一条を通すだけのときは、これを単栱という。もし每跳上に瓜子栱を施し、その上に慢栱を施し、慢栱上に素方を用いるものは、これを重栱という（前掲注 14，p. 313）。

16　羅漢方：読み「らかんほう」。斗栱で丸桁が持出されている建築において、柱の真上を通る柱頭方、即ち檐桁と、斗栱で持出された先の撩檐方、即ち丸桁との間に施される桁で、直接垂木に接するもの。（竹島卓一氏『営造法式の研究』三「用語解説」）垂木に接するかどうかに関わらず、内側の天井桁と外側の丸桁を除き、手先の上にのせるすべての通肘木を羅漢方と言う。（陳明達著、丁垚等整理：『営造法式辞解』，天津：天津大学出版社，p. 452，2010）筆者は後者の解釈を採用する。

3　壁付き通肘木

第 1 節で考察したとおり、壁付き通肘木は、跳出する組物が柱の上方にのるようになった後に登場し、唐代以降に平の組物からの影響を受けて、肘木の模様を表現するように装飾性を持ちはじめた。後世に、壁付き通肘木に施された装飾は組物の外観における重要な要素となった。以下では、壁付き通肘木の構成を考察する上で、日中建築に見られる壁付き通肘木の様々な形式を採り上げ、組物様式にとって、通肘木の形式がもつ意義を探求する。

3−1　壁付き通肘木の構成

通肘木における構成は、まず通肘木と秤肘木の組合せ方でバリエーションが見られる。

現存する最古の通肘木をもつ木造建築は日本の飛鳥時代の遺構である。7 世紀から 8 世紀にかけて建てられた法隆寺金堂・五重塔・中門、そして法起寺三重塔は、飛鳥時代の建築様式を現在に伝え、法隆寺様式とも呼ばれる。これら法隆寺様式の建築は、すべて連続的に壁付き通肘木を積み重ね、通肘木の間に部材を用いていない。この点は前述の中国北朝の陶屋も同様であるため、唐代以前の一般的な通肘木形式を示していると考えられる。

唐代以降、壁付き通肘木の組物化が見られる。中国に現存する 5 棟の唐代木造遺構はすべて唐代中期の 8 世紀以降の建物である。その中で、南禅寺大殿（782 年）・仏光寺大殿（857 年）・天台庵大殿（9 世紀）ともに柱の直上に連続して通肘木を積み重ねている。天台庵大殿はさらに特例で、秤肘木を用いず、壁付き一手目から通肘木を用いている。このような連続壁付き通肘木は敦煌石窟の唐代中期の壁画にも多く見られる。

一方、［秤肘木＋通肘木］の形式は唐代初期の壁画にすでに登場している。［秤肘木＋桁］のような簡単な組物形式は遅くとも漢代に存在していたため、おそらく組物層を拡大しようとする際に、［秤肘木＋桁］を単純に積み重ねて、［秤肘木 + 通肘木 + 秤肘木＋通肘木］という構成になったのであろう。日本では、奈良時代に唐様式の輸入に伴い、このような通肘木の構成も登場した。薬師寺東塔と唐招提寺金堂はそれぞれ奈良時代前期と後期の代表建築で、いずれも柱の直上に［秤肘木 + 通肘木］の構成を表している。中国南方に現存する最古の木造建築は福州に所在する華林寺大殿（五代 964）である。華林寺大殿は四手先組物を用いながら、柱の直上に［秤肘木＋通肘木］の構成を表している。華林寺大殿と建立年代の近い北方遺構として、大雲院弥陀殿が挙げられる。大雲院弥陀殿は唐代の北方建築と同様に連続壁付き通肘木を用いている。このように、日本の奈良時代の建築における通肘木の構成は、中国北方の遺構と異なり、南方の華林寺大殿と一致しているため、奈良時代の建築は唐代南方の建築様式を吸収したと推測できる（図 1 − 11）。

時代がさらに下った遼・宋・金代では、北方建築は金代まで連続壁付き通肘木を用い続けていた。それと同時に、宋代官式建築を代表する『営造法式』には、前述した横材の「単栱」や「重栱」の形式と合わせ、通肘木の構成にもバリエーションが現れた。

『営造法式』には、二手先組物から五手先組物までの合計 5 種類の組物に対して、その手

法隆寺五重塔
連続通肘木

仏光寺大殿
連続通肘木

薬師寺東塔
秤肘木+通肘木

図 1-11 日中遺構に見られる通肘木の構成

（『営造法式大木作研究』）

図 1-12 『営造法式』による通肘木の構成類型

先の数や各手先が「計心」か「偸心」かによって、以下の 4 種類の壁付き通肘木の構成が規定されている[17]（図 1－12）。

①（単栱＋通肘木）× 2

②重栱＋通肘木× 2（or 3）

③重栱＋通肘木＋単栱＋通肘木

④単栱＋通肘木＋重栱＋通肘木

これらの壁付き通肘木の構成を決めるのは、尾垂木を架ける位置、そして組物の立面効果を考慮した工夫と考えられる。南宋・金代に至ると、計心造の組物が普及したため、［重栱＋

17 『営造法式』巻四大木作制度一「総鋪作次序」の「凡鋪作当柱頭壁栱、謂之影栱、又謂之扶壁栱」以降の記述。本論の壁付き肘木に対する分類は陳明達氏の解読を参考にする（陳明達：「図七総鋪作次序二」『営造法式大木作研究』下集，北京：文物出版社，1981）。

通肘木 + α ］の構成、すなわち類型②と③は、南宋建築及び一部の金代建築に定着し、後世の明清代にまでも伝わった。

一方、鎌倉時代の日本では、南宋から伝来した禅宗様建築はほとんど［ 重栱 + 通肘木 + α ］の構成を表している。善福院釈迦堂（1327 年）は例外で、和様建築の古式である［ 秤肘木 + 通肘木 ］を継承した。また、福建省地方の建築様式を吸収したと言われている大仏様は、挿肘木と貫を用いているため、壁付き貫の間隔は大きく、検証の対象にならない。しかし、禅宗様と大仏様両方の特徴をもつ東大寺鐘楼（1207 ～ 10 年）は、挿肘木を用いていないため、類型③の［ 重栱 + 通肘木 + 単栱 + 通肘木 ］を用いているため南宋建築の特徴を表している。

3−2　壁付き通肘木における組物化

唐代遺構の仏光寺大殿を見てみると、通肘木に肘木の浮彫が施されている。それらの浮彫肘木の長さは異なるように工夫され、その長さに合わせて通肘木の上に斗が置かれている。さらに、柱上組物と中備組物を合わせて見れば、柱上と柱間の浮彫肘木は相補性をもつことが分かる。このような手法は、連続通肘木を用いるほとんどの北方建築に見られ、壁付き通肘木における組物化の表現であると考えられる。

また、日本の平安時代以降の建築の中では、醍醐寺五重塔や平等院鳳凰堂のような奈良時代の建築様式を継承した［ 秤肘木 + 通肘木 ］を用いる遺構は少なくないが、一乗寺三重塔と浄瑠璃寺三重塔のような連続通肘木を用いる例も現れた。その連続通肘木は飛鳥時代の法隆寺様式より発展し、通肘木の間に三斗が設けられているため、通肘木の組物化を表していると言える。しかし、中国の北方建築とまた違い、その三斗の位置はすべて垂直方向の一直線上に揃っている。その「三斗を組上げずに通肘木で相互の斗栱を一体的に緊結する」、または「最下段の肘木をも通肘木としたため、大斗上では三斗の分だけを肘木形に造り出す」という手法は、中世的技法とも言われている[18]。

この三斗置き連続通肘木は、中国の北方建築と意匠的に違うため、中国からの影響と考え難く、日本建築における自律的発展と考えられる。鎌倉時代以降、般若寺楼門・唐招提寺鐘楼・興福寺三重塔などの多数の遺構にも見られる（図 1-13）。

仏光寺大殿の連続通肘木

浄瑠璃寺三重塔
三斗置き連続通肘木

図 1-13　日中建築における通肘木の組物化

18　工藤圭章：『日本の美術』197，東京：至文堂，p. 72，1982。

ここで、注目すべき一例として、法隆寺夢殿の鎌倉期修理を挙げる。昭和の解体修理によって、法隆寺夢殿において、鎌倉時代に修理を行った際に側柱の根元を切り、側回りの組物に通肘木を一段加えたことが明らかにされた[19]。このような組物を重ね、横材を増やす手法は東大寺転害門の鎌倉期大修理にも確認されるため、「鎌倉時代の新様式」から影響を受けた結果であるとも言われている[20]。しかし、通肘木における時代的特徴から見ると、それは三斗置き連続通肘木が国風化して和様建築の要素となり、鎌倉時代に定着したと考えられるのではないかと指摘しておく（図 1-14）。

（『法隆寺建築総観　昭和修理を通じて見た法隆寺建築の研究』）

図 1-14 法隆寺夢殿における通肘木構成の変更

19　浅野清：『法隆寺建築総観　昭和修理を通じて見た法隆寺建築の研究』，東京：便利堂，pp. 246-248，1953。

20　太田博太郎：「夢殿」『奈良六大寺大観』法隆寺 五，東京：岩波書店，　p.12，2001。

上述で考察したとおり、日本の和様建築と中国の北方建築の壁付き通肘木においては、同様の発展傾向が見られる。それは組物層の拡大に従い、組物における横方向の連結を強化するために、両者とも連続壁付き通肘木を用いることに発展した。ただし、和様の三斗おき連続通肘木と中国北方の浮彫付き連続通肘木は、装飾意匠の面で相違を表している。和様建築では通肘木の間の斗を揃え、整然とした組物立面を追求しているのと対照的に、中国の北方建築では浮彫の肘木の長さと合わせて斗の位置を調整し、豊富な組物立面を求めていた。その後、南宋建築の［重栱＋通肘木］の構成形式は後世中国全土の建築に伝わったが、日本では、古式の［秤肘木＋通肘木］と三斗おき連続通肘木を継承した和様組物と禅宗様組物が共存した。

4　おわりに

本章では、組物形式における歴史的様相を考察する上で、組物の外観を構成する様々な要素に対して、それぞれの構造的役割と装飾的意味を解明した。

木造建築の組物においては、構造発展を行った後に装飾化が進み、最終的に建築の等級を示す装飾要素となった。このような変遷を辿るには、組物の内部で起きた装飾材の増加、及び構造材の装飾化という 2 つの要因が重要な役割を果たした。また、様々な組物様式にとっての構造的要素は、時代に従って発展してきたので、共通している時代性を表している。それと対照的に、組物の装飾的要素は、建築における自然環境・社会環境・美意識などに従って個性的な意匠を表現している。

第2章　尾垂木の変遷

1　はじめに

組物を構成する様々な部材の中で、尾垂木は特徴的な要素として構造的面と装飾的面とともに重要視されている。木造建築の発展に従い、尾垂木における構造材から装飾材への変化が見られる。本章では、現存する日中建築の中で用いられている多様な尾垂木形式を考察し、尾垂木形式からみた日中建築の組物意匠を探求する。

まず、日本建築用語の中で、尾垂木は「大垂木」とも呼ばれる[1]ため、垂木との関連性を示している。尾垂木の起源について、現存する実証の少ない中、原始的な尾垂木は扠首構造から発生した部材で、垂木に類似する「斜梁」であったと中国の研究者によって推測されている。大陸系木造建築において、扠首構造は斜材を用いて屋根を構成する一方で、干闌式構造は水平材のみで成立する。扠首構造は干闌式構造とともに木構造の最も古い形式であり、後世において発達した様々な木造架構の原点とも言われている[2]。

「斜梁」から発展してきた尾垂木の初期形態は、梁の先端に尾垂木を直接のせ、梁と束とともに三角形の構造体を構成し、屋根の荷重を受けるものである。このような原始的な尾垂木に最も類似する実例は、日本の飛鳥時代の遺構に見られるが、現存する大陸建築の中では確認されていない。日中の現存する木造建築では、高級組物の階層構造に組み込まれている尾垂木のほうが一般的である（図２－１）。

尾垂木と水平材の関係性について、漢宝徳氏は仏光寺大殿を例とし、通肘木によって構成された階層構造の中に尾垂木を用いる必要性に疑問を持ちながら、斜材と水平材の系統について考察を行った。漢宝徳氏の観点によると、斜材構造は南朝地方的特徴を表すもので、水平材を積み重ねる階層構造は漢代以降の中原地域の伝統で、南北朝以来北と南の技術は混合して仏光寺大殿のような例が一時期出現したが、後世の明清代になると、水平材の伝統が改めて確立されるようになった[3]。この解釈は、中国の北方と南方建築に見られる尾垂木形式の相違、そして明清代以降の尾垂木の装飾的発展について、一種の合理的な可能性を示している。

なお、尾垂木の発展過程について陳明達氏は、尾垂木は水平材の階層構造に取り込まれて

1　太田博太郎・稲垣栄三　編：『中村達太郎　日本建築辞彙〔新訂〕』，東京：中央公論美術出版，p. 60，2011。

2　劉致平：『中国建築類型及結構』（新一版），北京：中国建築工業出版社，p. 60，1987；楊鴻勲：「斗栱起源考察」『建築考古学論文集』，北京：文物出版社，p. 264，1987。

3　漢宝徳：「華栱之産生与昂之推演関係」『斗栱的起源與発展』，台北：境與象出版社，pp. 79-81，1988（初版 1982）。

楊鴻勲氏による原始的尾垂木の起源説
（『建築考古学論文集』筆者加筆）

尾垂木の組物化発展
（『営造法式』四庫全書版　筆者加筆）

図 2-1 尾垂木における起源と発展

からその長さも短くなり、かつて屋根構造であった「斜梁」は幾つかの小さな三角形構造に分解され、尾垂木はもっぱら軒先を構成する部材になったと指摘している。また、外側に張り出して丸桁を受ける尾垂木も隋唐以降に発展してきた形式であると推測している。同じ問題点について、竹島卓一氏は『営造法式』に記載されている尾垂木の手先の高さを考察し、組物の中に組まれた尾垂木は出跳と高さとを自由に加減できる原始的な利点を失ったと指摘し、尾垂木における退化の発展過程を語っている[4]。

以上の先行研究によって、尾垂木は斜材としての構造的役割の衰退に伴い、組物化の過程を経たことが分かる。一方、組物の一部になった尾垂木について、装飾化される傾向があることは一般的に認識されているが、先行研究ではその装飾化の過程を解明していない。本章

4　陳明達：『中国古代木結構建築技術　戦國―北宋』，北京：文物出版社，pp. 42-43，1990；竹島卓一：『営造法式の研究』一，東京：中央公論美術出版，p. 280，1997（初版 1970）。

で筆者は組物の一部になった後の尾垂木に焦点を絞り、尾垂木における形式の変遷と組物の構造的発展との関連性に着目し、尾垂木における装飾化の過程を解明したい。

なお尾垂木の用語について、中国建築の場合、尾垂木は構造原理の違いによって「下昂」と「上昂」に分けられる。本稿は尾垂木における構造的かつ装飾的発展を考察するため、「尾垂木」を「下昂」と「上昂」に使い分けて説明を行う。

2 下昂の変遷

中世までの日中建築に見られる下昂の納まり方によって、下昂形式は２つの架構系統のいずれかに属する。この２つの架構系統における最も大きな相違点は、軒桁と母屋桁を受ける構造体が横材と斜材のどちらかによって構成されているところにある。架構形式における横材体系と斜材体系について第二部第 3 章で改めて論ずるが、本章ではしばらく、直接軒桁や母屋桁を支持する下昂を「斜材体系下昂」と、屋根を受ける横材体系の構造体に含まれない下昂を「横材体系下昂」と呼ぶ。以下、この 2 つの系統の下昂について考察を行う。

2−1 斜材体系下昂

斜材体系下昂は軒桁や母屋桁を直接受け、原始的な尾垂木の特徴をより多く保有している形式で、中国の五代から元代にわたった南方の遺構に多く見られる。遺構の中では、保国寺大殿（北宋 1013 年・寧波）の正面柱上組物にはより原始的な下昂に近いものが用いられている。

保国寺大殿は前後非対称な架構を用いている。前面庇に天井や藻井が設置されているため、天井裏は日本の小屋組に類似する単純な架構で構成されている。保国寺大殿正面の柱上には 2 本下昂をもつ四手先組物を用いている。その柱上組物は、三手目の下昂の上に軒桁を受ける束を立て、四手目の下昂はその束を貫通し、入側通の母屋桁（中平槫）を支持する束に挿し込まれている。

一方、保国寺大殿の背面架構は正面と異なり、柱上組物は同じく四手先だが、繋ぎ梁は一鋪高く架けられ、下昂尻は虹梁を支持する肘木に接している。このような横材と組み込む下昂は、福建省に所在する華林寺大殿（五代 964 年・福州）と広東省に所在する梅庵大殿（北宋 996 年・肇慶）にも用いられ、保国寺大殿正面の束に挿し込まれる下昂と比べると北方横材系統との融和が読み取れるため、発展した形式と考えられる（図 2－2）。

以上によって、屋根を直接受ける原始的な下昂に近いものは、中国に現存する建物の中では保国寺大殿の一例しか確認されていないが、日本の飛鳥・奈良時代の建築にこの類型の下昂が多く見られる。

法隆寺金堂の初層と上層とも、その下昂は側通りの通肘木の間を通りぬけ、軒先では丸桁の荷重を受け、内部では入側通りの通肘木状の受け材に欠き込んでいる。入側桁を受ける束は下昂尻に欠き込み、下昂と受け材の上面に挿し込んで位置の移動を防いでいた。また、入

類型Ⅰ：①保国寺大殿正面柱上組物
類型Ⅱ：②保国寺大殿背面柱上組物　③華林寺大殿正面柱上組物
　　④梅庵大殿柱上組物

図 2-2 中国建築の庁堂系下昂

法隆寺金堂初層の尾垂木
（『国宝法隆寺金堂修理工事報告書』）

唐招提寺金堂の尾垂木
（『国宝唐招提寺金堂修理工事報告書』）

図 2-3 日本古代建築の下昂

側桁と側桁の間に、一本の母屋桁が加えられ、下昂の上にのせるようになっている。母屋桁と丸桁の荷重のバランスを取る面で見ると、法隆寺金堂の下昂は保国寺大殿の正面下昂に最も類似していると言える。

一方、解体修理が行われた唐招提寺金堂では、異なる事例が現れる。唐招提寺金堂の当初材と判断された下昂の尻に、釘穴と滑り防止の栓穴が発見され、下昂は桁に釘で固定されていたことが確認された。すなわち入側通の母屋桁は柱直上の束で支えられている。また、当初材下昂の側通から入側通までの間に痕跡はないため、庇天井の裏ではほかの部材と絡まないと推測されている[5]。そのため、下昂が母屋桁の荷重を直接受けていない点は唐招提寺金堂の下昂における特徴であり、下昂内側の自重で丸桁との荷重のバランスを取れた可能性もあるが、この点について今後さらに検討する必要がある（図２－3）。

村田健一氏は三手先組物をもつ日本建築を採り上げ、その軒先は下昂・通肘木・束で構成した三角形構造であると指摘している[6]。上述のとおり唐招提寺金堂の場合は少々特殊であるが、その他の三手先組物をもつ日本建築は、例外なく屋根を直接受ける下昂を用いているため、すべて斜材体系に属すると考えられる。

2―2 横材体系下昂

横材体系下昂は軒桁と母屋桁を受ける小屋梁の下面まで昂尻を伸ばすもので、屋根を支持する構造体の中に含まれていないと考えられる。現存中国北方遺構の中で、殿堂系下昂を用いる古い例として、仏光寺東大殿（唐 857 年・五台山）・鎮国寺万仏殿（五代 963 年・平遙）・独楽寺観音閣上層屋根（遼 984・天津）・奉国寺大殿（遼 1020・遼寧）・仏宮寺釈迦塔 1・2 階屋根（遼 1056・応県）が挙げられる。これらの遺構はいずれも上下２本の梁を用いる殿堂式架構で、柱上ではすべて 2 本下昂をもつ四手先組物を用いている。その上方の梁は軒桁を受けながら、柱上組物の下昂尻を押さえている。なお、下方の梁における組物の中に組み込まれる位置によって、二種類の構法が見られる（図２－4）。

上記の北方遺構では、母屋桁の荷重の一部は小屋梁を通して間接的に下昂尻に伝達している。これらの下昂は梃子の原理を利用し、上方の梁で下昂尻を押さえることによって、手先にのせる丸桁の荷重を受け、丸桁の高さを調整する役割を果たしている。そのため、横材体系の下昂は斜材体系の下昂より、構造的機能が退化したものであり、もっぱら丸桁を持ち出すための局所構造と考えられる。

そして、ここで注目すべき一例として挙げられる独楽寺観音閣下層屋根の柱上組物は、上層と同じ四手先であるが、下昂を用いず、四層肘木持ち送りで丸桁を支持している。下層の丸桁は上層の丸桁より軒出が浅いほかに、より高い位置まで持ち上げられている様子が明ら

5　奈良県教育委員会：『国宝唐招提寺金堂修理工事報告書』本編 1，p. 395，2009。
6　村田健一：「古代建築における三手先建物について」『奈良国立文化財研究所年報』，1997；「薬師寺式三手先と法隆寺式組物」『奈良国立文化財研究所年報』，1998。

類型Ⅰ：①仏光寺大殿　　②独楽寺観音閣
類型Ⅱ：③鎮国寺万仏殿　④奉国寺大殿　⑤仏宮寺釈迦塔初層

図 2-4 中国建築の殿堂系下昂

（『中国古代建築史』第三巻）

図 2-5 独楽寺観音閣の 2 種類の四手先

かである[7]。下層の場合、屋根は中間層の側柱より張り出しているため、内部に構造がない。だからこそこのような組物を用いることが可能である。これと対照的に観音閣の上層と下層の軒廻り組物は、軒先に用いられる下昂における構造的役割を示す好例と言える（図 2－5）。

ここまでに挙げられた実例において、斜材体系と横材体系とも下昂は虹梁（殿堂系の場合は明栿）より上に架かっているという共通点をもっている。後に、架構形式の発展に従い、この点に変化が生じていく。

2−3　挿昂と擬似下昂の登場

11 世紀以降、中国建築における木造技術は急速に発展し、架構形式に様々な変化が起きた。その中で最も代表的な変化は梁の発展である。梁の発展において、北方と南方の建築には異

7　郭黛姮：『中国古代建築史』第三巻，北京：中国建築工業出版社，p. 765，2003。

なる過程が見られる。

まず二つの梁構造をもつ北方殿堂式架構における梁の発展は、すでに先学によって指摘されたように、梁の断面が大きくなっていくと共に、下方の梁の位置が段々と高くなり、最終的に上方の梁と一体化され、軒廻り組物の上にのせる1本の梁になったと結論づけられる[8]。すなわち、下昂は明栿の上に架かるものから一体化された梁の下に敷くものになった。後に、この一体化された梁は軒桁だけではなく、丸桁も受けるようになったため、下昂尻は更に短くなり、側通りまでにしか伸ばさないものになった（図2－6）。

四手先組物：①仏光寺大殿（唐857年）　②崇福寺弥陀殿（金1143年）
二手先組物：③青蓮寺大殿（宋1089年）④仏光寺文殊殿（金1137年）

図 2-6 殿堂系下昂の変遷

天寧寺大殿（元1318年）
（『東来第一山―保国寺』）

延福寺大殿（元1317年）
（『東来第一山―保国寺』）

真如寺大殿（1320年）
（『中国古代建築史』第四巻）

図 2-7 庁堂系下昂の変遷

一方、南方では、虹梁の上にのせる下昂形式は元代遺構である延福寺大殿（元1317年・武義）と天寧寺大殿（元1318年・金華）においても確認できる。華林寺大殿や保国寺大殿と比べ、元代遺構の虹梁はかなり背の高いものである。この二例はともに2本下昂もちの三手先組物を用いているが、延福寺大殿の虹梁は天寧寺大殿より一鋪高い二手先の上にのせているため、二手目の下昂尻はこの虹梁に妨げられ、柱の直上で切られている（図2－7）。

8　先行研究として、陳明達：『応県木塔』（1980）・『営造法式大木作研究』（1981）；郭黛姮：『中国古代建築史』第三巻（2003）；賀大龍：『長治五代建築新考』（2008）；張十慶：『寧波保国寺大殿勘測分析与基礎研究』（2013）は挙げられる。

よって、北方建築における梁位置の上昇、そして南方建築における梁断面の増加は、柱上組物の下昂尻を制約し、下昂の退化を促した。構造原理に基づき、これら柱の直上で切られる下昂が柱上組物に出現し始め、後に「挿昂」という作法へと発展を遂げたと考えられる。

内側のない下昂は『営造法式』によって「挿昂」と呼ばれ、12 世紀以降の少林寺初祖庵大殿（北宋 1125 年・登封）と幾つかの金代遺構に見られる。少林寺初祖庵大殿は 1 本下昂もちの二手先組物を用いている。柱上組物の二手目は挿昂で、その手先にのせる斗は柱直上の斗より低い。営造法式によって「凡昂上坐枓。四鋪作、五鋪作並帰平。六鋪作以上、自五鋪作外、昂上枓並再向下二分至五分」という六鋪作から手先を下げる記述はあるが、それと異なり、少林寺初祖庵大殿は二手先即ち五鋪作から下がっている。これは中備組物の下昂に合わせた結果とも考えられ、下昂における手先の高さを調整しているように見せかけている。

また、10 世紀から 11 世紀にかけて、「仮昂」とも呼ばれる擬似下昂の使用が多く確認されるようになった。中国に現存最古の擬似下昂は崇明寺中殿（北宋 991 年・高平）の中備組物に見られる。崇明寺中殿は、柱上に 2 本下昂もちの七鋪作四手先組物を用いて、中備は側通りの通肘木から跳出する四鋪作の二手先組物である。その中備組物は同時期の遺構に多く見られる中間桁を支持するものと異なり、丸桁まで跳出している。そのため、二手目の肘木は四跳の長さを持ち出し、異常に長い材となっている。視覚的な不安定感を避けるために、この長い肘木に斜材の浮彫が施されたと考えられる。そして、このような斜材の浮彫を施された肘木は、後に見られる平出仮昂と関連性があるとも考えられる。建立時代は崇明寺中殿と同じく 10 世紀後半と推測されている晋祠聖母殿の場合、身舎の中備組物と裳階の柱上組物は平出仮昂を用い、それと対照的に身舎の柱上組物と裳階の中備組物は構造的下昂を使用している。なお、擬似下昂を用いる遺構をまとめて考察すると、北宋と南宋遺構には平出仮昂のほうが多く見られるのに対して、金代遺構はほとんど下向きの擬似下昂を用いていることが分かる。

図 2-8 装飾下昂の出現

挿昂や仮昂のような装飾下昂の登場に応じて、本来の構造的機能をもつ下昂は真昂と呼ばれるようになった（図２－８）。

2―4　下昂の機能における柱上組物から中備組物への転移

前述のとおり、下昂ははじめに柱上に用いられたが、梁の発展に従って退化していく現象が見られる。一方、柱上下昂の衰退と同時に、中備組物の発展に従い、下昂は中備組物にも用いられるようになり、さらなる発展を遂げた。

以下、まず『営造法式』の下昂に関する記述を例に、この時期に柱上組物と中備組物に用いられる下昂の構法を分けて検討する。

『営造法式』巻四「飛昂」の項目では、下昂尻の工法について下記の通りに記載されている。

> 若屋内徹上明造、即用挑斡。或只挑一枓、或挑一材両栔。…如用平棊、即自槫安蜀柱以叉昂尾。如当柱頭、即以草栿或丁栿圧之。
>
> 訳文
>
> もし屋内が徹上明造であったならば、挑斡を用いる。或はただ一枓を挑げるか、或は一材二栔を挑げる。…もし平棊を用いる場合は、即ち槫から蜀柱を安じ、それで昂尾を固定する。もし柱頭に当っていたならば、即ち草栿か、或は丁栿でこれをおさえつける。[9]

この記述を天井の有無に応じた二種類の処理手法として解読すると以下のようになる[10]。

①徹上明造の場合：下昂尻を伸ばし、その上に組物をのせて母屋桁をうける。記述に明示されていないが、ここの場合、柱上組物と中備組物は類似する手法を用いるため、分けて説明する必要がないと考えている。

②天井を張る場合：中備組物の下昂尻を束で固定し、柱上組物の下昂尻を草栿や丁栿で押さえる。ここで草栿に言及しているため、その主体は殿堂式架構と考えられ、柱上組物と中備組物を分けて記述している。

さらに、筆者はここで捉えられる組物の装飾的意義にも注目したい。実例の華林寺大殿と保国寺大殿では、背面の軒桁と母屋桁の下に桁行組物を積み重ねているが、前面天井裏の場合には、同じ箇所に組物ではなく束のような単純な構造を採用いている。そのため、それらの組物において、構造的機能より装飾的意義のほうが求められている。言い換えれば、見せる構造の中に組物を使用する原則はこの時期にすでに成立したと考えられる。

9　前掲注 4，竹島卓一氏：p. 276。

10　竹島卓一氏は「如当柱頭」より前の文章をすべて中備組物について述べるものと理解しているが、筆者は異なる視点から私見を述べたい。

以上によって、徹上明造を一般的に採用する庁堂式建築の場合、柱上と中備下昂の区別は小さいが、天井を張る殿堂式建築の場合、下昂は柱上と中備で異なる処理手法を用いることが分かる。しかし現存遺構の中で、下昂をもつ中備組物を用いながら天井を張る殿堂式建築の実例は確認されていない。すなわち、上述『営造法式』に記載されている種類②の実例はない。遺構から捉えられる殿堂系下昂の実態において、10 世紀までの本格的な殿堂型建築はほとんど柱上組物より小さい中備組物を用いているため、下昂を持たない中備組物が一般的である。そして 11 世紀以降、前述の架構形式の変化に従い、殿堂型架構形式の庁堂化[11]が見られ、天井を張らない遺構が大量に出現した。

奉国寺大殿（遼 1020 年・義県）は間口 9 間、奥行 5 間の大規模仏殿で、殿堂式と庁堂式の架構が混合した天井のない架構形式を用いる例と考えられる。その柱上組物と中備組物とも 2 本下昂もちの四手先組物である。図示したように柱上組物の下昂は下方梁の上を通り、上方梁に押えられている。一方、中備組物は内側の二手先の上に 4 重の通肘木を天井まで積み重ねているため、その下昂尻は通肘木で止まり、母屋桁まで伸ばしていない。

奉国寺大殿においては、架構形式の変化は見られるが、上下 2 本の梁は依然として用いられている。架構形式はさらに発展した後、一体化した梁の使用は北方の殿堂式建築にも普及した。晋祠聖母殿（北宋 11 世紀・太原）と隆興寺摩尼殿（北宋 1052・正定）はその初期的な例である。聖母殿と摩尼殿の身舎柱上組物に用いられている下昂はともに側通りで押えられ、屋内にわずかにしか伸ばさず、奉国寺大殿の柱上下昂より構造的機能は退化している。また、奉国寺の中備組物の下昂と比べて、聖母殿は内部で機能しない平出仮昂を中備に用い、摩尼殿は柱上下昂とほぼ同じ形式の中備下昂を用いている。そのため、聖母殿と摩尼殿は奉国寺大殿より架構形式が大きく発展している。ただし聖母殿と摩尼殿では、柱上の下昂に変化が現れているが、中備の下昂はまだ発達していない。

殿堂式建築の中で、中備組物に本格的な下昂を用いる最古の例は晋祠聖母殿の裳階に見られる。聖母殿の裳階は柱上組物に平出仮昂を用い、中備組物の下昂は母屋桁まで伸ばし、梃子の原理を利用した構造的機能を果たしている。このような構造的に機能しない柱上下昂と構造的機能を有する中備真昂の組合は、12 世紀以降の北方建築に多く見られる（図 2－9）。

一方、一般的に庁堂式建築に採用される徹上明造、すなわち『営造法式』の種類①の場合、柱上と中備の下昂はともに屋内まで伸ばし、組物を上にのせて母屋桁を受ける。その実例として、南方の保国寺大殿・梅庵大殿（北宋 996 年・肇慶）・元妙観三清殿（北宋 1015・莆田）などが挙げられる。14 世紀の元代以降、前述の虹梁断面の増加によって、柱上組物の下昂尻は梁に妨げられ、挿昂や仮昂のような屋内に伸ばさないものが主流になった。

以上のように、架構の発展に従い、殿堂式建築と庁堂式建築ともに柱上下昂が退化したのと同時に、中備下昂は梁の位置に影響されず、さらなる発展を遂げた。これはいわゆる下昂

11　前掲注 8 張十慶氏の観点を参考している。張十慶氏は 11 世紀以降に、北方の殿堂系建築の架構形式に庁堂化の傾向が見られると指摘している。

図 2-9 中備組物の下昂における発展過程

の機能における柱上組物から中備組物への転移である。中備組物における下昂の発達は、後の内部上昂の発展にも関係していると考えられる。

3 上昂の発展

上述の下昂は先端が下を向くもので、肘木より手先の高さを下げる効果がある。これに対して、上昂は先端が上を向き、手先の高さを更に持ち上げるものである。建物の外部に用いられる上昂の模様は、古くは四川省渠県の漢代石闕の隅部に確認される。上昂は下昂とともに斜材であり、その関連の有無について諸説はあるが、明確にされていない。

中備組物は唐代以降に発展し始めたため、下昂は最初に柱の上にのみ用いられた。これと同様に、上昂も柱上に登場し始めたと考えられる。『営造法式』に「上昂施之里跳之上及平坐鋪作之内」[12] という記述によって、その段階では上昂は一般的に組物の内側、あるいは平坐鋪作に用いられることが分かる。『営造法式』は上昂の使用における柱上と中備の区別に触れていないが、現存遺構の中で、中備上昂が多く見られるのに対して、柱上組物の上昂は一部の日本禅宗様組物にしか確認されていない。以下においては、『営造法式』と日中の建築をともに考察し、上昂の歴史的様相を解明したい（図 2－10）。

12　『営造法式』巻四　大木作制度一［飛昂］。

四川省渠県の漢代石闕
隅部の上昂
（『中国古代建築史』第二版）

営造法式の上昂
（『営造法式』四庫全書版）

図 2-10 漢代石闕の外部上昂と法式上昂

（『営造法式大木作研究』）

図 2-11 陳明達氏による法式上昂の復原

3−1　柱上組物の上昂

中国の遺構の中に柱上組物の上昂の実例は確認されていないが、陳明達氏は『営造法式』に基づき、宋式建築の柱上上昂に対して復原を行った。陳明達氏の復原図を参考にすると、組物の内側または平坐鋪作に用いられる上昂の構造的役割は、枠肘木構造に制限される出跳の長さの内に、組物の外側と内側の最上手先の高差を造ることであると考えられる（図 2－11）。

以下、遺構をもって『営造法式』の作法を検証する。平坐鋪作の外側と内側に高差を示す

図 2-12 遺構における手先の高さを調整する手法

実物が存在しないため、平坐鋪作での上昂の使用実態は不明だが、外側と内側の高差を表す柱上組物は仏光寺大殿の入側通りと鎮国寺万仏殿の側通りに見られる（図 2－12）。この二棟の遺構を考察すると、仏光寺大殿の場合、入側通り組物の内側は外側より 3 鋪高く上がっているが、上昂を用いず、外側と同じ高さの梁まで肘木で手先を出して、梁の上に水平材を積み重ねて高さを調整している。一方、鎮国寺万仏殿の柱上組物の場合、断面はほぼ 2 鋪の高さに達する梁を利用して、出跳の長さを増やさず、内側の手先を上げている。さらに、この二例に対して注目すべきなのは、中備組物における内外高差の処理手法という点である。中備組物は梁を利用することが出来ないため、二例とも中備組物に挿肘木を用いて内側の出跳の長さを減らしている。

これらの遺構によって、『営造法式』の柱上上昂と同じ役割を果たせる手法は確認されるため、柱上組物に上昂を用いる必然性はないと言えるだろう。

一方、日本の禅宗様建築に、虹梁の上にさらに上昂を用いる柱上組物は多く見られる。その代表的な例として、西日本では善福院釈迦堂（1327 年・和歌山）、関東では正福寺地蔵堂（1407 年・東京都）が挙げられる。禅宗様建築は中国江南地方の庁堂型建築と関連性をもつと一般的に考えられている。しかし、中国の庁堂型遺構を考察すると、中国では虹梁の上に必ず束や組物をのせ、柱上組物の内部と組合せている点が日本の禅宗様建築と大きく異なっている。禅宗様建築の柱上上昂に対して注意すべきところは、禅宗様が日本に伝来した際に、野小屋技術はすでに発達しており、直ちに禅宗様建築にも用いられるようになったことである。禅宗様建築は現存する中国江南地方の宋元建築と比べて、その組物は化粧屋根のみを支持するため、構造的役割は小さいと考えられる。そして、中国の宋元建築における一体化した組物と架構とは対照的に、禅宗様建築では側通り組物と内部架構の分離が見られる（図 2－13）。

善福院釈迦堂の柱上組物
（『国宝善福院釈迦堂修理工事報告書』）

正福寺地蔵堂の柱上組物
（『国宝正福寺地蔵堂修理工事報告書』）

図 2-13　上昂を用いる禅宗様柱上組物

3−2　中備組物の上昂

前述のように中備組物における下昂が発達を遂げた後、その下昂尻を支持する組物の内部構造も発展した。北方建築は肘木で跳出し、「鞾楔」[13] を用いて下昂尻を支持する例がほとんどだが、南方建築の中備組物では上昂が用いられるようになった。

以下では、ともに組物に用いられる斜材である下昂、挑斡と上昂の区分について改めて検討したい。学界の定説はまだないが、張十慶氏による下昂・挑斡と上昂における荷重の受け方の違いを指摘している研究[14] は先駆的である。筆者は組物の一部としての昂の形式を中心に、下昂、挑斡と上昂の定義について以下のように私見を述べたい。

下昂尻は外側に跳出する下昂の内側の総称で、構法に関わらない呼称と考えられる。挑斡は内側のみの上を向く斜材で、組物を先端にのせて母屋桁を受ける。そして最上の手先でもある。挑斡においては、この 2 つの特徴は不可欠である。一方、同じく上を向く斜材であるが、その上に更に手先[15] を出すものは上昂と考えている。

日中建築を考察すると、14 世紀以降、中国江南地方の建築と日本の関東系禅宗様建築[16] に［外部仮昂＋内部上昂］の組合を用いる中備組物形式が現れた。その代表的な例として、真如寺大殿（元 1320・上海）・正福寺地蔵堂（1407・東京）・西願寺阿弥陀堂（1495・千葉）・円覚寺舎利殿（14 世紀・神奈川）が挙げられる。

関口欣也氏は日本の禅宗様組物に対して、［上下尾垂木が内外とも一木をなすもの］を A

13　読み「かせつ」、勾配をもった上昂と水平の華栱との間にできる三角形の隙間に詰めるもの。手挟み（前掲注 4，竹島卓一）。

14　張十慶「南方上昂与挑斡作法探析」『建築史論文集』，2002 年 02 期，pp. 31-45。

15　張十慶氏によって指摘されているとおり、『営造法式』と江南建築の上昂は異なる体系に属している。筆者は補足として、『営造法式』の上昂はその上にさらに手先を出さないが、鋪を増やしていると指摘しておく。

16　関口欣也氏の見解によって、禅宗様建築は関東系と西日本系に分けられる。

図 2-14 尾垂木をもつ中備組物の分類

型、［上尾垂木は内外とも一木をなすが、下尾垂木は外部で仮昂、内部で上昂をもつもの］をB型と分類し、両者を中国における二型の併存状態を反映したものと指摘している。しかし、関口氏によってB型として挙げられている中国の保聖寺大殿（1073・角直）は、内部上昂を用いているが、外部に仮昂の手法はない。そのため、先行研究を踏まえつつも、本章における下昂と上昂についての考察に基づき、筆者は江南建築と禅宗様建築の尾垂木をもつ中備組物を以下の三種類に分類する（図 2－14）。

類型Ⅰ　内外一木の真昂あるいは挑斡を用い、上昂を持たないもの

類型Ⅱ　内部に上昂を用いるもの

類型Ⅲ　内部に上昂、外部に仮昂を用いるもの

そのうち、類型ⅠとⅡは関口欣也氏に指摘されたとおりに併存していたが、類型Ⅲの外部仮昂は柱上組物に出現し始めた擬似下昂の影響を受けたと考えられる。そのため、類型Ⅲの登場は、中備組物の下昂と上昂が成熟した後に、退化した柱上擬似下昂の装飾性を吸収した結果であると考える。すなわち中備組物における内外の構造の分離とも言える。

中国では、さらに時代が下った明清時代になると、北方の官式建築にもこのような［外部仮昂＋内部上昂］の形式が一般的に用いられるようになった。

4　装飾尾垂木における日中の発展

4−1　中国建築の装飾尾垂木

中国元代のおよそ百年間、南方では南宋建築を継ぎ、北方では金代建築に基づき、それぞれ発展し続けた。明代初期、南京から北京への遷都は南方と北方技術の融和を促すきっかけとなり、木造建築は元代のバリエーションの多いものから一変して、官式を改めて確立した[17]。

尾垂木の形式において、柱上組物の場合、明代以降に真昂を用いるものはほとんど姿を消し、装飾の仮昂は一般的に柱上組物に用いるようになった。中備組物の場合では、［外部仮昂＋内部上昂］の形式は元代以降に定着し、用いられ続けた。しかしさらに上昂も装飾材になった［外部擬似下昂＋内部擬似上昂］の形式は、元代以降の建物に多く見られる。それらの外部擬似下昂と内部擬似上昂はいずれも水平の肘木の表面に浮彫された模様で、完全に装飾化された尾垂木といえる。漢宝徳氏によって、肘木に彫刻された擬似尾垂木は北方建築における水平材の伝統が取り戻された結果であると指摘されている[18]。

一方、真昂や挑斡の形態を継承したと考えられる「溜金斗科」は清代の官式に存在している。溜金斗科は内側に数本の斜材を積み重ね、入側通まで伸ばし、側通と入側通を連結する組物形式で、その内側の斜材は荷重を一切受けず、尾垂木の構造的機能を持たない単なる連結材となっている（図 2－15）。

図 2-15 擬似上昂と溜金斗科

4−2　日本禅宗様建築の装飾尾垂木

中国の元代以降、日本と朝鮮半島では、古代建築と異なる詰組系統の建築様式が 13 世紀頃に新たに伝来し、日本の禅宗様建築と朝鮮の多包建築を成立させた。これら日本と朝鮮半島の詰組系建築の尾垂木については、以下の先行研究が挙げられる。

飯田須賀斯氏は日本禅宗様組物に対して、上尾垂木上にのる秤肘木の高さが背後の肘木高

17　朱光亜：「第九章建築結構与装修技術：第一節大木技術」『中国古代建築史』第四巻元、明建築，北京：中国建築工業出版社，p. 428-455，2001。

18　前掲注 3，pp. 79-81。

さと一致することに注目し、『営造法式』の尾垂木を用いて手先の高さを下げる形式と異なるため、禅宗様組物は中国南宋以後の形式を導入したものと考えている[19]。

関口欣也氏は禅宗様組物の断面における最大の特徴を、尾垂木尻を用いて化粧母屋を支える点であると指摘し、尾垂木における手先数との関係・尾垂木尻の構造的役割・上下尾垂木尻の相互関連に対して考察を行った。その結果として、日本の詰組系禅宗様尾垂木形式は主に関東系と西日本系に分けられ、上下尾垂木が優角となすのは関東禅宗様組物の特徴とされている。また、その地域的相違の原因に対して、関口欣也氏は関西と関東の各寺院の伝統が独立であったからだと推測している。また、それらの組物形式は地方色のほかに、建築的権威を示すものとして見るべきであるとも指摘している[20]。

先行研究を踏まえ、筆者は尾垂木の装飾化発展に注目し、装飾尾垂木を用いる禅宗様組物を主たる対象として、その様相を以下のように考察する。

外部に装飾尾垂木をもつ禅宗様遺構は、安楽寺八角三重塔（1290 年代・長野）・鑁阿寺本堂（1299 年・栃木）・正福寺地蔵堂（1407 年・東京）・円覚寺舎利殿（室町初期・神奈川）・西願寺阿弥陀堂（1495 年・千葉）・定光寺仏殿（1500 年・愛知）・園城寺経蔵内輪蔵（室町末期）が挙げられる。

鑁阿寺本堂中備組物の仮昂（『鑁阿寺本堂調査報告書』）

安楽寺八角三重塔の仮昂
（文化庁実測図面）

東大寺鐘楼の仮昂
（『国宝東大寺鐘楼修理工事報告書』）

安国寺経蔵内輪蔵の仮昂
（『中世禅宗様建築の研究』）

図 2-16 日本禅宗様建築の装飾尾垂木

19　飯田須賀斯：『中国建築の日本建築に及ぼせる影響』，東京：相模書房，p. 126，1953。

20　関口欣也：「中世禅宗様仏堂の斗栱（一）」『日本建築学会論文報告集』No. 128，1966. 10（『中世禅宗様建築の研究』東京：中央公論美術出版，pp. 183-191，2010 に収録）。

そのうち、鑁阿寺本堂・正福寺地蔵堂・円覚寺舎利殿・西願寺阿弥陀堂・定光寺仏殿の下一本の尾垂木には斜材の彫刻が施され、一見挿昂のように見えるが、実際は肘木と一材をなす擬似尾垂木いわゆる仮昂である。一方、一般的な仮昂は安楽寺八角三重塔・園城寺経蔵内輪蔵に見られる。そのうち、安楽寺八角三重塔は日本唯一の詰組をもつ塔で、2 本尾垂木は上下とも仮昂を用いている。その仮昂の角度は極めて緩く、宋代建築の平出仮昂との関連性が考えられる。これは注目すべきことである。また、一般的な仮昂と異なる形式をもつが、東大寺鐘楼（1207 ～ 10・奈良）と安国寺経蔵内輪蔵（1407・岐阜）の肘木の先端で造作された尖っている模様も装飾尾垂木であると考えられる（図 2－16）。

以上によって、尾垂木における装飾化発展過程の中に存在していた挿昂や平出仮昂など様々な形式は、日本の禅宗様建築にほとんど反映されている。元・明代以降、中国建築における北方技術の復興は日本建築にそれほど大きな影響を与えず、装飾尾垂木をもつ禅宗様建築は日本で定着し、独自に発展し続けたと見られる。

5　華頭子からみた日中建築の尾垂木形式

尾垂木をもつ組物の場合、跳出する力肘木と斜めの尾垂木は必ず交差する。その 2 つ部材の交差方法により、組物における変遷が読み取れる。

『営造法式』では、尾垂木と力肘木の交差点に該当し、華栱（力肘木）の先端が巻斗口から出て、尾垂木の角度と合わせた尖っている部分を「華頭子」という。それに関する記載は以下となる。

> 若従下第一昂、自上一材下出、斜垂向下、枓口内以華頭子承之。（華頭子自枓口外長九分、将昂勢尽処、勻分刻作両巻瓣、毎瓣長四分）。[21]
>
> 訳文
>
> もし下から第一昂で、上から一材が下を向いて斜めに持出される場合は、斗口の内で華頭子をもってこれを承ける。（華頭子は斗口から外へ出る長さを九份にとり、まさに昂勢の尽きるところで二等分し、二つの巻瓣をつくる。そして、その瓣の長さは四分にとる。）[22]

華頭子の役割について、竹島卓一氏は「華栱の先端で下昂を承ける場合に、下昂が斜めに下ってくる関係で正規の形が取れなくなる。そのため先端を斜めに殺がれたもの」[23] と解釈している（図 2－17）。

21　『営造法式』巻四　大木作制度一［飛昂］、竹島卓一氏と梁思成氏の読み方を両方とも参考にした。
22　前掲注 4，竹島卓一氏：p. 275。
23　竹島卓一：「用語解説」p. 8『営造法式の研究』三，東京：中央公論美術出版，1997（初版 1972）。

図 2-17 『営造法式』の華頭子

華頭子は宋代に成熟し、後世の尾垂木をもつ建築において、定着した組物形式の一部分と見られている。また、華頭子の有無とその形式の変化は、組物の発展過程における幾つかの段階も表している。日中遺構の中で、華頭子のそれぞれの発展段階を表す例が挙げられる。以下、華頭子に焦点を当て、両国の遺構をともに考察することによって、華頭子そして尾垂木の変遷を明らかにしたい。

5−1 華頭子を持たない尾垂木の架け方

『営造法式』を代表とする宋式建築において、華頭子は尾垂木をもつ組物の不可欠な一部分として確立されている。しかし中国宋代までの遺構、そして日本建築に、華頭子を持たずに尾垂木を用いる実例は多く見られる。それら華頭子をもたない建築の尾垂木は、その架け方によって、以下 3 つの類型に分けられる。

Ⅰ—法隆寺・薬師寺東塔型

法隆寺型雲形組物の場合、尾垂木は雲形肘木の先端に直接のせ、その間に連結材を持たない。奈良時代の薬師寺東塔と海龍王寺五重小塔もそれに類似し、横方向の変形に弱いなど構造上の欠陥は依然として残るが、二手目肘木の上に巻斗を用いることによって、雲形組物より尾垂木の位置を固定しやすくなっている。

薬師寺東塔と海龍王寺五重小塔は解体資料の不足により、斗口内の収まりは不明だが、醍醐寺五重塔の尾垂木の巻斗斗口に当たる部分を参照すると、力肘木の先端を斜めに削いだ上で、巻斗斗口内の一部も斜めに加工して、尾垂木を受けている。薬師寺東塔と海龍王寺五重小塔も同じような処理法を採用している可能性が高い。尾垂木と力肘木を巻斗の斗口の中に組み込む場合、巻斗の斗口は大きく削がれるほか、2 つの部材のズレに影響され、傷みやすいと考えられる。

Ⅱ—唐招提寺金堂・仏光寺東大殿型

組物の跳出する部分の横方向の連結を強化するために、唐招提寺金堂のように二手先の上に秤肘木をのせ、その上に桁を架ける形式が登場した。中国遺構の中にも、北方の仏光寺東大殿・鎮国寺万仏殿・独楽寺観音閣上層屋根・崇明寺中殿・奉国寺大殿・仏宮寺釈迦塔初重

と二重屋根の六ケ所は類似例として挙げられる。それらの遺構はいずれも二手先の上に秤肘木を用いながら、二手目の斗口の中に尾垂木をのせている。

唐招提寺金堂の解体修理写真を見ると、二手目斗口の中で尾垂木・秤肘木・力肘木 3 つの部材が交差し、秤肘木の断面も大きく削り取られている。

Ⅲ―和様三手先型

奈良時代の元興寺極楽坊五重小塔からはじめ、後世の和様三手先に伝わった尾垂木の架け方は日本独特な発展形と考えられる。

唐招提寺金堂と比べ、元興寺五重小塔は尾垂木を巻斗の斗口から持ち上げ、秤肘木の上の面を斜めに削いで尾垂木をのせている。唐招提寺金堂より、斗口部分の仕口は単純化され、秤肘木の開け口も小さくできる。上からの荷重は尾垂木から秤肘木へ、秤肘木から巻斗へ伝達していく。

日本古代建築における尾垂木を持つ 15 棟の遺構の中で、醍醐寺五重塔・平等院鳳凰堂中堂・一乗寺三重塔など合計 8 例はこの形式を表している。これらの遺構において、尾垂木の秤肘木に組み込む部分の深さはそれぞれだが、すべての例において巻斗より上から尾垂木を出していることは明らかである。この和様三手先型は後世の建築まで伝わり、類型Ⅰ とⅡより構造発展をした形式と言える（図 2－18）。

5―2　華頭子を用いる尾垂木の形式

日本建築の場合、力肘木は秤肘木より前に出さない和様三手先型の尾垂木が定着したが、中国建築の場合、五代の華林寺大殿に華頭子の使用がすでに確認される。北宋建築である南方の保国寺大殿、北方の隆興寺摩尼殿・晋祠聖母殿にも華頭子は用いられ、南宋・金代になると、華頭子と尾垂木を対に用いる組物は全国的に普及した。華頭子を出すことによって、尾垂木を受ける手先先端の構造は秤肘木と力肘木の両方向に固定されるため、和様三手先型よりさらに構造的に安定すると考えられる。

また、南宋・金の時代に、仮昂の出現とともに、仮昂に彫刻された「隠出華頭子」という見せかけの華頭子が登場し始め、元代から明代初期には、仮昂に見せかけの華頭子を施すものは主流形式であった。

一方中世以降の日本建築は、和様三手先の場合、華頭子をもたない古式を継承したものが主流であったが、羽黒山五重塔（1377 年・山形県）のような華頭子を用いる和様三手先もともに存在し、禅宗様組物から影響を受けた可能性が考えられる。なお、現存中世禅宗様建築の組物はほとんど華頭子を用いて尾垂木を受けており、2 本尾垂木の三手先は、下方尾垂木の下だけではなく、上方尾垂木の下も華頭子を用いるのが一般的である。しかし、その 2 本の尾垂木がともに真昂の場合、上方の華頭子は力肘木の先端ではなく、もっぱら華頭子を出すための付加部材である。それは、中国元代以降の 2 本仮昂をもつ水平材系統の北方遺構と類似する外観を表しているため、華頭子における装飾化の傾向が見られる（図 2－19）。

類型Ⅰ　斗口の中2つの部材が交差
（『国宝建造物醍醐寺五重塔修理工事報告書』）

類型Ⅲ　秤肘木の上にのせる尾垂木
（『国宝元興寺極楽坊五重小塔修理工事報告書』）

類型Ⅱ　斗口の中で3つの部材が交差
（『国宝唐招提寺金堂修理工事報告書』）

図 2-18 華頭子を持たない尾垂木の架け方

功山寺仏殿（1320年）
（『中世禅宗様建築の研究』筆者加筆）

北岳徳寧殿（元1270年）
（『斗栱』筆者加筆）

図 2-19 二段華頭子をもつ日中建築

6　おわりに

以上のように、日中建築に見られる下昂と上昂を、柱上組物または中備組物に用いられるものに分けて考察を行った。木造建築における尾垂木の変遷を整理・要約すると以下の三点となる。

その一、尾垂木形式を通して、大陸建築における南方の斜材体系と北方の横材を主たる体系の相違が見られる。架構形式の発展に従い、斜材体系は構造的優位を失ったが、その装飾性は重視され、北方の官式建築の中にも多く取り入れられた。

その二、梁構造の成熟によって、柱上尾垂木の装飾化に伴い、構造機能を果たす尾垂木が柱上組物から中備組物へ転移する現象は、北方と江南地方を含め、中国の広い地域に見られる。柱上組物の外部に出現し始めた擬似尾垂木は後に中備組物にも影響を与えたため、統一された側廻り組物の外観を成立させた。

その三、中国建築において、組物全体における構造的役割の衰退はさらに尾垂木の装飾化を促進した。一方、日本禅宗様建築は早い段階で野小屋技術を導入し、組物を架構から解放し、外部と内部ともに装飾性の強い斜材の尾垂木形式を受け継いだ。なお、日本禅宗様建築の尾垂木形式から見ると、大陸建築の尾垂木の装飾化における様々な発展段階を示す形式は日本の各地に輸入され、混在していた。

第二部　架構形式の変化と組物の発展

第3章　日中建築における架構形式の変化

1　はじめに

周知の通り、奈良時代に将来した唐の建築様式は和様建築の基礎を築いた。しかし日本の平安時代の初期にあたる大陸の唐王朝は度々の戦乱に巻き込まれたため、終に894年に日本は遣唐使の派遣を中止した。それ以後、12世紀に東大寺の復興による宋代建築様式の伝来まで約三百年の間は、民間貿易は断絶しなかったが、日本建築は大陸からの影響をほとんど受けることなし、独自の文化に基づいて発展した時期と考えられ、大陸建築様式の「日本化」とも言われる時期である[1]。

一方、10～13世紀の中国においては、唐王朝が滅亡した後、様々な地方政権が乱立した五代十国時代を経て、遼と宋、後に金と宋のように北方と南方が長い間対峙していた。その間に、政権の衝突による人口の移動は建築技術の伝播と建築様式の融和を果たし、中国木造建築を飛躍的に発展させた。

そのため、10～13世紀の間に、日中建築はそれぞれ独自の発展を行った結果、日中建築における空間構成・架構形式・木造技術など様々な面で相違が現れた。以下、10世紀以降の日中両国の建築における空間構成と架構形式の変化に注目し、両国建築の発展過程における関連性と相違点の解明を試みる。

2　寺院建築における空間構成の変化

2−1　日本中世本堂の形成

平安時代以降の日本の仏教建築に起きた変化について、日本の研究者は様々な面で考察・検討し、多大な成果を発表した。それらの研究成果を要約すると以下のようになる。平安時代の約四百年間は、大陸建築様式が日本化した時代であり[2]、仏堂の空間構成の面では、仏堂の前方に礼堂が発生・発展し、最終的に仏堂と一つの建物として統合され、内外陣をもつ中世本堂の基本型として確立した[3]。

1　太田博太郎：『日本建築史序説』増補第二版，東京：彰国社，p. 84，2005（初版1947）。
2　田邊泰：『日本建築の性格』，東京：相模書房，p. 104，p. 123，1942；太田博太郎：『日本建築史序説』，東京：彰国社，pp. 84-88，2005増補第二版（初版1947）。
3　伊藤延男：『中世和様建築の研究』（彰国社，1961）；関口欣也：『日本建築史基礎資料集成』仏堂Ⅳ（中央公論美術出版，1975）；太田博太郎：「概説」『文化財講座日本の建築』中世Ⅱ（第一法規，1977）。

礼堂の登場に対して、井上充夫氏は仏堂における内部空間の発展に注目し、礼堂の発生は「人間専用の内部空間」の成立を示したと評価している[4]。礼堂が発生した原因について、山岸常人氏は下醍醐伽藍の考察を通して、礼堂は元来回廊で囲まれた前庭で行われた法会のための空間であると具体的に提示した[5]。近年、藤井恵介氏は広隆寺仏堂群を考察し、金堂内部の土間と対照に庇と礼堂は板敷であることに注目し、奈良時代末から平安時代初期にかけて、新たに誕生した夢見を求める礼拝方法が、礼堂の登場と関連していると新たな視点から試論を展開した[6]。

以上によって、礼堂は人間の空間に対する需要に応じて登場したと一般的に認識されている。そして後に、当初別棟であった礼堂と金堂は一つの建物として統合され、中世的な本堂形式が出来上がった。このような変化はいつのことか明らかにされていないが、太田博太郎氏は「仏堂の和風化は金堂を板敷にする方向に進んでいた」こと、そして金堂と礼堂の間は扉から格子に変わり、両堂は「一つの屋根の下に納まるようになると、金堂の前面の庇を略して、直ちに礼堂をつけた形となる」と、その経緯を記述している。

一方、礼堂の具体的な形を論ずることによって、井上充夫氏は礼堂と金堂が統合される原因について一つの解釈を提示した。井上充夫氏は元来に［正堂と別棟をなすもの］と［正堂の前庇であるもの］の二種類の礼堂があると説明し（図 3－1）、前者は正堂との間に外部空間をもつのに対して、後者は前庇の屋根の高さに制限され、奥行きの深いものになれないとそれぞれの問題点を指摘している。そして礼堂と金堂は一つの建物に統合されることで、これらの問題点は解決されたという[7]。

以上の既往研究をまとめると、日本仏堂における礼堂は［①人間専用の空間の需要］と［②法会場所の転移・礼拝方法の変化］に応じて発生した。その後、礼堂と正堂は一つの室内空間にしたのは、［①気候に妨げられないように礼堂と正堂の間の外部空間を消滅する］ため及び［②礼堂（人間の空間）を拡大するため］であった。

2−2　中国の寺院建築における空間の変化

日本仏堂において中世に人間の空間が相対的に比重を高めてゆくことは、清水擴氏によって、「仏教という異国の宗教が次第に消化吸収され、日本人の感覚に合うように同化させられてゆく、その道程を示すもの」と言われている[8]。しかし、10 ～ 12 世紀の中国建築にも類似する現象が捉えられる。

4　井上充夫：『日本建築の空間』，東京：鹿島出版会，p. 164，1972（初版 1969）。

5　山岸常人：『中世寺院社会と仏堂』，東京：塙書房，p. 60-63，1990。

6　藤井恵介：「夢見と仏堂―その礼堂の発生に関する試論―」『空間史学叢書 1　痕跡と叙述』，東京：岩田書院，pp. 25-43，2013。

7　前掲注 4，井上充夫：pp. 161-163。

8　清水擴：「平安時代の寺院建築」『文化財講座日本の建築』古代Ⅱ・中世Ⅰ，東京：第一法規，p. 75，1976。

図 3-1 日本の仏堂における礼堂の変遷

中国唐代までの寺院建築の空間構成について、文献資料や発掘資料は不足しているが、敦煌石窟の壁画に描かれている仏教建築によってその一面が窺える。莫高窟第 148 窟と第 172 窟の経変図は、いずれも仏殿の前に広い台があり、仏はその上で菩薩に囲まれて説法している。また、台の上に建築の痕跡はなく、仏の上方のみに天蓋が飾られている。これらの唐代壁画の内容を隋代壁画と比較すると、開放感を感じられ、画面の主体は仏殿よりその前方の台になっていることが明らかである。このような外部空間を利用して行事を行う場面は、日本の奈良時代寺院における法会が仏堂の前庭で行われる記述と一致している。

中世以降になって、日本仏堂の礼拝空間は前述のとおりに室内にされたのと異なり、中国仏殿は前方の広い外部空間を礼拝空間として使用し続けた。唐代の南禅寺大殿をはじめとして、遼代の独楽寺観音閣・奉国寺大殿・下華厳寺薄伽経蔵殿・善化寺大殿・善化寺普賢閣、北宋の隆興寺の中心軸線に位置する主要な建築、そして金代の上華厳寺大殿・善化寺三聖殿・善化寺天王殿・崇福寺弥陀殿・観音殿など、多くの遺構は前方に広い月台をもち、法会や礼拝の場として使用したと考えられている。これら仏殿や楼閣前方の月台は、唐代壁画の中央に表現された台と関連性をもつと考えられる（図 3－2）。

一方、唐代以降、中国仏殿における内部空間、特に礼拝空間の拡大化傾向を指摘したい。このような傾向について、張勃氏と張延氏は中国在来の礼拝方法に影響され、寺院建築の内部における仏壇を廻り歩くための空間より、礼拝するための空間のほうが強化されたと指摘している[9]。具体的に、仏壇前方の内部空間を広げるために全体の架構形式を調整する手法が確認できる。その詳細については次節で詳しく分析するが、ここで注意すべき点は、中世以降日中建築内部の礼拝空間はともに広くなったが、両国建築における内部空間は異なる構成を示したということである。

9　張勃：「漢伝仏教建築礼拝空間源流概述」『北方工業大学学報』Vol. 15 No. 4, pp. 60-64, 2003. 12；張延・周海軍：「中国伝統仏道建築中拡大前部礼拝空間形式初探」『建築史』第 26 輯, pp. 14-23, 2010。

莫高窟第148窟東壁北側薬師経変図　トレス
（『敦煌建築研究』）

莫高窟第148窟東壁南側無量寿経変図　推測平面図
（『中国古代建築史』第二巻）

莫高窟第148窟東壁北側薬師経変図　推測平面図
（『中国古代建築史』第二巻）

莫高窟第172窟北壁無量寿経変図　推測平面図
（『中国古代建築史』第二巻）

奉国寺大殿平面図
（『中国古代建築史』第三巻）

崇福寺弥陀殿・観音殿配置図
（『朔州崇福寺』）

隆興寺宋代建築群配置図
（『正定隆興寺』）

図 3-2 仏殿前方の月台

（『義県奉国寺』）

図 3-3 奉国寺大殿の空間構成

奉国寺大殿の内部動線　（筆者作成）　華厳寺大殿（復原）の内部動線

図 3-4 中国仏殿の内部動線

日本建築における正堂と礼堂の結合過程を示す貴重な例として当麻寺曼荼羅堂が挙げられる。現存の当麻寺曼荼羅堂は永暦 2 年（1161）に再建されたものと考えられているが、転用材の調査によって、平安初期までに前面に大きな孫庇が付加されていたことが分かった。永暦 2 年になると、曼荼羅堂は前庇を撤去し、正堂に密着する礼堂を改めて付加し、内陣・外陣をもつ中世本堂になった[10]。井上充夫氏は、当麻寺曼荼羅堂の礼堂は正堂と合体したが、礼堂部の舟底天井から見ると、「正堂と礼堂は別個の空間であるという意識は残存している」と主張している[11]。また、中世以降の礼堂付き密教本堂において、内外陣境の柱列、またはその柱間の建具があり続けたことは、堂内で仏の空間と人間の空間の厳格な区別を示している。

一方、中国の仏殿の場合、奉国寺大殿を一例として挙げると、その仏壇と礼拝空間の間に柱列は配置されるが、実体的遮断はないことが分かる。さらに、仏壇の脇と後方も前方の礼拝空間と繋がり、歩き回れるような空間となっている。殿内の壁面に大量な壁画が施されているため、温玉清氏は殿内の空間が「七仏空間」・「礼拝空間」・「壁画鑑賞空間」の三つの区域に分けられると主張している（図 3－3）。

上述の先行研究を踏まえ、筆者は伽藍配置の視点から殿内空間の性質について以下のよう

10　『国宝当麻寺本堂修理工事報告書』（奈良県教育委員会，1960）、岡田英男：『大和古寺大観』2（岩波書店，1978）『日本建築の構造と技法』（思文閣出版，2005）を参照。

11　前掲注 4，井上充夫：pp. 176-178。

に補足したい。まず、史料によって、奉国寺大殿の後方にはかつて「後法堂九間」[12]が建てられ、華厳寺にも金代再建の際に大殿の後方に七間の法堂が存在していた[13]。両者とも背面の出入口を通して、後方の法堂へ直接アクセスできると考えられる。そのため、奉国寺大殿の「壁画鑑賞空間」は同時に通過するための通路にもなっていたと推測できる（図3－4）。

また、床を全面に張る日本の中世本堂と比べると、本堂に入るときに靴を脱ぐ必要があるため、出るときは同じ出入口に戻らなければならない。そのため、廻り歩くことを辞め、外陣のみで礼拝する方法は適切である。日本の中世本堂と異なり、中国の仏殿の室内も土間であるため、仏殿の出入りは容易である。中国の仏殿は入口と出口を使い分けることによって、殿内の礼拝動線と他の建物へのアクセス動線を統合した。後世の中国寺院に一般的に採用される中心軸線に沿って伽藍全体を巡回する動線は、この時代に既に確立されたと考えられる。

以上によって、中国仏殿の内部空間は伽藍全体を歩き回る動線の一環としても使われ、人々は外部空間と内部空間に交互に出入りしたことは推測される。井上充夫氏による礼堂の室内化を促進した日本の天候の影響は、乾燥地区に位置する中国北方の寺院にとって問題にならなかったのだろう。

なお、日中仏殿における中世に生じたこのような内部空間の性質的差異によって、後世日本と中国の寺院配置は全く異なる方向に向かって発展した。日本和様建築の場合、広い外陣をもつ本堂は多様な機能を果たしながら、仏の空間と人間の空間をはっきりと区別し続けた。また、本堂の内部空間に様々な工夫がされるとともに、建物の間の関連性は弱くなっていく。一方、中国仏殿の内部では仏の空間と人間の空間の境界が消えた。寺院計画は中心軸線に沿った伽藍配置の基本形を守り続け、伽藍内の各建物を繋ぐ動線の計画・誘導に力を入れてきた。

3　架構形式の革新

日本の古代建築において、「身舎＋庇」という架構形式は一般的であった。中世以降、野小屋技術の普及によって「身舎＋庇」構成は変化し、日本建築における架構形式の革新を遂げた。日本中世本堂の成立過程とほぼ平行に、10世紀から12世紀にかけて中国建築にも架構形式の変化が見られる。

3−1　伝統的な「身舎＋庇」架構

日本に現存する奈良時代の仏堂は、扠首組や二重虹梁など様々な架構を用いているが、「身舎＋庇」の基本的構成に従う点は中国と同じである。一方、中国唐代の遺構は不足しているが、現存する幾つかの仏殿に「身舎＋庇」構成に基づいた架構形式が見られる。

12　元・至正十五年（1355年）『大奉国寺庄田記』石碑の碑文により。
13　金・大定二年（1162年）『大金国西京大華厳寺重修薄伽教蔵碑記』により。

以下、比較対象として多く論じられた日本の唐招提寺金堂と中国の佛光寺大殿を採り上げて日中建築の「身舎＋庇」構造の異同に対して考察を行う。

唐招提寺金堂と佛光寺大殿はともにその時代の最高級の建物で、同じく吹き放しの前廊をもつ「三間四面」堂である。唐招提寺金堂の場合、天井より上の野小屋部分は後世に改造され、浅野清氏による奈良時代の野小屋形式を復元した案がある[14]。2000 年から 2009 年にかけて行われた解体修理の情報によると、身舎まで伸ばしている 26 本の尾垂木のうち 12 本は当初材である。これら当初材に残された痕跡によると、庇天井の上では、尾垂木はほかの部材と絡まないことが判明された[15]。そのため、庇部分の尾垂木の納まりは浅野氏復元案に近いものと考えられる。唐招提寺金堂の架構を考察してみると、その特徴として以下の三つがある。

①庇柱は身舎柱より背が低く、繋虹梁は身舎柱の柱身に挿入する。

②庇の屋根は尾垂木によって構成され、繋ぎ梁は身舎と庇を連結する通し材に過ぎない。

③天井の上は荷重を受ける構造で、天井の下は装飾性を重視した見せる構造である。

一方、仏光寺大殿は「身舎＋庇」構成に見える柱配置をもつが、唐招提寺金堂との共通点として上記の③しか示していない。対照に、仏光寺大殿の架構の特徴は以下のようにまとめられる。

①庇柱は身舎柱と同じ高さで、天井下の繋ぎ梁（明乳栿）は組物層の一部でもある。

②庇の屋根は天井裏の繋ぎ梁（草乳栿）によって支えられ、尾垂木は軒先の部分のみを支持する。

③唐招提寺金堂と同じく上下二層の構造体をもっている。

ここで、仏光寺大殿における注目すべき点は尾垂木尻と身舎柱上の高級組物である。まず、仏光寺大殿の尾垂木尻は天井裏の繋ぎ梁の下面で止まり、庇屋根の中桁を支持しているのはその繋ぎ梁である。唐招提寺金堂のような庇を構成する尾垂木と異なり、仏光寺大殿の尾垂木は「身舎＋庇」構造体に含まれていない。また、仏光寺大殿は庇柱と同じ高さの身舎柱をもつため、身舎の天井を高くすればするほど身舎柱通りの組物の手先数が増えていく。組物層は構造全体を安定させる効果があるため、このような階層構造は重層建築に有利な構造であると陳明達氏は指摘している[16]。しかし、応県の仏宮寺釈迦塔を考察すると、遼代に建設された初層から第三層の身舎柱はすべて庇柱より一材高い。そのため、「身舎＋庇」架構においては元来身舎柱が庇柱より高いのは一般的だと考えられ、仏光寺は高級組物を用いることによって「身舎＋庇」架構を徹底的に殿堂化したと思う。

一方、漢宝徳氏は肘木と尾垂木の異質性に注目し、大陸建築における南方と北方の構造体系説[17]を提起している。それによると、漢代末期から北朝にかけて成立した横材体系は、中原

14　浅野清：「唐招提寺金堂復原考」『建築史』6 巻 4 号 , 1944。

15　『国宝唐招提寺金堂修理工事報告書』の「尾垂木」項目を参照（奈良県教育委員会事務局文化財保存事務所編，pp. 395-401，2009）。

16　陳明達：『中国古代木結構建築技術　戦国―北宋』，北京：文物出版社，pp. 46，1990。

17　漢宝徳：『斗栱的起源与発展』，台北：境与象出版社，p81，1988（初版 1982）。

図 3-5 身舎庇架構の分類と発展

福州華林寺大殿（五代964年）
（『傅熹年建築史論文集』）

莆田元妙観三清殿（北宋1015年）
（『中国古代建築史』第三巻）

図 3-6 福建省の遺構の前後非対称の処理手法

地方の建築伝統として北方建築に継承されながら、南方の斜材体系の影響を受け、尾垂木技術を導入した。このような構造体系説を参考に唐招提寺金堂と仏光寺大殿の架構形式を検討すると、前者が斜材体系に相当するに対して、後者は明らかに横材で構成する階層架構であることが分かる。

ここで特筆すべき一例として興福寺東金堂を採り上げて考察する。興福寺東金堂は奈良時代の建立の後に、罹災・再建を繰り返し、現在のものは応永 22 年（1415）に再建された姿を

示しているが、「古代仏殿の正統な様式」に従っているとも考えられている。また、興福寺東金堂において、側柱と入側柱の高さを揃え、両者を組物上の繋ぎ梁のみによって結ぶ手法は、日本では珍しく、日本の仏殿が「庁堂」形のみではなかったことを示す貴重な実例として注目を集めている[18]。筆者は、改めて上述の横材体系・斜材体系の分類方法を参考に、興福寺東金堂の野小屋以下の部分を考察すると、二重繋ぎ梁は庇屋根の荷重を全く受けていない点、そして尾垂木は身舎まで伸ばしている点から、建立当初の興福寺東金堂は唐招提寺金堂と同様に、斜材体系に属すると指摘しておく。一方、それの唐招提寺金堂と最も異なる特徴は、斜材体系でありながら、殿堂式の架構を用いているところにある。高級組物を用いて身舎柱を側柱と同じ高さにし、身舎と庇の天井の高さを唐招提寺金堂よりも一段上げた手法は、仏光寺大殿の場合と極めて類似している。そのため、横材体系の仏光寺大殿と斜材体系の興福寺東金堂の殿堂式架構を実現させたのは、高級組物であると言えるだろう（図３－５）。

10 世紀以降、中国では「身舎＋庇」架構は発展し続けた。五代の華林寺大殿は前述三例より規模の小さい「一間四面」堂で、吹き放しの前廊をもっている。華林寺大殿は唐招提寺と同様に庇柱より高い身舎柱に繋ぎ梁を挿入しているが、背面庇屋根の中桁は、尾垂木尻と身舎柱上組物の肘木の組合せによって支持されている。最終的に中桁からの荷重は尾垂木尻や肘木の下にある雲形蟇股を通して垂直に繋ぎ梁へ伝達する。このため華林寺大殿は、北方の階層架構と南方の斜材架構を混合した一例とも言えるだろう。また興味深いのは、華林寺大殿の正面庇の繋ぎ梁は背面よりずいぶん高い位置に架け、その下にもう一層の繋ぎ梁を設け、前廊を組物と梁で豪華に飾っていることである。類似する手法は同じく福建省の北宋遺構である莆田元妙観三清殿にも見られる。元妙観三清殿の場合、前後庇の繋ぎ梁の高さは揃っているが、前面庇のみ身舎柱から跳出する二手先の挿肘木を用い、さらに前面身舎柱の間に桁行方向の組物装置を並べ、架構の装飾性を高めている（図３－６）。

後に、中国の仏殿は内部の礼拝空間を広くとるために、「身舎＋庇」架構形式を変化させ、内部空間の分割へと進んだ。一方、日本建築は礼堂の室内化を契機に、野小屋技術を用いて「身舎＋庇」の構成を変化させた。中世以降の「身舎＋庇」構成の崩壊は、日中建築における架構発展の一致する傾向である。以下、その様相を明らかにする。

3−2　中国建築における架構形式の複合化

10 世紀以降の中国建築の中で、「身舎＋庇」架構をもつ実例は極めて少なく、多様な架構形式はこの時期に現れた。それら多様な架構形式について先学によって幾つかの見解がある。

劉敦楨氏は『営造法式』に記載されている架構様式の「殿堂型」と「庁堂型」を参考に、実物の中殿堂・庁堂を混合した例があると指摘している。また、劉氏は遼代仏殿に見られる前後非対称の架構形式に注目し、金代建築に多く用いられた「減柱法」と「移柱法」と関連

18　澤村仁：『日本建築史基礎資料集成』仏堂Ⅰ〈興福寺東金堂〉，東京：中央公論美術出版，p. 104，1981

独楽寺観音閣　藻井位置
（『中国古代建築技術史』）

下華厳寺薄伽教蔵殿　藻井位置
（『中国古代建築史』第三巻）

隆興寺摩尼殿　四面孫庇（抱厦）
（『正定隆興寺』）

図 3-7 対称的架構形式に見られる非対称性

大雲院弥陀殿　梁行断面図
（「山西平順県古建築勘察記」）

高平開化寺大殿　断面図
（『東来第一山――保国寺』）

少林寺初祖庵大殿の「移柱造」
（『中国古代建築史』第三巻）

保国寺大殿　梁間比例関係
（『寧波保国寺大殿勘測分析與基礎研究』）

図 3-8 方三間仏殿の非対称的架構形式

性をもつと指摘している[19]。

陳明達氏は、建築の軸部を分解する方法を基準に、北宋までの中国建築の架構形式を 3 種類に分類している[20]。第一は梁行断面で分解できる「海会殿形式」、第二は水平方向で柱層・組物層・屋根層に分解できる「仏光寺形式」、第三は断面あるいは水平で簡単に分解できない複合的架構である「奉国寺形式」である。その中で、奉国寺形式はより自由に柱を配置す

19　劉敦楨：『中国古代建築史』（第二版），北京：中国建築工業出版社，pp. 245-246，1984。
20　前掲注 15，陳明達：pp. 44-47。

図 3-9(1)　遺構における架構分析

図 3-9(2)　遺構における架構分析

ることができると指摘している。

傅熹年氏は『営造法式』に記載されている架構様式の「殿堂型」と「庁堂型」に基づき、建築の各断面の架構形式における異同を分析し、「減柱法」と「移柱法」の概念について考察を行った[21]。

近年、張十慶氏は殿堂架構の発展に伴い、簡略化と庁堂化の傾向が見られると指摘し、庁堂型架構に対して北方系と南方系を見分け、保国寺大殿のような架構形式を江南地方の方三間庁堂式架構の基本形であるとも指摘している[22]。

筆者は上記の先行研究を踏まえ、仏殿の空間性質に注目し、礼拝空間を拡大する意図が捉えられる遺構に焦点を当てて以下のように考察を行う。五代までに、内部柱のない小規模な架構、または「身舎＋庇」構成の架構形式は一般的であり、いずれも前後対称な架構で、均等かつ求心的な仏殿内部空間を作り出している。後の遼・北宋時代に入って、古代の対称的な架構を継承した例として独楽寺観音閣（天津・遼 984 年）・崇明寺中殿（山西・北宋 991 年）・下華厳寺薄伽教蔵殿（山西・遼 1038 年）・隆興寺摩尼殿（河北・北宋 1052 年）が挙げられるが、そのうち位置の確認ができる独楽寺観音閣と下華厳寺薄伽教蔵殿の仏壇はやや後方に寄り、仏像上方の藻井の位置も後ろに揃えている。また、隆興寺摩尼殿は正面のみ広い孫庇（抱厦）を用い、仏壇前方の空間を広く取っている（図 3－7）。

10 世紀以降に至ると、前後非対称な架構形式は急速に発展した。大雲院弥陀殿（山西・940 年）は現存する最初の実例である。その他、保国寺大殿（浙江・北宋 1013 年）・開善寺大殿（河北・遼 1055 年以前）・開化寺大殿（山西・北宋 1073 年）・青蓮寺大殿（山西・北宋 1089 年）・二仙観正殿（山西・北宋 1097 年）・龍門寺大殿（山西・北宋 1098 年）・晋祠聖母殿（山西・北宋 11 世紀）・少林寺初祖庵大殿（河南・北宋 1125 年）・善化寺大殿（山西・遼 12 世紀初頭）・閣院寺文殊殿（河北・1141 年頃）及び現存するほとんどの金代遺構など多数の事例が挙げられる。

まず、北方地方の方三間仏殿は、大雲院弥陀殿のような後方 2 本の入側柱のみを用いる架構が一般的だが、南方には「移柱法」[23] を使った少林寺初祖庵、そして柱間隔を不均等に調整した保国寺大殿のようなものも存在している（図 3－8）。また、五間以上の大規模な仏殿の場合に、架構形式のバリエーションはさらに多く見られる。その様相を［図 3－9］にまとめてみる。

そのなか、上華厳寺大殿は前後対称な柱配置をもつが、古代的身舎庇の構成と異なり、二

21　傅熹年：「宋式建築構架的特点与減柱問題」『宿白先生八秩華誕記念文集』（上），北京：文物出版社，pp. 291-306，2002。

22　張十慶：「第四章　保国寺大殿与江南建築」『寧波保国寺大殿勘測分析与基礎研究』，南京：東南大学出版社，pp. 118-123，2012。

23　本論における「移柱法」・「減柱法」の概念は劉敦楨氏の『中国古代建築史』（北京：中国建築工業出版社，pp. 245-246，1984）、そして傅熹年氏の「宋式建築構架的特点与減柱問題」（前掲注 19）を参照する。

西明寺本堂
鎌倉以前の柱配置（復原）

大報恩寺本堂の柱配置

大報恩寺本堂の断面形式
（『日本建築史図集』）

図 3-10 日本の中世建築における架構の変化

種類の架構形式を併用したため、中央部の入側柱は側柱筋からずれている。そして、同時代の崇福寺弥陀殿は前方母屋桁の下に多重の通肘木を用いることによって、「移柱法」を用いて前方の入側柱 2 本を桁行方向に沿って外側へ移動するほかに、前方中央の入側柱 2 本を抜き取った「減柱法」も採用している。このような「減柱法」は晋祠聖母殿と仏光寺文殊殿にも見られる。

以上で明らかにしてきたが、遼・北宋・金代の仏殿は、様々な庁堂型架構形式を複合的に用いながら、場合によって減柱法・移柱法も用いて架構形式を調整し、仏壇前方の礼拝空間を広げようとしている。そのうち、一部の架構に伝統的な「身舎＋庇」の構成も確認できる。

3–3　日本中世本堂における野小屋の普及

日本の中世本堂において、礼堂は正堂と統合され、一つの屋根の下に納められるようにできたのは、野小屋を作る技術が重要な役割を果たしたためである。

野小屋の使用によって、「従来奥行きの深い建物は別棟を並列する双堂形式か、もしくは前面にさらに庇を付加する孫庇形式でしか造りえなかったのに、従前の構造を利用して一つ建物としての大屋根を造ることが試みられるようになった」[24]。また、太田博太郎氏は「野小屋

24　工藤圭章：「古代の建築技法」『文化財講座日本の建築』古代Ⅱ・中世Ⅰ，東京：第一法規，p. 131，

の発生により、軸部（特に柱配置）と小屋組とが別になって、平面の自由度を獲得したことは、建築技術として大きな進歩であった」[25] と評価している。

また、鈴木嘉吉氏は西明寺本堂と大報恩寺本堂の架構を考察し、西明寺本堂と比べ、大報恩寺本堂は外陣内部で目障りになる中央２本の身舎柱を虹梁で抜き取った（図３－10）。それは「身舎と庇境に必ず柱を立てる古代的構造を変革した点に画期的意義をもっている」[26] と指摘している。言わば、野小屋の使用によって、中世の日本和様建築は「身舎＋庇」架構の枠を突破してきた。

４　架構形式の変化により軒廻り組物への影響

日本建築は野小屋の普及に従い、「構造と意匠の乖離」[27] を実現できた。構造的制約が解除され、本堂の内部空間に様々な意匠的な工夫がされたことは多く記述されているが、外部意匠、特に軒廻り組物形式の更なる発展は中世の初め頃に見られなかった。

平等院鳳凰堂のような野小屋を利用して軒廻りに高級組物を飾り、外部意匠を重視した例も一時期出現したが、中世前期の本堂の主流意匠にはなれなかった。それについて、藤井恵介氏は「礼堂付きの仏堂では正堂部分の正面デザインがほとんど意味を失った」こと、そして「仏堂で最も高級な軒回りの組物は、専ら塔の建築に引継がれてゆく」ことを指摘し[28]、中世本堂における軒廻り高級組物の不使用について一つの解釈を示した。

また、中国の仏殿は内部と外部空間を交互に体験する動線の一部であるため、仏殿の外観は動線上の位置を示すシンボルとも考えられ、建築の外観における重要な要素である軒廻り組物は重視されていた。この面から考えると、中国の仏殿と異なり、より閉鎖的・独立的な内部空間をもつ日本中世本堂において、外部意匠はそこまで発展しなかったことも当然であろう。

一方、10 世紀以降の中国建築における軒廻り組物は、上記のような位置を示すシンボル的な意味をもつほかに、構造的にも重要な役割を果たしていた。特に中国建築における架構形式の革新において、高級組物の使用も不可欠な要素であると考えられる。この点について、次章で考察を行う。

1976。

25　前掲注３，太田博太郎：p. 30。

26　鈴木嘉吉：「中世の寺院建築（大仏様・和様）」『文化財講座日本の建築』中世Ⅱ，東京：第一法規，pp. 71-73，1977。

27　前掲注３，太田博太郎：p. 31。

28　藤井恵介：「平安初期礼堂試論」，『日本建築学会大会学術講演梗概集（中国）』，1990. 10。

5　おわりに

本章では、10 世紀以降の日中建築に見られる独自の発展について以下の 3 つの面から考察を行った。

①建築の空間構成の面から、10 世紀以降の日中建築においては、双方共に内部空間、特に礼拝空間を拡大する傾向が見られる。日本の仏堂には、礼堂が登場し、後に金堂と一体化され、礼堂付きの中世本堂が形成した。一方の中国の仏殿では、内部空間の拡大に伴い、仏殿の内部で回遊する動線が出現し、伽藍全体を歩き回る動線の一部として計画されるようになった。

②架構形式の発展の面から、伝統的な「身舎＋庇」の架構形式に変化が生じ、架構形式の革新を行った。日本建築は野小屋を使用し、奥行きの深い架構を実現した。中国建築は、複合化した架構を用いて内部空間を拡大しながら、前後非対称な内部構成となっていく。

③軒廻り組物の変化を見ると、日本の中世本堂は閉鎖的な内部空間をもつため、組物の外部意匠よりも内部意匠を重視し、結果として簡単な組物を外部に用いるようになった。一方、中国建築は外部意匠を終始重視しながら、建築群の動線計画に力を入れ、建築の外観に組物を用いて動線を誘導する意図をもつと考えられる。そのため、中国建築の組物、特に軒廻り組物はさらなる発展を遂げた。

第4章　中国建築における高級組物の発展

1　はじめに

まず、本論の着目点である組物について、中国建築と日本の和様建築における組物形式の歴史的様相を総括的に比べてみよう。

中国建築においては、平三斗のような簡単なものから最高級の五手先組物まで見られる。古くから、小規模な南禅寺大殿（唐）は柱上に二手先組物を使用している。より規模の大きい仏光寺東大殿（唐・857）に四手先組物が用いられ、小木作の正定隆興寺転輪蔵（宋・11 世紀頃）に五手先までの組物も見られる。10 ～ 11 世紀の間に、柱上組物は梁との関係が一変し、従来柱上組物より格式の低い中備装置も急速に発展し、柱上組物と相等しいものになった。これを受け継いだ後世の中国建築において、側廻りに柱上・柱間を問わず二手先以上の組物をもつ形式は高級建築の主流であり続けた。また中国建築の中で、現存する格式の高い宗教建築や宮殿建築の軒廻りに、出組すなわち一手先より簡単な組物は確認されていない。中国には大斗肘木・平三斗・出三斗などの簡単な組物はもちろん存在するが、宮殿や宗教施設の場合ほとんど付属建築に使われている。軒廻りに高級組物を用いることは建築の等級を示すほかに、架構形式を成立させるための構造的需要とも深く関連すると考えられる。

一方、日本建築において、唐様式の組物は 7 世紀後半に日本に伝来し、奈良時代から平安時代にかけて国風化され、後世の和様様式の基礎を築いた。和様建築にとって、特殊な建築にしか使わない四手先を除き、三手先組物は最高級である。古代建築に二手先や三手先のような高級組物は多く見られるが、中世以降の仏堂建築では側廻りに平三斗・出三斗・出組が多く用いられ、二手先の使用さえ例外的になった[1]。また、柱間に配される中備は一切跳出することなく、平面的な装置のまま定着していた。これによって、和様建築は大陸様式の輸入を元にして成立したが、後世に起きた組物の発展では中国建築と全く異なる傾向を示している。

以上のように、両国建築の組物形式において、10 世紀以降の発展経緯は異なっていくことがわかる。この歴史的変化に影響を与えた要因として、前章に述べた 10 世紀以降に発生した日中木造建築における架構形式の革新、すなわち「身舎＋庇」構成方式の崩壊が考えられる。以下、組物形式と架構形式の関連性を考察し、中国建築における高級組物の発展経緯を明らかにする上で、組物における構造性と装飾性の消長について解釈する。

1　藤井恵介：『日本建築のレトリック――組物を見る』，東京：INAX，p. 16，1994。

2　簡単な組物における構造的限界

前章に述べたとおり、中世以降の日本仏堂では軒廻りに簡単な組物を一般的に使っている。この現象について、藤井恵介氏は著書『日本建築のレトリック』の中で考察を行った。藤井恵介氏はまた、組物は建築を表現するための手段の一つでもあることを主張している。日本建築の三手先組物と二手先組物は、内部構造を表現として成立させることができない限界があるため、早めに放棄されてしまった。逆に、簡単な組物である平三斗と大斗肘木は内部構造を直接外部に表現するため、「見せ掛け」という手法を使えば多大な可能性を持たされ、建築表現として組物の役割を果たせる。

以上の論理は、「建築を表現する組物」という観点に立ち、日本建築にとって簡単な組物は高級組物よりも可能性を持つと結論付けた。それとは対照的に、本章では視点を変え、構造論理から簡単な組物における構造的限界を述べたい。

2−1　大斗肘木と平三斗の限界

大斗肘木と平三斗は類似する構造で、いずれも大斗の上に梁の先端をのせる形式である。そのため、梁の有無は直接組物の外観に反映され、さらに大斗の位置は梁の位置に従って決められる。そのため、大斗肘木と平三斗は架構形式に最も影響されやすい組物形式と言える。

大斗肘木を用いる一例として、室生寺金堂が挙げられる。室生寺金堂は平安初期の 9 世紀後半の建立と推測され、元来は三間四面の身舎・庇構成で、後世に孫庇も付けられて礼堂と正堂をもつ中世仏堂に改造された。この建物の組物において、特に注目されるのは、正堂側面の中央に立つ 2 本の側柱と対応する内部の柱や繋梁はないが、見せ掛けの梁鼻は側柱の大斗肘木の上に置かれているところである。この見せ掛けの梁鼻は寛文 12 年（1672）のものと判断されているが、その以前に見せ掛けの梁鼻があったかどうかは不明である[2]。このような手法は、「建築の外周にはすべて同じ組物を使う」という意匠的原理に従ったと指摘されているが[3]、大斗肘木の構造的限界も表している。

側廻り組物は同じ高さにある場合、大斗肘木や平三斗は梁鼻を直接的に受けるため、この梁を支持する内柱がなければ、梁自体も成立しなくなる。もし室生寺金堂が大斗肘木や平三斗ではなく、後に述べる手先の出る組物を用いれば、見せ掛けの手法を使用しなくても、現在の柱配置のままで簡単に建築の外周に同じ組物を見せることができる。

一方、中国の石窟や磚造の遺構に古くから平三斗が見られ、中国建築用語では「把頭絞項作」と呼ばれる。その中で、西安興教寺玄奘塔（唐 669 年）の隅組物の肘木は外側の梁鼻ともなっており、和様建築に多く見られる見せ掛け手法の[虹梁鼻＋肘木][4]形式に類似している。しかし、

2　『国宝室生寺金堂修理工事報告書』奈良：奈良県教育委員会，1991：p. 17。
3　前掲注 1，藤井恵介：p. 25。
4　前掲注 1，藤井恵介：p. 27。

室生寺金堂の大斗肘木
（『日本建築史基礎資料集成』仏堂Ⅱ）

中国建築の平三斗（把頭絞項作）
（『営造法式解読』）

図 4-1 簡単な組物の実例

磚造りの塔では隅木を用いないため、この［虹梁鼻＋肘木］は木構造としては不合理であるが、木構造の部材を模倣したものと考えれば、木造建築にこのような部材は存在していたかも知れない（図 4-1）。そのため、中国建築も見せ掛けの手法を用いた可能性を否定することはできない。

2―2　出三斗と枓口跳の限界

日本建築の軒廻り出三斗は鎌倉初期に登場し、中世に広く普及した。日本建築の出三斗は大きく二種類に分けられ、第一の種類は西明寺本堂庇のように、大斗の上に枠肘木を組み、虹梁の先端を受ける形式である。第二の種類は虹梁の先端が外に跳出し力肘木になるもので、長弓寺本堂に見られるものはその手先に見せ掛けの梁鼻をのせている（図 4-2）。

なお、中国では唐代の遺構に、すでに出三斗に似ている外観をもつ組物が用いられている。出三斗と大きく異なるところは、これらの組物の手先に必ず丸桁をのせることである。むしろ日本近世建築の阿麻組[5]とほぼ同じ構成である。以下これらの組物を中国建築用語の「枓口跳」[6]を用いて説明する。

5　中村達太郎：『日本建築辞彙〔新訂〕，東京：中央公論美術出版』，p. 12，2011。
6　枓口跳［読み：とうこうちょう］――斗栱の簡単な一形式。（竹島卓一『営造法式の研究』より）。

西明寺本堂（復原）の出三斗
（『国宝西明寺本堂他1棟修理工事報告書』筆者加筆）

長弓寺本堂見せ掛け梁鼻
（『日本建築のレトリック』）

長弓寺本堂の出三斗
（『文化財講座日本の建築』中世Ⅱ　筆者加筆）

図 4-2 日本建築の出三斗

天台庵大殿　2種類の科口跳
（『中国古代建築史』第二巻 筆者加筆）

＊ ○内の数字は鋪作数を示す
以下同様

把頭絞項作

科口跳
（『営造法式』による）

把頭絞項作と科口跳の梁位置
（『斗栱』 筆者加筆）

図 4-3 中国建築の科口跳

出三斗も枓口跳も大斗肘木や平三斗より、梁の位置変化にある程度対応できるようになっている。これを『営造法式』の鋪作[7]という概念で説明すると、大斗肘木・平三斗と枓口跳はすべて大斗から桁まで3鋪作で構成されているが、見せ掛けではない大斗肘木と平三斗の場合、梁は必ず第2鋪とならなければならない。それに対して、出三斗の梁は第2鋪と第3鋪のどちらにもなれる。例えば、中国遺構の天台庵正殿（9～10世紀）は、二種類の枓口跳を同時に使用している。天台庵大殿は方三間の小規模な仏殿で、内部には柱がない。そのため、側面の繋梁は大梁の上に嵌め込まれ、繋梁の下面は大梁の下面より高くなる。高さの異なる梁それぞれに対応するために、側廻りに二種類の枓口跳が用いられている。大梁は正面・背面の枓口跳の第2鋪となり、繋梁は側面枓口跳の第3鋪になっている。

また、後世の『営造法式』に、枓口跳を作るために必要な部材とその数が記載されている[8]。その記載に基づいて復原した形式は［図4-3］の示すとおり、背の高い梁の先端が第2鋪又は第3鋪のどちらにもなる。これは梁が成熟した後に出現した枓口跳の改良版と考えて良いのだろう（図4-3）。

一方、日本建築は前述のとおり、いつも丸桁を外へ持ち出さない出三斗を用いている。このような出三斗は中世に普及し、早い段階に見せ掛けとして使われはじめた。それは中世小屋の発達によって、組物廻りは全く構造形式に影響されないようになったからのである。

以上によって、大斗肘木・平三斗・出三斗や枓口跳のような簡単な組物は、単純な構造形式にしか対応できないことが分かる。天台庵正殿のような内部柱のない架構形式において、桁行方向の繋梁と梁行方向の大梁との間に必ず高低差が生じるため、大斗肘木や平三斗のような側廻り組物を使用すると架構自体が成立しなくなる。その場合、出三斗以上の組物が必要になる。また、3鋪作の枓口跳は最大1鋪作の梁のズレにしか対応できないため、架構形式が複雑になればなるほど、さらに鋪作数の多い組物が使われることになるだろう。

なお、和様組物に見られる様々な「見せ掛け」の手法を生み出した要因として、建築を表現する意図はもちろんだが、簡単な組物における構造的限界も考えなければならない。すなわち、和様建築は簡単な組物を用いているため、完全に構造原理に従うと意匠的目的を達することはできなくなる。構造原理より意匠的目的を最優先にした結果、見せ掛けのものを使ったのだろう。

3　唐・五代の北方建築に見られる組物の発展

敦煌石窟の壁画資料によって、遅くとも8世紀の前半に、中国の木造建築はすでに四手先

7　梁思成氏の解説によって、組物の中に、一層あるいは一跳の肘木または尾垂木とその上の斗を合わせて「一鋪作」と呼ぶ。また、一組の組物の鋪作数は大斗から数え、大斗も一鋪作とする。（梁思成：『梁思成全集』第七巻，中国建築工業出版社，p.104，2001）。

8　『営造法式』巻十七　大木作功限一「枓口跳每縫用栱、枓等数」。

の高級組物を使っていたことが分かる。この段階に至るまで、組物における手先数の増加はおそらく建築規模の拡大と深く関わっているのだろう。ただし唐代までは、梁構造がまだ成熟していなかったため、組物は一組の構造体より横材で構成された架構の交差点にすぎないと陳明達氏は指摘している[9]。以下、現存実例をもって組物の発展経緯を遡ってみる。

中国に現存する唯一の8世紀建立と推測された遺構は、五台山所在の南禅寺大殿である。南禅寺大殿は前述の天台庵正殿と同様に、内部に柱のない方三間の小規模な仏殿であるが、二手先組物を用いている。その軒廻りの二手先組物を考察すると、梁の位置は異なっていることが分かる。大梁は正面と背面組物の二手目肘木すなわち第3鋪になり、その上にさらに一本の横材を加え、第4鋪の木鼻として持ち出している。側面の繋梁は二手先の上にのせ、第4鋪の木鼻として外へ出ている。天台庵大殿の場合、枓口跳の外観を見ると、第3鋪の外側に部材の有無から梁の位置を判断できる。それとは対照的に、南禅寺大殿の二手先組物の場合、外側から内部の梁構造の差異を分別できなくなっている。そして、組物の手先数がさらに増えた四手先組物も同様に、梁の先端は軒廻り組物の一部になるため、外観からその位置を判断することは難しい（図4-4）。

次に、この段階の四手先組物と梁の組合せ方について考察を行う。9世紀建立の仏光寺大殿は中国現存最古の四手先組物を用いる遺構で、左右対称・前後対称の身舎・庇形式を採用し、軒廻り組物の第3鋪は身舎と庇の間の繋梁になっている。また、仏光寺大殿が代表する殿堂式架構の特徴の一つとして、天井裏に草架と呼ぶ屋根構造が存在し、見える梁の「明栿」と対照的に、天井裏の梁は「草栿」と呼ばれている。この2層の梁構造のうち、草栿は組物層の上に乗せているため、軒廻り組物の形式と関連するのは明栿のみである。

一方、五代遺構である鎮国寺万仏殿（963年）は、天台庵正殿と南禅寺大殿と同じ平面構成で、内部に柱のない小規模な方三間であるが、高級な四手先組物を用い、二重梁の殿堂式架構をもっている。そして、前代建築の組物より様々な発展したところが見られる。その中で特筆すべきなのは、鎮国寺万仏殿の梁はそれ以前の遺構より背高く、位置も高くなっている。大梁の下面は軒廻り組物の第4鋪と揃い、上面はほぼ第5鋪まで達していることである。また、側面の繋梁は大梁の上面に食い込み、側面組物の第5鋪となっている。その背の高いそして位置の高い梁は、後の梁の発展における重要な傾向を表している（図4-5）。

梁の発展に対して最初に注目をしたのは陳明達氏である。陳明達氏は著書『応県木塔』と『営造法式大木作研究』で以下のように総括的に述べている。唐代の仏光寺大殿と遼代の独楽寺観音閣・応県木塔の梁の断面を比較すると、時代に従って梁の背は高くなる傾向が見られる[10]。唐代以来『営造法式』まで、遺構に見られるバリエーションの多い組物形式は、すべて架構形式に対応するために用いられていた。後に、『営造法式』は組物の鋪作数について厳しく規定した結果、組物の適応性が弱まると同時に、梁は組物から独立して、組物層の上にのせ

9　陳明達：『中国古代木結構建築技術　戦国―北宋』，北京：文物出版社，p. 41，1990。
10　陳明達：『応県木塔』，北京：文物出版社，p. 54，1980。

南禅寺大殿　二手先組物と梁の関係
（『柴沢俊古建築文集』 筆者修正）

図 4-4 二手先組物と梁の関係

る断面の高い部材になった。このような革新は最終的に架構形式全体の変化を促し、組物を建築架構から離脱させた[11]。この点は野小屋を用いて組物を架構から解放した日本中世以降の建築と共通している。

陳明達氏が指摘した梁における断面高さの増加は、前述の鎮国寺大殿にすでに現れた。そして組物から離脱した梁の現存する最古の実例は、五代遺構の大雲院弥陀殿（940 年）に見られる。大雲院弥陀殿は方三間の仏殿で、内部は後方のみに側柱より背の高い 2 本の入側柱を配して繋梁を受ける。前方に入側柱を用いず、前方の繋梁は大梁の上に直接乗せている。大梁と 3 種類の繋梁は、軒廻りのすべて同じ高さの二手先組物に乗せているため、前方 2 本の繋梁はやや斜めになっている（図 4-6）。これは梁構造と軒廻り組物の分離が明らかに見える事例である。

ただし、大雲院弥陀殿は現存する遺構のなかでも様々な面で特殊な手法を用いる特例であ

11　陳明達：『営造法式大木作研究』，北京：文物出版社，上集 p. 201；下集図 38-40，1981。

仏光寺大殿　四手先と梁の関係
（『柴沢俊古建築文集』、筆者加筆）

鎮国寺万仏殿　四手先と2種の梁の関係

図 4-5 四手先組物と梁の関係

大雲院弥陀殿平面図

大雲院弥陀殿梁行断面図

大雲院弥陀殿桁行断面図（前方）

大雲院弥陀殿桁行断面図（後方）

（「山西平順県古建築勘察記」『文物』1962.2、筆者加筆）

図 4-6 組物層から独立した梁

り、また後の遼代初期に至っても、組物の一部となる古式の梁はよく見られるため、五代において組物から離脱した梁は主流であったのかどうかについては再検討が必要である。さらに時代が下ると、遼代中期以降の遺構、そして宋代の北方系遺構のほとんどは組物層から独立した梁を使用している。それは前章に述べた架構形式における中世的変化にも深く関連している。

4　遼・宋建築における架構技術の革新

遅くとも 5 ～ 6 世紀の南北朝時代に、中国の南と北の地方で木造技術における相違点がすでに現れたと考えられている。それは、南朝の建築は朝鮮半島の百済を経由して日本の飛鳥建築に影響を与えたと考えられ、その飛鳥建築の技術と様式は明らかに北朝の石窟や墓に見られるものと異なっているためである。しかし、中国本土に 10 世紀以前の遺構は北方地方のみにわずかしか確認されていないため、その段階の南と北の木造技術における具体的な差異は未だに明らかにされていない。

10 世紀に入ると、北方と南方ともに木造遺構が確認された。その中で、北方の前述の鎮国寺万仏殿（963 年・山西省）と南方の華林寺大殿（964 年・福建省）とは、とても近い年代に建立されたものであるため、南と北の比較研究において重要な参考事例となっている。この二棟の建物はともに方三間で、高級な四手先組物を用いているが、前者は北方伝統的な殿堂式架構形式を採用し、後者は庁堂式架構を用いている。このような五代の北方と南方に現れた二つの架構体系は、次の時代にさらに異なる方向に向かって飛躍的に発展した（図 4-7）。

4―1　北方系

11 世紀以降の北方系架構の発展傾向について、張十慶氏の研究成果が挙げられる。梁の背が高くなるとともに、北方地方に流行していた伝統的殿堂式架構において、元来組物に組み込まれた明栿と草栿の二層の梁構造は一つにまとめられ、組物層の上にのせるようになった。張十慶氏は北方殿堂式架構におけるこのような発展を庁堂化の傾向と指摘し、遼代後期の閣院寺文殊殿・善化寺大殿や金代の崇福寺弥陀殿などの遺構を北方系庁堂式と分類している[12]。筆者はその先行研究を踏まえ、改めて「架構形式の変化による軒廻り組物への影響」という視点から北方建築の発展について考察を行いたい。

事例として、同じく梁間 5 間の遼代大規模仏殿である奉国寺大殿（遼 1020 年）と善化寺大殿（遼 12 世紀初頭）は、類似する平面形式と殿堂式・庁堂式を複合した架構形式を採用しているが、梁の 2 つの発展段階を表している。奉国寺大殿は四手先組物、そして組物の一部になる古式の梁を用いて複合的な架構を成立させている。それに比べて、善化寺大殿においては架構の簡略化が明らかに見られる。特に、構造節点である組物に注目すると、善化寺大殿の場合、

12　張十慶：『寧波保国寺大殿勘測分析與基礎研究』，南京：東南大学出版社，p. 120，2012。

鎮国寺万仏殿（963年・山西省）の架構形式
（『柴沢俊古建築文集』）

華林寺大殿（964年・福建省）の架構形式
（『建築史論文集』第9輯）

図 4-7 北方建築と南方建築の架構体系

組物は成熟した背の高い梁とはっきり区別され、二手先組物であっても十分な構造的役割を果たしている（図 4-8）。

構造的観点から見ると、複合的な架構形式を採用した途端に、組物の構造的役割は仏光寺大殿の段階と比べてすでに衰退したと考えられる。奉国寺大殿は、おそらく成熟した梁の技術はまだ主流ではなかった段階に、組物に組み込まれた梁の古代技術を用いて複合式架構の試みを行った事例であろう。後に、善化寺大殿のような簡略化した梁構造を用いる架構形式こそ、成熟した複合式架構と言えるだろう。

なお、複合式架構の発達に伴った組物における構造的役割の弱化は、後に述べる側廻り組物の装飾化に繋がる重要な要因とも考えられる。

奉国寺大殿断面図
（『義県奉国寺』、筆者加筆）

善化寺大殿断面図
（『中国営造学社彙刊』第四巻第三・四期、筆者加筆）

図 4-8 架構の簡略化と組物の衰退

4-2　南方系

北方とほぼ同時に、南方系の建築も架構形式の技術革新を経て、側廻り組物の外観を一変させた。南方系の庁堂式建築として、前述の華林寺大殿の次に、寧波に所在する宋代遺構の保国寺大殿（1013 年）は注目される一例である。張十慶氏は保国寺大殿を中心に江南地方の宋元遺構について先駆的な研究成果を発表している。

張十慶氏によれば、南方系の庁堂式架構は北方系と異なる体系に属し、特に江南地方の宋元遺構は特徴的な共通性をもっている。張十慶氏は保国寺大殿のような方三間架構形式を「井字型」と定義し、宋元以降の江南地方の庁堂式の基本形であると指摘している。

保国寺大殿の場合、正面庇が背面庇より広く、前後非不対称の架構形式であるほかに、母屋桁の間隔も均等ではない。それについて、張十慶氏はそれぞれの柱間に等間隔に配置された組物に注目し、「江南庁堂式架構において、中備組物の発達によって組物の間隔は重視されており、柱間を均等に分けるように組物を配置することは基本である」と指摘している。また、母屋桁の位置より組物の位置が視覚的に捉えやすいため、庁堂式架構の視覚的均等性を求める意匠は、組物にモジュールとしての意義を持たされたと張氏は主張している[13]（図 4-9）。

13　前掲注 11，pp. 121-123，pp. 137-143。

「井字型」架構形式

組物配置の調整

（『寧波保国寺大殿勘測分析與基礎研究』筆者加筆）

図 4-9 保国寺大殿の架構技術革新

5 おわりに

以上によって、中世の中国北方建築からみた組物の発展は大きく２つの段階に分かれられる。第一段階は組物における高級化への発展である。この段階に属する組物は古代的架構技術の中心であり、構造の需要に応じて出跳数を増やしたり、高さを調整したり、梁としての役割も果たしている。第二段階は梁の成熟とともに組物の構造的役割の衰退である。この段階に、成熟した梁は日本建築の野小屋と類似する原理で屋根構造と軒廻り組物を分離し、軒廻り組物を構造の制約から解放した。

一方、南方系庁堂式建築の中で、五代の華林寺大殿に柱上組物と同じ外観を表す中備組物はすでに用いられたが、保国寺大殿の中備組物は意図的に均等に配置されたため、中備組物の重要性が高まったことは明らかである。発展した中備組物は構造的役割を担うほかに、建築の立面における視覚的効果を生み出す要素としても扱われた。

中備組物の発展は南方系建築の方が先導的であり、後に北方系建築の複合的架構形式の普及に合わせ、北方系建築にも影響を与えた。その結果として、北方系建築の軒廻り組物は更なる自由な形式と配置を用い始め、バリエーション豊かな多様化組物様式を成立させた。次章はそれら北方系建築における中備組物の発展について考察を進める。

第5章 中国建築における中備組物の発展

1　はじめに

中備とは柱と柱の間に配される組物廻りの装置である。日中建築に、蟇股や間斗束、手先の出ない通肘木で構成されるもの、そして手先を持出す組物など、様々な中備が用いられている。和様建築における跳出しない中備を用い続ける伝統に対して、中国建築は唐代中期の8世紀から外側へ手先を持出す中備組物を発展させ、11世紀以降、『営造法式』が代表とする柱上組物と同じ外観を表す宋式建築の詰組、そして斜栱などを中備組物に取り入れた遼・金建築の多様化組物様式がそれぞれに確立された。特に宋式詰組は、後世の官式建築に吸収されて中国全土に普及したほか、朝鮮半島の多包建築と日本の禅宗様建築にも影響を及ぼした。そのため、東アジアの視野から11世紀以降の様式の由来を解明するには、中国建築における中備組物の発展経緯を考察する必要がある。日中両国の研究者によって、中国建築の中備組物形式とその発展に注目した以下の研究成果が発表された。

(1) 飯田須賀斯氏は著書『中国建築の日本建築に及ぼせる影響』で中備を全体的に斗栱間の手法として扱い、中備は構造的に有意義なものと装飾的なものなど様々な種類があることを指摘している。飯田須賀斯氏は、和様建築では馴染みのある蟇股と束形式の中備を基準に、組物化した中備を、束あるいは蟇股上の組物が発達した後に上部の組物のみが残存したものと解釈している[1]。

(2) 田中淡氏は論文「日本中世新様式建築における構造の改革」の中で、中国唐代から元代までの数多くの遺構を紹介した上で、中備組物の様々な発展段階について論じている。田中淡氏は、中備組物の初期形態が柱上組物の簡略化したもので、構造の要求に応じて発生したと指摘している。また、『営造法式』のような詰組を中備組物の完成形態と評価する一方、遼代建築の中備組物を発展の中途段階と解釈している。さらに、田中淡氏は台輪の有無にも注目し、小さな大斗や蟇股を用いる点を遼代中備組物の特徴と指摘している[2]。

(3) 関口欣也氏は論文「高麗末李朝前期における詰組系様式の系統」で中国唐代から明代までの45棟の遺構を考察した上で、日本・高麗・中国の詰組系建築の比較研究を行った。柱上組物・中備組物の手先数・尾垂木数と形式、計心造または偸心造などの要素を羅列し、各柱間に配置される中備組物の数にも注目している。中備組物の発展に対して、仏光寺大殿の中備組物を柱上組物より手先数の少ない例、そして奉国寺大殿の中備組物を柱上組物と同じ

1　飯田須賀斯：『中国建築の日本建築に及ぼせる影響』，東京：相模書房，pp. 130-132，1953。
2　田中淡：『中国建築史の研究』，東京：弘文堂，pp. 459-471，1989。

手先数の持つ例として挙げている[3]。

(4) 台湾の漢宝徳氏は著書『斗栱的起源與発展』のなかで、主に組物における視覚的効果に注目している。漢宝徳氏は詰組を側廻り組物の理想的な形式と主張し、遼・北宋・金建築に見られるバリエーションの多い組物を北方民族による秩序のない自由創作と評価している[4]。

(5) 中国大陸では、郭黛姮氏と潘谷西氏・何建中氏による唐・五代の建築と宋代『営造法式』の中備組物を比較した研究がある。それによって、唐・五代の建築における中備組物は柱上組物より手先数が少ないこと、また『営造法式』の中備組物は柱上組物と同じ外観を持つことが明らかにされている[5]。そのほか、蕭黙氏は敦煌石窟の研究を通して、敦煌壁画に描かれている5世紀から13世紀までの建築絵図を考察し、それぞれの時代に出現した組物の形式を分類した。また、蕭黙氏は建築絵図に見られる中備組物と柱上組物の差異にも注目し、唐代中後期の9世紀に柱上組物と一致する外観をもつ中備組物が出現したと指摘している[6]。

上記のような、唐・五代建築の研究により、中備の初期形態は明らかにされている。また、『営造法式』が代表する詰組が中備組物の完成形態と一般的に考えられている。しかし、既往研究では、中備組物の初期形態から完成形態までの発展過程については概括的な論述しかされていない。特に、遼代建築の柱上組物と異なる外観を表す中備組物は、単に唐・五代の初期形態を受け継いだ、しかも未成熟なものと考えられており、後の金代建築に多く見られるさらにバリエーションの多い組物との関係性も述べられていない。

本章は以上の既往研究を踏まえ、中国建築における中備の発達史を構築する。その中でも、柱上組物と異なる要素を持つ遼・金代建築の中備組物に焦点を当て、組物におけるバリエーションの発生と発展経緯を述べたい。

2 中備における組物化

まず、中備は元来立面上の平面的部材であり、組物になるまで長い時間を要した。傅熹年氏は『中国古代建築史』第二巻で、石窟や壁画に見られる土木混合構造や木構造の建築を表現するものに基づき、木構造の発展をまとめて述べている[7]。本論はそれらの建築図像を参考に、跳出するものに至るまでの中備の形式を以下四つの発展段階に分けて解説する。

①土木混合構造と考えられる部分的な木構造の中で、横材を柱上の大斗に乗せ、その上に

3 関口欣也：「高麗末李朝前期における詰組系様式の系統」『仏教芸術』113，東京：毎日新聞社，1977.6。

4 漢宝徳：『斗栱的起源與発展』，台北：境與象出版社，pp.92-105，1988（初版1982）。

5 郭黛姮：『中国古代建築史』第三巻 宋、遼、金、西夏建築，北京：中国建築工業出版社，p.405，2003；潘谷西，何建中：『営造法式解読』，南京：東南大学出版社，p.84，2005。

6 蕭黙：『敦煌建築研究』，北京：機械工業出版社，pp.226-241，2002。

7 傅熹年：『中国古代建築史』第二巻 両晋、南北朝、隋唐、五代建築，北京：中国建築工業出版社，pp.279-294，2001。

一列の装置（人字形割束または平三斗）を配して桁を支持する。この段階では、組物廻り装置における柱上と柱間の区別はなかった。

②遅くも5世紀の北朝時代に、柱上大斗に平三斗、柱間の貫上に人字形割束を交互に配置する形式が出現した。このような柱上と柱間をはっきり区別する組物廻り形式は、頭貫の成立に従って登場し、建築における土木混合構造から全体木構造への発展を反映したと考えられている。

③唐代初期の7世紀に、跳出する柱上組物の普及によって、組物を安定させるために桁行方向の繋がりが求められた結果、壁付通肘木が出現し始めた。最初に壁付通肘木と秤肘木を交互に用い、通肘木の間に束や人字形割束を中備として設置するものが一般的だったが、唐代中期に至ると壁付通肘木を連続的に積み重ねる手法も現れた。これら通肘木の柱間の部分は意図的に肘木のように彫刻されることが多いため、連続通肘木の登場は中備の組物化への重要な一歩とも言えるだろう。

④壁付通肘木の応用によって組物廻りの桁行方向の繋がりが強化された後、中備組物に対して壁の直上だけではなく、軒先を支持できるような構造的機能も求められた。それに応じて、跳出する中備組物が登場した（図5－1）。

① 雲崗石窟第10窟屋系窟（北魏5世紀）

② 麦積山石窟第5窟（隋6世紀）

③-1 敦煌莫高窟第321窟
（初唐7世紀）

③-2 南禅寺大殿
（中唐782年再建）

④ 敦煌莫高窟第172窟
（盛唐8世紀前半）

図5-1 跳出する組物に至るまでの中備

3　跳出する中備組物の発展

前述のような過程を経て、跳出する中備組物は唐代後半の9世紀頃に登場した。その後飛躍的発展を果たし、遅くとも10世紀に柱上組物と相等しい中備組物が現れた。跳出する中備

組物の発展過程を解明するためには、跳出する中備組物を用いる木造遺構を取り挙げて、それらの組物形式における様々な要素をまとめて考察する必要がある。

中国建築における組物形式を羅列した先行研究としては主に以下の成果が挙げられる。関口欣也氏による先行研究では、唐代から明代までの中国建築をまとめた表が挙げられている[8]。この表は組物の形式に関して、柱上と中備組物それぞれの手先・尾垂木の情報、または手先上の単栱造あるいは重栱造の要素が取り上げられている。また、野村俊一氏が執筆した『鑁阿寺本堂調査報告書』の「構成要素の調査」部分では、唐代から元代までの一重木造建築を対象にし、鋪作の形式に関して、柱頭・中備組物の手先・尾垂木、または台輪の情報を一覧表にまとめている[9]。

以上の両表を踏まえ、本論は重層建築や近年に取り壊された建物も対象に含め、組物形式に対して類型化を行い、［表 1］を作成した。［表 1］では、一棟の建物のなかで複数の組物類型が現れる場合、類型を基準に分けて表示する。一部の組物に対して「手先」だけでは表現できない要素が現れるため、「手先」以外に「鋪作数」の項目も取り入れて表記する。また、建物規模を表示する場合、梁行の柱間より架構の規模を示すために「○架椽」で表記する。

［表 1］によって、現存する遺構に見られる跳出する中備組物の形式は以下の二つの発展段階及び四つの類型に分けられる。第一段階の中備組物は柱上組物より鋪作数の少ないもので、一層目の壁付通肘木にのせている。現存遺構の中に中間桁を支持する中備組物（類型Ⅰ）と丸桁を支持する中備組物（類型Ⅱ）の二種類が見られる。第二段階の中備組物は頭貫あるいは台輪にのせ、柱上組物と同じ鋪作数をもつものである。第二段階に属する中備組物は、柱上組物と異なる外観を表すもの（類型Ⅲ）と詰組系中備組物（類型Ⅳ）に分けることができる。以下、それぞれの類型について遺構をもって説明する。

3−1 類型Ⅰ

類型Ⅰは通肘木にのせ、中間桁を支持する柱上組物より鋪作数の少ない中備組物である。

この類型の中備組物を用いる遺構は、仏光寺東大殿（857 年）・鎮国寺万仏殿（963 年）・独楽寺観音閣 2 階屋根（984 年）・仏宮寺釈迦塔 2 階屋根（1056 年）がある。これらの遺構は尾垂木二本を用いる四手先の柱上組物と、尾垂木なしの二手先の中備組物を一対で用いている。前述した蕭默氏の敦煌壁画に関する研究によると、このような形式は唐代中期にすでに登場したという。晩唐の仏光寺東大殿と五代の鎮国寺万仏殿はその典型的な実例である。その中でも、鎮国寺万仏殿の中備組物に関して、従来の解説では注目されなかった以下の二つの特徴がある[10]。

8　関口欣也：『江南禅院の源流、高麗の発展』，東京：中央公論美術出版，pp. 348-349，2012。

9　野村俊一：表「中国における全国重点文物保護単位古建築にみる組物と台輪」，「構成要素の調査」『鑁阿寺本堂調査報告書』，足利市教育委員会，pp.131-132，2011. 3，筆者は情報提供の協力をした。

10　鎮国寺万仏殿に関する解説は以下のものがある。『中国建築の研究』，p. 463. ；『世界美術大全集』東洋編 5，p. 406；『柴沢俊古建築文集』，p. 160；『中国古代建築史』第二巻，p. 501。田中淡氏は『中

（1）仏光寺東大殿の中備組物の一手目は通肘木から出跳しているため、すべての荷重は通肘木にかかっている。一方、鎮国寺万仏殿の場合、通肘木の下に間斗束（束は壁面の中に納められている）を通して中備組物の荷重を貫まで伝達している。

（2）仏光寺東大殿の場合、外側の中間桁と内側の天井桁は同じ高さだが、鎮国寺万仏殿の天井桁は中間桁より一層高い。そのため、中備組物の内外とも同じく二手先だが、外側は一層目の通肘木から、内側は二層目の通肘木から出跳している。即ち中備組物の一手目は外側のみの肘木となる。

大斗も一鋪として計算されるため、仏光寺東大殿の中備組物は大斗のない四鋪作となるが、鎮国寺万仏殿の中備組物の場合、内側は四鋪作で、外側は大斗を含めた五鋪作となる。

それ以外に、鎮国寺万仏殿の中備組物は、仏光寺東大殿と比較に以下の面でも発展したと考えられる。

まず、鎮国寺万仏殿の中備組物はより合理的な構造となっている。鎮国寺万仏殿は通肘木の下に束を設置することによって中備組物の荷重を貫に伝達し、通肘木の変形を防止できる。

次に、鎮国寺万仏殿の独特な中備組物形式は、構造的要求と内部的意匠の両方に応じた折衷案と考えられる。鎮国寺万仏殿は小規模な方三間仏殿だが、平面をほぼ全部占める仏壇を安置したため、殿内空間を狭く感じさせないように様々な工夫を施した。天井を張らず「徹上露明造」を採用するほかに、天井桁とともに内部の組物を全体的に一層上げている。そのため、中備組物の内側は二層目の通肘木から出跳することになっている。本来、中備組物の外側も合わせて二層目の通肘木から出跳するのは合理的だが、外側では一層目の通肘木にのせているように見せる工夫をした。［図 5－2］に示すように、中備組物の外側は半分しかない肘木を一手先として用いることによって、二手先の上に令栱を乗せることを可能にした（図 5－2）。

3―2　類型Ⅱ

類型Ⅱは通肘木にのせているが、丸桁まで持ち出す中備組物形式である。類型Ⅱの中備組物は必ず柱上組物より鋪作数が少ない、

類型Ⅱの中備組物をもつ実例として、独楽寺山門（遼 984 年）・崇明寺中殿（宋 991 年）・開善寺大殿（遼 1055 年以前）・下華厳寺薄伽教蔵殿（遼 1038 年）・仏宮寺釈迦塔 1 階屋根・仏宮寺釈迦塔裳階脇間（遼 1056 年）・閣院寺文殊殿（遼 1114 年頃）が挙げられ、ほとんどが遼代遺構である。これら実例の共通点は、中備組物が一層目の通肘木から出跳しているが、一番上の手先に令栱を持たず、直接に丸桁を受けているところである。その中で、独楽寺山門の二手先組物と仏宮寺釈迦塔 1 階屋根の四手先組物は代表的な例である。

国建築の研究』の第四章で、仏光寺東大殿の中備組物と比べて鎮国寺万仏殿の中備組物は、第一跳に乗せられている翼形栱がないことのほか、まったく同形式と解説している。柴沢俊氏は「山西省幾処重要古建築実例」にで、鎮国寺万仏殿の中備組物は下層通肘木から出跳する五鋪作で、仏光寺東大殿の中備組物と同形式と解説している。『中国古代建築史』第二巻の解説にも、鎮国寺万仏殿中備組物は内側が一手先多い以外、仏光寺東大殿の中備組物と同じ形式をもつと書かれている。

仏光寺大殿の柱上組物（左）と中備組物（右）
（筆者撮影・作成）

鎮国寺万仏殿の柱上組物（左）と中備組物（右）
（筆者撮影・作成）

図 5-2 類型Ⅰの中備組物

さらに、遺構の中で特筆すべき例としては、蕭黙氏の『敦煌建築研究』でも採り上げられている山西省高平市の崇明寺中殿である。崇明寺中殿は仏光寺大殿と同じく四手先七鋪作の柱上組物と二手先四鋪作の中備組物を対に用いている。崇明寺中殿の中備組物は一層目の通肘木から跳出するにも関わらず、二手目の肘木は丸桁まで持ち出し、さらにその上に令栱ものせている。常識を超えた長い肘木を用いているため、その肘木に尾垂木の彫刻を施し、三手先組物のように見せている。同類型の遺構と比べ、中備組物と柱上組物の鋪作数の差は大きく、類型Ⅱに属するというよりは、むしろ類型Ⅰの定式を超えた大胆な試みと考えられる（図5-3）。

独楽寺山門の柱上組物（左）と中備組物（右）
（筆者作成）

仏宮寺釈迦塔1階屋根の柱上組物（左）と中備組物（右）
（『中国古代建築史』第三巻、筆者加筆）

崇明寺中殿の柱上組物（左）と中備組物（右）
（筆者作成）

図 5-3 類型Ⅱの中備組物

3−3 類型Ⅲ

類型Ⅲは頭貫や台輪の上にのせ、柱上組物と等しい鋪作数に到達したが、異なる外観を表す中備組物である。

類型Ⅲの中備組物は 11 世紀の遺構に出現しはじめ、遼・金代の遺構の中で最も多く見られ

る類型でもある。類型Ⅲに属する中備組物は、柱上組物と相等しい構造を用いながら、外観に様々な相違点をもっている。それらの相違点は主に下方支持材・木鼻・斜栱や翼形栱の使用・尾垂木の有無に現れる。

まず、組物の下方支持材に相違が現れる実例として、奉国寺大殿と善化寺大殿が挙げられる。双方ともに中備組物の下に蟇股を用いているが、この２例は２つの発展段階を示している。類型Ⅲの中備組物にとって一手目に枠肘木を組むことは一般的だが、奉国寺大殿の場合には中備組物の壁付一手目は秤肘木ではなく、雲形肘木を用いている。その結果、柱上組物と中備組物の鋪作数は一致しているが、組物の立面に相違が現れる。そのため、奉国寺大殿の中備組物は、通肘木にのせるものから頭貫にのせるものへ発展する際の中間形態と考えられる。善化寺大殿の段階になると、中備組物は完全に頭貫まで下がり、外観的に柱上組物との唯一の差異は大斗の下に蟇股をもつところである。

また、木鼻の形で中備組物と柱上組物を区分できる古い例として大雲院弥陀殿が挙げられる。大雲院弥陀殿の柱上組物は批竹形木鼻を用いているが、脇間の中備組物は雲形の木鼻をもっている。また、隅の内部構造に制限され、脇間中備組物の二手先の上に秤肘木を置くスペースが足りないため、翼形栱を用いている。

現存する遼・北宋・金代建築のなか、斜栱の使用・不使用、また尾垂木の有無や形式によって中備組物と柱上組物を区分できる実例は多く見られる。これらの実例は、ほとんど類型Ⅲに属する中備組物を用いている（図５－４）。

（筆者作成・撮影）

図 5-4 類型Ⅲの中備組物における柱上組物との差異

表 1 跳出する中備組物を用いる唐・五代・遼・北宋・金代遺構情報一覧表

No.	建　物	年　代	所在地	規模 桁行・梁間	台輪	柱上組物 手先数	柱上組物 鋪作数	中備組物 手先数	中備組物 鋪作数	中備組物 大斗下装置	中備組物 類型
1	仏光寺大殿	唐857	山西省五台縣	7間・8架椽	−	4	7	2	4	(大斗無し)	I
2	大雲院弥陀殿 中央間	五代940	山西省平順縣	3間・4架椽	○	2	5	2	5	−	IV
3	〃 脇間	〃	〃	〃	〃	2	5	2	5	−	III
4	鎮国寺万仏殿	五代963	山西省平遥市	3間・6架椽	−	4	7	2	外5内4	束	I
5	華林寺大殿 正面	五代964	福建省福州市	3間・4架椽	−	4	7	4	7	−	IV
6	独楽寺観音閣 2階平座	遼984	天津市蓟縣	5間・8架椽	○	3	5	3	5	−	IV
7	〃 2階平座端の間	〃	〃	〃	〃	3	5	2	4	束	I
8	〃 2階屋根	〃	〃	〃	−	4	7	2	5	束	I
9	独楽寺山門	遼984	天津市蓟縣	3間・4架椽	−	2	5	2	4	束	II
10	崇明寺中殿	北宋991	山西省高平市	3間・6架椽	−	4	7	2	4	(大斗無し)	II
11	梅庵大殿	北宋996	広東省肇慶市	5間・10架椽	○	4	7	4	7	−	IV
12	保国寺大殿	北宋1013	浙江省寧波市	3間・8架椽	−	4	7	4	7	−	IV
13	元妙観三清殿	北宋1015	福建省莆田市	3間・8架椽	−	4	7	4	7	雲形蟇股	III
14	奉国寺大殿	遼1020	遼寧省義縣	9間・10架椽	○	4	7	4	7	蟇股	III
15	広済寺三大士殿	遼1024	天津市宝坻区	5間・8架椽	○	2	5	2	4	束	II
16	下華厳寺薄伽教蔵殿	遼1038	山西省大同市	5間・8架椽	○	2	5	2	4	束	II
17	隆興寺摩尼殿	北宋1052	河北省正定縣	7間・8架椽	○	2	5	2	5	−	III
18	開善寺大殿	遼1055以前	河北省新城市	5間・6架椽	○	2	5	2	4	束	II
19	仏宮寺釈迦塔 裳階脇間	遼1056	山西省応縣	八角形塔	○	2	5	2	4	束+蟇股	II
20	〃 裳階中央間	〃	〃	〃	○	2	5	2	5	蟇股	III
21	〃 1階屋根	〃	〃	〃	○	4	7	4	6	束＋蟇股	II
22	〃 2階平座	〃	〃	〃	○	3	5	3	5	蟇股	III
23	〃 2階屋根	〃	〃	〃	○	4	7	2	5	束＋蟇股	I
24	〃 3階平座	〃	〃	〃	○	3	5	3	5	−	IV
25	〃 3階平座正方位	〃	〃	〃	〃	3	5	3	5	−	III
26	〃 3階屋根	〃	〃	〃	○	3	6	3	6	蟇股	III
27	〃 4階平座	〃	〃	〃	○	3	5	3	5	−	III
28	〃 4階屋根	〃	〃	〃	○	2	5	2	5	蟇股	III
29	〃 5階平座	〃	〃	〃	○	2	4	2	4	−	IV
30	〃 5階屋根	〃	〃	〃	○	1	4	2	4	蟇股	III
31	保聖寺大殿	北宋1073	江蘇省用直鎮	3間・8架椽	−	2	5	2	5	−	IV
32	晋祠聖母殿 身舎正面	北宋11世紀	山西省太原市	7間・8架椽	○	3	6	3	6	−	III
33	〃 裳階正面	〃	〃	〃	○	2	5	2	5	−	III
34	開元寺毘盧殿	遼1109	河北省易縣	3間・6架椽	○	2	5	2	5	−	IV
35	開元寺観音殿 中央間	遼1109頃	河北省易縣	3間・6架椽	○	替木+1	替木+3	替木+1	替木+3	−	IV
36	開元寺薬師殿	遼1109頃	河北省易縣	3間・4架椽	○	2	4	2	4	−	IV
37	閣院寺文殊殿	遼1114頃	河北省涞源縣	3間・6架椽	○	2	5	2	4	束+蟇股	II
38	善化寺大殿	遼12世紀初	山西省大同市	7間・10架椽	○	2	5	2	5	蟇股	III
39	浄土寺大殿	金1124	山西省応縣	3間・6架椽	○	1	4	1	4	−	IV
40	少林寺初祖庵	北宋1125	河南省登封市	3間・6架椽	−	2	5	2	5	−	IV
41	龍岩寺中殿 中央間	金1129	山西省陵川縣	3間・4架椽	○	2	5	2	5	−	IV
42	善化寺普賢閣 1階屋根	金再建	山西省大同市	3間・4架椽	○	2	4	2	4	−	IV
43	〃 2階平座	〃	〃	〃	○	2	4	2	4	−	IV
44	〃 2階屋根	〃	〃	〃	○	2	5	2	5	−	IV
45	〃 2階屋根正面・背面中央間	〃	〃	〃	〃	2	5	2	5	−	III
46	仏光寺文殊殿	金1137	山西省五台縣	7間・8架椽	○	2	5	2	5	−	III
47	上華厳寺大殿	金1140再建	山西省大同市	9間・10架椽	○	2	5	2	5	蟇股	III
48	善化寺三聖殿	金1143再建	山西省大同市	5間・8架椽	○	3	6	3	6	−	III
49	善化寺山門	金1143再建	山西省大同市	5間・4架椽	○	2	5	2	5	−	IV
50	崇福寺弥陀殿	金1143頃	山西省朔州市	7間・8架椽	○	4	7	4	6	−	III
51	崇福寺観音殿 正面・背面	金1143頃	山西省朔州市	5間・6架椽	○	2	5	2	5	−	IV
52	〃 側面	〃	〃	〃	〃	2	5	2	5	−	III
53	二仙宮中殿 正面中央間	金1161	山西省高平市	3間・4架椽	○	2	5	2	5	−	III
54	晋祠献殿	金1168	山西省太原市	3間・4架椽	○	2	5	2	5	−	III
55	奉先寺三清殿	金1184	河南省済源市	5間・6架椽	−	2	5	2	5	−	IV
56	龍門寺天王殿　正面・背面中央間	金年代不詳	山西省平順縣	3間・4架椽	○	2	5	2	5	−	III
57	洪福寺大殿　正面	金年代不詳	山西省定襄縣	5間・6架椽	○	2	5	2	5	−	III

＊前の例と共通する情報を「〃」で省略する。

3−4 類型Ⅳ

類型Ⅳは頭貫や台輪の上にのせ、柱上組物と同じ外観をもつ中備組物である。

注意すべきなのは、詰組の中備組物はすべて類型Ⅳに属するが、類型Ⅳの中備組物をもつ建築は必ずしも詰組系建築に限らない。それは、一棟の建物におけるすべての立面と柱間に類型Ⅳの組物の組み合わせを用いなければ、詰組系建築と言えないためである。

まず詰組に関して、『営造法式』巻四「大木作制度一　総鋪作次序」の項目に中備組物について以下のように記述されている。

「凡於闌額上坐櫨斗安鋪作者謂之補間鋪作。當心間須用補間鋪作両朶、次間及梢間各用一朶。其鋪作分布令遠近皆勻。」

〈訳文〉

凡て闌額（頭貫）の上に櫨斗（大斗）をすえて鋪作をおくものはこれを中備組物という。中央間の柱間には中備組物を二朶（組）、次の間と端の間にはそれぞれ一朶（組）を用い、その中備組物の分布を遠近総て等しいようにするとしている[11]。

中備組物の具体的な形式に関して文書のなかでは詳しく説明されていないが、図様のなかに中備組物は柱上組物と同じ外観で描かれている。そのため、『営造法式』の文書・図様資料によって、宋代官式詰組の特徴は〔中備組物と柱上組物の外観を一致させる〕、そして〔中備組物を均等に配置する〕と捉えられる。詰組は、『営造法式』が代表する宋代官式建築の唯一の組物形式で、東アジア中に伝播され、日本の禅宗様建築と朝鮮半島の多包系建築の要素として定着したと共に、大陸では後世の明清代の官式建築にも強い影響を与えた。

また、現存実例を考察すると、類型Ⅳの中備組物は遅くとも五代の華林寺大殿（964年）の正面に見られる。後に、北宋遺構である保国寺大殿（1013年）・元妙観三清殿（1015年）・保聖寺大殿（1073年）・少林寺初祖庵（1125年）、そして金代遺構である浄土寺大殿（1124年）・善化寺山門（1143年）はいずれも詰組系建築で、同じ外観の組物を均等に軒廻りに配置している。遼代後期の河北省開元寺（1109年頃、現存せず）の毘盧殿と観音殿、金代の龍岩寺中殿（1129年）・善化寺普賢閣（金代）・崇福寺観音殿（1143年頃）は一部の柱間に類型Ⅳの中備組物を用いている。

4 台輪に関する考察

中備組物は通肘木より下って頭貫にのせるようになったと同時に、中備組物を受ける部材は安定性の需要に応じて発展した。具体的に、台輪の普及、または中備組物の下方支持材の変遷に注目したい。

日本では薬師寺東塔（730年）の側廻りに台輪の使用がすでに確認される。中国現存最古

11　竹島卓一：『営造法式の研究』三，東京：中央公論美術出版，p. 312，1972。（）の中は筆者注。

の台輪は五代の大雲院弥陀殿（940 年）に見られる。そして重層建築である独楽寺観音閣（984 年）の腰組も台輪を用いている。11 世紀に入ってから、北方建築のなかで台輪の使用は急速に普及した。

台輪の構造的利点について論じた先行研究は沈聿之氏の「斜栱演変及普拍枋的作用」[12] が挙げられる 。沈聿之氏によって、台輪の登場は中備組物を安定させる効果があるため、中備組物の構造的発展及び組物層の形成を促進したと指摘している。

一方、南方系の遺構を見ると、広東省所在の梅庵大殿（北宋 996 年）は台輪を用いているが、11 世紀以降の寧波の保国寺大殿（北宋 1013 年）、福建省の元妙観三清殿（北宋 1015 年）、河南省の少林寺初祖庵（北宋 1125 年）はいずれも台輪を持たず、その代わりに、組物の大斗を大きくし、断面の太い頭貫に喰い込むように設置している。

そして、『営造法式』のなかでは、台輪に関する記述は大木作の部分では平坐（腰組） の一箇所にしか見られない。巻三十の「鋪作転角正様第九」図様に描かれている 8 例の隅組物の図を考察すると、うち 3 例の平坐の図に台輪を表現しているが、ほかの図は台輪を用いず、組物を頭貫の上に直接乗せているように見える [13]。また、小木作の部分にも台輪を言及した幾つかの記述がある。小木作の場合、一つの柱間に多数の中備組物を配するために、腰組と同じ原理で一体性の高い構造層を求め、台輪技術を導入したと考えられる。逆に、小木作に用いられるような台輪技術はすでに発達していたにも関わらず、『営造法式』の大木作に台輪が使用されなかった理由として、その必要がないと判断されたとしか考えられない。そのため、宋代の大木作建築における官式は、軒廻り組物に台輪をもたない形式であると考えてよいのだろう（図 5－5）。

また、台輪技術の分布において、遼の地域または遼に隣接する宋の中原地域に台輪をもつ遺構が集中しているため、台輪は北方地方を中心に発達した建築手法である可能性は考えられる。

台輪の普及する前後の中備組物を考察すると、中備組物の形式における類型Ⅰから類型Ⅲへの発展は、台輪技術の普及と関連していることが分かる。そして台輪の普及と同時に、中備組物の下方に設けられる支持装置も変化していた。より古い形式を示す仏光寺大殿と崇明寺中殿の場合、大斗のない中備組物は通肘木から跳出し、その下、頭貫との間に支持材はなく、中備組物からのすべての荷重は通肘木に伝達している。この 2 例以外の類型Ⅰと類型Ⅱの中備組物をもつ遺構では、中備組物の下に束、あるいは［束＋蟇股］の支持材を用い、中備組物の荷重をこれらの支持材を通じて頭貫まで伝達している。11 世紀以降、類型Ⅲの中備組物を用いる遺構において、中備組物は通肘木から頭貫に乗せるようになったため、その下に束の使用はまずなくなり、大斗の下に蟇股を敷き、あるいは大斗を直接に台輪にのせる形になった（図 5－6）。

12　沈聿之：「斜栱演変及普拍枋的作用」『自然科学史研究』，1995 年 02 期，p. 176-184。
13　『営造法式』の四庫全書本・丁本・陶本・故宮本・張蓉鏡本を参考にした。

『営造法式』巻三十　鋪作転角正様第九
（『営造法式』四庫全書本）

図 5-5 『営造法式』による台輪の使用

図 5-6 台輪及び中備組物下方支持材の変遷

5 おわりに

以上中備組物の類型化を通して考察した上で、次のように幾つかの問題点を指摘したい。

(1) 北方系と南方系の建築における中備組物の発展は同時に行われたのではなく、また必ずしも同じ過程を経たとも簡単に言えない。大陸建築における南と北の体系的差異について、様々な先行研究で言及されているため、本稿では省略するが、中備組物の発展を検討する際に南方あるいは北方体系のどちらか属するのを大きな要因として注意しなければならない。

(2) 構造発展の面では、類型Ⅲは類型Ⅳ・詰組と同等な発展段階に到達していると考えられる。詰組を中備組物の完成形態と評価することは、あくまでも詰組系建築が普及された後世の見方である。遼・北宋・金時代のなかで、類型Ⅲにおける位置付けを再検討する必要がある。

(3) 類型Ⅰから Ⅳまでのすべての中備組物形式は遼代建築に見られる。遼代建築のバリエーションの多い組物形式は、唐・五代建築の未熟な構造を継承したものもあれば、意匠によって多様性を追求したものもある。そして、遼代建築における詰組系と異なる意匠による中備組物の活用は、後の金代建築に継承され、さらなる発展も見られる。そのため、遼・北宋・金代建築の多様性をもつ組物意匠を解明するには、前後の時代との比較はもちろん重要だが、時代内に起こった変遷及び発展も考察しなければならない。

以上の問題点を踏まえ、次は遼・北宋・金代建築の組物意匠について考察を行い、多様化組物形式における論理の解明を試みる。

第6章　仏宮寺釈迦塔（応県木塔）の組物

1　はじめに

仏宮寺釈迦塔は、山西省応県に位置する八角形平面裳階付きの五重木塔で、俗に応県木塔とも呼ばれ、中国に現存する最大規模の木塔である。釈迦塔は伊東忠太氏の 1932 年の踏査によって初めて学界に知られ[1]、1933 年に梁思成・劉敦楨を中心に営造学社が実測調査を行ったが、その成果は 1966 になって陳明達氏によって整理・公表された[2]。その間に村田治郎氏は 1938 年の現地調査を基に、調査報告を日本国内に公表した[3]。

釈迦塔の建立に関する記載が少ない中で、先行研究によって様々な説があるが[4]、遼興宗の皇后肖氏の一族が出身地である応州に釈迦塔を建立し、文献史料に度々見られる遼清寧二年（1056）は建設工事が完成した年という説が広く支持を得ている[5]。釈迦塔の建築についての先行研究は多数挙げられ、主に以下 3 つの視点から研究を行っている。

①基礎調査及び架構分析

1933 年に営造学社によって、釈迦塔に対して最初の実測調査をが行われた。当時の記録と図面は戦争を経て僅か一部しか残っておらず、2007 年に終に公表された[6]。1942 年陳明達氏は、営造学社の実測図を基に図面を再作成した上で、釈迦塔に対して総合的解説及び架構形式の分析を行った。さらに後年、陳明達氏は、中国建築史の中における釈迦塔の位置付けの考察を通して、中国建築発展史の基礎を構築した[7]。

②設計手法に関する研究

釈迦塔に対して実測寸法に基づいて設計手法を検討する研究は最初に陳明達氏によって行われた。陳明達氏は仏宮寺の伽藍配置をはじめ、釈迦塔の平面・立面・断面の比例関係を考察した上で、釈迦塔の設計手法について論じた[8]。傅熹年氏は釈迦塔を日本の木塔遺構や中国の

1　伊東忠太：「北清建築調査報告」『建築雑誌』189 号，1906. 9（『東洋建築の研究』上，東京：原書房，1982 に収録）。

2　陳明達：『応県木塔』，北京：文物出版社，1980（初出 1966）。

3　村田治郎：「応県仏宮寺の大木塔」『建築学会論文集』第 13 号，1939. 4（『中国建築史叢考・仏寺仏塔篇』，東京：中央公論美術出版，pp. 175-214，1988 に収録）。

4　前掲注 3（1979 年に執筆の補遺）にまとめられている。

5　前掲注 2，陳明達：p. 20-22。

6　梁思成：「1933 年到 1935 年営造学社関於木塔調査測絵的成果」『梁思成全集』第十巻，北京：中国建築工業出版社，2007。

7　前掲注 2；陳明達：『中国古代木結構建築技術 戦國―北宋』，北京：文物出版社，1990。

8　前掲注 2，陳明達：「下篇（四）建築設計及構図」。

実物と比較しながら、塔における設計方法を検討した[9]。先行研究を踏まえ、近年、張十慶氏[10]と肖旻氏[11]は釈迦塔における比例関係の解読、及び設計モジュールについて新たな見解を述べた。

③部材の破損調査及び構造力学の面からの検証

1990年代以来、中国文物研究所と北京建築工程学院、そして2000年前後に、太原市観察測絵研究院と山西省古建築保護研究所は、保存修復を目的に釈迦塔に対して観測を行い、現状破損図などの調査報告を発表している。2003年に北京大学考古文博学院によるC14測定と、2011年に中国文化遺産研究院による3Dスキャンが部分的に行われ、精度の高いデータが得られた。また、1980年代から近年まで、太原理工大学・ハルビン工業大学・北京工業大学などの大学、及び中国科学院力学研究所・中国地震局工程力学研究所を中心に、構造力学の面からの研究成果は多数発表されている[12]。

上述のように、釈迦塔に対して行われた先行研究は、架構形式の分析と構成手法の解読に力を入れている。特に釈迦塔の保存修復に対する関心が高まる近年では、構造の面からの検証の精度が上がっていくことに伴い、釈迦塔の構成手法を探求するための研究方法も多様に発展してきた。

なお、本論文が注目している組物について、陳明達氏は釈迦塔に見られるバリエーションの多い組物について、「構造の需要」あるいは「構図の需要」に応じて用いられているという意見を述べている[13]。陳明達氏は、釈迦塔の組物形式における一部のバリエーションは単なる構造の需要に従った結果であり、構図の需要に応じて付けられたバリエーションも存在するが、必ず構造の合理性を前提としているため、構図の需要を優先して、組物の構造的機能が影響されることはないと指摘している。

例えば、陳明達氏は釈迦塔の中備組物を構造の需要に応じて用いられたものであると主張し、中備組物の下に設けられている蟇股に対して、荷重を均等に伝達するための手法であるとの解釈を施している。また、通肘木から跳出する中備組物や様々な斜栱については、組物の間隔を調整するための工夫であると主張している。

陳明達氏の先行研究を参考に、本章は主に釈迦塔の組物意匠に注目し、異なる視点から釈迦塔の組物論理を考察する。このような考察は「構造の需要」を中心とした陳明達氏の検討に対する補足となるほかに、釈迦塔における歴史的様相を全面的に理解するためにも不可欠なものであると思う。

9 傅熹年：『中国古代城市規劃、建築群布局及建築設計方法研究』（上冊），北京：中国建築工業出版社，pp. 171-174，2001。

10 張十慶：「『営造法式』八稜模式与応県木塔的尺度設計」『建築史』，2009年02期，pp. 1-9。

11 肖旻：「山西応県木塔的尺度規律」『西南交通大学学報』，2004年06期。

12 永昕群・侯衛東：「応県木塔観察測絵研究回顧」『中国文物報』2013年8月30日号。

13 前掲注2，陳明達：pp. 47-48。

2　各重による組物形式の異同

釈迦塔には合計54種類の組物が見られ、その使用位置によって軒廻り組物、平座組物、そして入側通組物とに大きく分けられる。塔の身舎は5層の屋根をもつが、一階は裳階付きで、軒廻り組物は合計6層がある。二重以上は平座（縁廻り）を設けているため、外部から見える側通りにさらに4層の平座組物がある。また塔の内部では、各階の中央に仏像を安置し、仏像上方の天井を張るために入側通組物を用いている。それら組物の中で、軒廻り組物と平座組物は塔の外観にとって重要な構成要素で、軒廻り組物の内側と入側通組物は内部から見えるもので、建築の内部意匠と関わる要素である。

そのため、外部の組物と内部の組物とに分けて、その装飾要素に注目しながら、釈迦塔の組物形式について以下のように考察する。

2−1　外部の組物

釈迦塔においては、外部からは6層の軒廻り組物と4層の平座組物、合計10層の組物が見える。筆者はそれらの組物における装飾的要素に注目しながら、各層の組物形式を下から上へという順で、以下のように概説する（図6−1）。

①裳階の軒廻りは二手先5鋪作組物を用いている。八面すべての中央間に45°斜栱もちの中備組物を配し、その大斗下に蟇股を用いている。また、裳階は身舎より一廻り大きいため、脇間にも中備組物を用いている。脇間の中備組物は通肘木から跳出する4鋪作であるため、その大斗下に［束＋蟇股］を設けており、また一手目の上に翼形栱ものせている。

②初重の軒廻り組物は2本下昂もちの四手先7鋪作である。中備組物は通肘木から跳出する6鋪作で、大斗下に［束＋蟇股］を用いている。

③二重の平座組物はすべて三手先5鋪作の組物で、中備組物の大斗下に蟇股を用いている。

④二重の軒廻りでは、2本下昂もちの四手先7鋪作の柱上組物と、67.5°斜栱もちの二手先5鋪作の中備組物を配している。柱上組物と中備組物はいずれも襯頭方を持ち出して翼形木鼻としている。

⑤三重の平座は三手先5鋪作の組物を配している。四正方位では45°の斜栱を用いている。

⑥三重の軒廻りは全体的に三手先6鋪作の組物を配置している。四正方位の中備組物は二・三手目として45°の斜栱を2本用いて、四偏方位の中備組物は三手目のみに45°の斜栱を1本用いている。それらの中備組物はすべて大斗下に蟇股を設け、手先の上に翼形栱ものせている。そして、柱上組物と中備組物とともに、批竹形木鼻を外部に出している。

⑦四重の平座は全体的に三手先5鋪作の組物を配している。八面すべての中備組物は45°の斜栱と翼形栱を両方用いている。

⑧四重の軒廻りは全体的に二手先5鋪作の組物を用いている。柱上組物と中備組物とは共

（『応県木塔』筆者加筆）

図 6-1　釈迦塔の外部組物

に批竹形木鼻を出している。また、中備組物の大斗下に蟇股を設けている。

⑨五重の平座は二手先 4 鋪作の詰組を配置している。

⑩五重の軒廻りは一手先 4 鋪作の柱上組物と、二手先を持ち出しているが同じく 4 鋪作の中備組物を用いている。中備組物は大斗下に蟇股を設け、手先の上に翼形栱をのせている。

上述のとおり釈迦塔の外部には、中備組物形式の類型Ⅰから類型Ⅳ、さらに詰組まで、中備組物における構造発展のすべての段階に属するものが混用されている[14]。また、組物の外観に多様性を持たせる要素として、第 6 章の中で考察した大斗下の支持材・木鼻・翼形栱・斜栱・尾垂木のすべてが釈迦塔の外部組物に用いられている。

軒廻り組物については、裳階を除いた初重から五重まで、組物の大きさが段々と小さくなっている。初重と二重の柱上組物はともに四手先 7 鋪作で、三重以上の柱上組物はそれより 1 鋪作単位で次第に減らしていく。それについて陳明達氏は、各重の高さと軒の出は先に設計されるため、組物の鋪作数はそれに従って調整されていると主張している[15]。

陳明達氏の先行研究に加えて筆者は、重数に従って次第に変わる柱上組物の形式は、その等級差を示す効果もあると指摘したい。同じ重層建築である独楽寺観音閣を見ると、初層の軒廻りに浮彫中備を用いていることから、中間層の屋根を支持するために中備組物は不必要であることが分かる。釈迦塔の中備組物に注目すれば、共に四手先柱上組物を用いる初重と二重において、初重が 6 鋪作であり、二重が 5 鋪作であるという中備組物の差異は、組物の等級差を示すための工夫であるとも考えられる。

2―2　内部の組物

釈迦塔の場合、内部意匠と関わるのは軒廻り組物の内側と入側通の組物である。内部意匠において、柱上組物は梁を組み込むため、装飾要素をほとんど持たない。それと対照的に、中備組物には様々な工夫が施され、内部意匠を表現している。軒廻り中備組物の内側を考察すると、三重から五重まで、内側の翼形木鼻は二手目の上にのせるように統一していることが分かる。それは入側通組物における外陣側の二手先と合わせるための工夫であると考えられる。一方、入側通の組物において、外陣側は五重とも二手先であるが、内陣側ではほとんど四手先を持ち出している。唯一の例外は、三重の四正方位で、60°の斜栱を用い、その上に翼形栱をのせたっ部分である。

上述のとおり、外部の組物は層によって格式を次第に変えるのと異なり、内部の組物は何層であるかに関わらず、主に内陣に四手先、外陣に二手先を用いている。塔の全体のプロポーションを整えるための外部意匠と違い、内部の組物意匠は各層に対する自律的な原則に従っていると考えられる（図 6－2）。

14　第 5 章及び表 1（付録）を参照。

15　前掲注 2，陳明達。

（『応県木塔』筆者加筆）

図 6-2　釈迦塔の内部組物

3　中備斜栱

釈迦塔は現存する建物の中で、柱間に斜栱を用いる最古の事例である。釈迦塔の斜栱を考察することによって斜栱における発生と変遷の経緯を検討した先行研究として、陳薇氏と沈聿之氏の論文が挙げられる。

陳薇氏は斜栱の発生について、梁が直接外部に持ち出した肘木は最初に隅部、特に重層建築の隅部に用いられ、後に重層建築の平面形式が四角形から六角形・八角形へと変形していくとともに、釈迦塔に見られるように、隅の肘木は自然に斜栱となったと主張している。沈聿之氏は、玉虫厨子の隅に見られる斜材などの実例を参考に、斜栱は隅組物の「抹角栱」という斜材から発展してきたと主張している。また、柱間に配置される斜栱に対して、斜栱は優れた装飾性のほかに、丸桁と組物の接触点を増やす構造的役割をもつため、柱間にも用いられるようになったと解釈している[16]。

なお、上述の先行研究は、共に柱間の斜栱を隅部の斜栱から移転してきたものと認めているが、柱間の斜栱における形式の由来及びその配置ルールについて触れていない。以下では、先行研究では解明されていない中備斜栱のルールを探求する。

釈迦塔には二種類の角度の斜栱が見られる。釈迦塔の組物形式を解説したこれまでの先行研究は、例外なくその二種類の斜栱を60°と45°と記述している。釈迦塔のほかに、同時代の善化寺大殿と金代再建の善化寺普賢閣・上華厳寺大殿にも60°と45°の二種類の斜栱が確認される。しかし、釈迦塔の「60°」と言われている斜栱はほかの遺構に用いられているものとは異なり、正確な角度は「67.5°」である。この「67.5°」と「45°」の数値こそが釈迦塔の中備斜栱の由来を解明する鍵である。

3−1　モジュールである三重

釈迦塔において、裳階を除けば、中備斜栱は立体的に三重を囲むように、二重軒廻りから四重の平座までに集中的に用いられている。また、三重の外部及び内部の組物に多く施されている装飾要素も特に注目を集める。さらに、陳明達氏と張十慶氏はともに、三重の寸法は釈迦塔の全体における設計のモジュールであると主張している。

陳明達氏著書『応県木塔』の中で、釈迦塔全体の高さ及び各重の高さの計算を通して、各重の標準高さを8.83m、すなわち三重の間口寸法に等しいと指摘している。それを踏まえて張十慶氏は釈迦塔の営造尺を29.46cmに基づき、8.83mを30尺と換算し、三重の間口寸法である30尺は高さの基準数値だけではなく、各重の平面計画寸法のモジュールでもあると指摘している[17]。

16　陳薇：「斜栱発微」『古建築園林技術』, 1987年04期, pp. 40-45；沈聿之：「斜栱演変及普拍枋的作用」『自然科学史研究』，1995年02期，p. 176-184。

17　張十慶：『中日古代建築大木技術的源流与変遷』，天津：天津大学出版社，pp. 99-103，2004。

八角形の寸法パタン　　（「『営造法式』八稜模式与応県木塔的尺度設計」）

図 6-3 張十慶による釈迦塔の寸法構成についての分析

（『中国古代建築史』第三巻、筆者加筆）

図 6-4 釈迦塔の三重における平面構成分析図

さらに、張十慶氏は『営造法式』に記載されている正方形から正八角形を作る方法を採り上げ、釈迦塔の平面寸法を『営造法式』による八角形輪蔵の計画寸法と比較した。『営造法式』による正八角形の基準寸法は「八稜径六十、毎面二十有五、其斜六十有五」[18]である。そのため正八角形は、外接正方形の一辺の長さを示す「径」、正八角形の一辺の長さを示す「面」、又は外接円の直径を示す「斜」の寸法で決められる。張十慶氏は「径」を整数にする原則を用いる『営造法式』と異なり、釈迦塔は「面」を整数にする原則に従っていると指摘している。また、入側通の位置を決めたのは、側通との距離を15尺の整数とする原則であったとも指摘している[19]（図6－3）。

3−2　平面構成を表す中備斜栱

三重では、内外陣境すなわち入側通に45°と67.5°の二種類の斜栱を用いている。入側通の位置を決める方法について、前述のとおり張十慶氏は先行研究において側通との距離を整数にする原則に従ったと指摘している。また、側柱は入側柱より中央にずらしている。その理由について、陳明達氏は、入側柱の上に繋ぎ梁と隅梁を同時に受けることを避けるためであると解釈している[20]。一方、肖旻氏は三重の側通の柱間に見られる不規則な寸法に注目し、整数制とモジュール制が同時に釈迦塔に用いられていると指摘している[21]。

以下において筆者は、上述の先行研究を踏まえ、釈迦塔の三重の入側柱と側柱との位置関係に基づき、三重に用いられている二種類の斜栱における配置ルールを探求する。

まず、四正方位の対面柱の柱心を連結すれば、それぞれ2点を通る直線の交点に、45°斜栱が直線と重ねて配置されていることが分かる。さらに、入側柱を通る直線を延長し、側通との交点に側柱が配置されている。一方、四正方位に用いられている67.5°の斜栱は隅梁と平行し、斜栱の延長線上には、側柱と仏壇の角の位置が合っていることが分かる。

釈迦塔では、各重の中心に仏像が安置されている。三重以外はすべて南に面する主仏を中心に配置しているが、三重だけは四正方位にそれぞれ面する四方仏を奉っている。釈迦塔にとって三重の重要性は、先行研究による断面・立面の高さ計算によって検証されている。それ以外に、三重の平面構成において、入側通と側通の位置関係、そして仏壇の規模と外部の立面を構成する側柱の位置関係など、様々な関連性が捉えられる。それらの関連性を示す要素として、斜栱が用いられたと考えられる。そのため、三重の組物計画において、四偏方位の45°の斜栱は側通と入側通の位置関係を示すシンボルであり、四正方位の67.5°の斜栱は仏壇と塔の外部の関係を表すシンボルであると解釈できる（図6-4）。

18　『営造法式』補遺（看詳）の「取径囲」項目。
19　前掲注10，張十慶。
20　前掲注2，陳明達：p.35。
21　前掲注11，肖旻。

図 6-5 斜栱の角度の形成

3-3　中備斜栱の角度

上述で考察したとおり、釈迦塔にはその平面が正八角形であるため、横材方向と跳出材方向にそれぞれ合わせた 45°と 67.5°の二種類の斜栱が用いられている。釈迦塔の原理を参考にすれば、60°の斜栱は最初に平面が正六角形の構造に登場したと考えられる。正六角形構造の場合、横材方向と跳出材方向の挟角はちょうど 60°になるため、60°一種類のみの斜栱を生み出したと推測できる。

なお、遼・金代の遺構の中で、善化寺大殿・善化寺普賢閣・上華厳寺大殿に 45°と 60°の二種類の斜栱が確認される。様々な斜栱は多辺形構造に登場した後に、その装飾的意味が重視され、仏殿にも用いられるようになったのだと考えられる。また、上述三棟の遺構は例外なく中央間に 60°の斜栱、脇間あるいは隅に 45°の斜栱を用いている。この共通性から、仏殿における斜栱の使用は特定の配置ルールに従っていると思われる。

釈迦塔三重の場合、四正方位に 67.5°、四偏方位に 45°の斜栱を配する理由は、前述のとおり、それぞれ仏壇の位置と内部空間の構成にあると考えられる。釈迦塔を参考にすると、これらの仏殿は中央間に 60°の斜栱を配することで、中央に安置されている主仏を標記していると推測できる。さらに格式の面では、60°の斜栱が 45°の斜栱よりも高級である可能性が考えられる。

陳明達氏は前述の先行研究によって、斜栱の角度は組物の間隔に応じて調整された結果であると指摘している。しかし上述の仏殿の場合に、中央間は脇間より広いにも関わらず、中央間に幅の狭い 60°の斜栱を用いることは、斜栱の格式は構造の需要よりも優先されていることを示していると思われる（図 6-5）。

4　おわりに

仏宮寺釈迦塔は遼代中期から後期まで長年をかけて宋と隣接する地域に建立された建築作品である。釈迦塔は遼代前期の建築技術を継承しながら、詰組系の宋式建築と異なり、多様な組物を用いている。その点について、伊東忠太氏は釈迦塔を日本建築の組物と比較した上で、「要するに斗栱の制に変化多きは即ち意匠の富裕なる所以なり。これを我が邦の千篇一律、毎層殆ど同一の斗栱を反復するに比すれば、其の優劣は素より論を待たざるなり」[22] と、組物意匠面からの評価を求めている。

本章では、従来の先行研究による構造面で行われた検討を踏まえ、組物意匠の面からの考察を通して、釈迦塔の組物構成についての再解読を試みた。それら多様な組物形式は、組物における構造発展の中間形態を示すものがあれば、構造が成熟した後の意匠的工夫を反映するものも確認される。その結論は以下のようにまとめる。

釈迦塔は、外側からの鑑賞、又は内部を巡って参拝する行為を考慮し、組物意匠を外部意匠と内部意匠を分けて設計された。外部意匠は、塔の初重から五重へと逓減する造形に合わせて、組物の等級も逓減していく原則に従っている。一方、内部意匠に従って各層の内部では、内陣と外陣の組物に等級差を付けるように工夫されている。

また、床の荷重を受ける平座組物を除き、釈迦塔の中備組物は主に意匠のために用いられていると考えられる。特に斜栱を持つ中備組物は、釈迦塔における平面設計・空間構成・外観計画など、様々な意味を持たされ、特定な位置に配置されていることが明らかになった。

22　伊東忠太：『東洋建築の研究』，東京：原書房 , p. 338，1982（初版 1936）。

第三部　中国北方建築の組物多様化現象

第7章　組物の多様化について

1　はじめに

側廻り組物について『営造法式』に「鋪作分布令遠近皆匀」という原則が記述されている。傅熹年氏によれば、北宋建立の際に、中国の中原地方における唐文化の伝統はすでに衰退したため、北宋は山東省地方や江南地方の文化を吸収し、都城であった汴梁（現在の開封市）地区の伝統と融和させ、北宋官式建築を作り上げた[1]。江南建築における均等化された側廻り組物は、北宋官式建築に取り入れられ、北宋官式建築における唯一の組物意匠として確立された。例えば、北宋の官式建築における中央間に必ず2組の中備組物を用いる規定は、江南建築に見られる組物の間隔をモジュール化する手法に影響されたと考えられる。後に、南宋王朝は江南地方を中心として再興し、南宋建築は北宋官式に基づき、さらに江南建築様式の要素を取り入れたものと推測される。その後、元代建築の地方的発展を経って、明代初期の南京から北京への遷都をきっかけに、江南技術は北上し、明代官式建築の形成に大きく影響を及ぼし、後世の清代官式建築にまで受け継がれた。言うならば、宋代以降の中国官式建築において、外観が統一された組物を側廻りに配する形式は不可欠な特徴である。

ただし前章の考察を参考にすると、宋代官式建築の均等化された組物形式の定着と同時に、一棟の建物の側廻りに様々な外観の組物が混用される現象が唐文化の伝統を受け継いだ北方建築に多く見られる。それは『営造法式』に記載されている統一化・均等化された宋代官式組物と対照的となる組物形式と考えられる。木造遺構の中で多様な組物を用いる手法は、早くは中国最古である南禅寺大殿に見られ、遼・北宋・金代に全盛期を迎え、元代以降に官式建築の普及によって衰退し、明清代建築ではほとんど姿を消した。

遼・北宋・金代建築に多く用いられていた多様な組物は、これまでの中国建築史研究の中では十分重視されておらず、一部の特徴的な部材を検討した先行研究は以下のように挙げられるが、そのほとんどは斜栱に対して考察を行ったものである。

中国大陸の研究者によって、組物の多様化（特に斜栱）は、山西省・河北省の一部の地域に流行していた地方技術と認識されており、斜栱を構造の面から分析・評価する視点は主流である。その代表的な研究成果として陳薇氏の「斜栱発微」[2]と沈聿之の「斜栱演変及普拍枋的作用」[3]が挙げられる。陳薇氏は、斜栱の発生段階からの初期的発展は構造上の合理性を持っていたが、後年の斜栱の衰退はその構造的機能の喪失に伴った変化であると指摘している。

1　傅熹年：『中国科学技術史』建築巻，北京：科学出版社，p. 451，2008。
2　陳薇：「斜栱発微」『古建園林技術』，1987年04期，p. 40-45。
3　沈聿之：「斜栱演変及普拍枋的作用」『自然科学史研究』，1995年02期，p. 176-184。

沈聿之氏の主な主張は斜栱の発生を台輪と中備組物における構造発展の結果であるというものであるが、斜栱が装飾性を付加するために用いられたことにも注目し、斜栱は建築の特定箇所に装飾をつけるという意義があることにも言及している。

台湾の漢宝徳氏は視覚的効果の視点から、宋式建築の統一された組物外観を理想形であると主張しているが、中備斜栱を用いる隆興寺摩尼殿を例に挙げ、その華やかな中備組物は唐代以来の柱上組物を中心とした側廻り組物の視覚的秩序を転覆したと指摘している。また、漢宝徳氏は隆興寺摩尼殿と類似した中備斜栱をもつ善化寺大殿・上華厳寺大殿を同じ系統に属するものと認めている[4]。

また、Alexandra Harrer（荷雅麗）氏はその博士学位請求論文『Fan-shaped Bracket Sets and Their Application in Religious Timber Architecture of Shanxi Province』[5]で山西省に位置する斜栱をもつ元代以前の遺構を網羅的に考察し、斜栱の形式における時代的発展と地域的バリエーションを解説した。また、荷雅麗氏は論文「両種使用斜栱的重要且成熟的設計概念：「扇形斗栱」和「如意斗栱」」[6]で斜栱を用いる組物形式を設計思想の違いによって分類し、斜栱における本質的な特徴を述べ、さらに斜栱は山西省以外の地域にも広く採用されていたと指摘している。

以上の先行研究を踏まえると、遼・北宋・金代の多様な組物を用いる北方建築は同一系統に属することが分かる。本論文ではこれらの北方建築の組物の特質を「組物多様化」と呼ぶ。以下では、斜栱に限らず、組物の多様化における様々な要素を採り上げて総合的な考察を行い、組物多様化の発生と発展に影響を及ぼした要因を探求する。

2　組物多様化現象の概要

日本建築史の文脈の中で、「側廻り組物の外観差異」というと、まず注目されるのは柱上組物と中備の差異のことを指すであろう。日本建築様式の中で、和様と大仏様建築は跳出しない中備を用いるため、疎組系と分類される一方、禅宗様建築は柱上組物の外観と一致する中備組物を用いるため、詰組系の代表となっている。日本建築における疎組と詰組との区分は、柱と柱の間に組物を置くかどうかという点にある[7]。しかし、一般的に使われている疎組・詰組の用語は、一つの立面に限らず、建物の側廻り組物の全体的様相を示す概念である。日本建築ではすべての立面は同じ組物構成であるのが一般的だが、中国建築の中では、立面によって異なる組物構成を表す実例は多く見られる。そのため、厳密に言えば、中国北方建築の中で、

4　漢宝徳：『斗栱的起源与発展』，台北：境与象出版社，pp.92-105，1988（初版1982）。

5　Alexandra Harrer：『Fan-shaped Bracket Sets and Their Application in Religious Timber Architecture of Shanxi Province』，University of Pennsylvania，2010.12。

6　荷雅麗（Alexandra Harrer）：「両種使用斜栱的重要且成熟的設計概念：「扇形斗栱」和「如意斗栱」」『古建園林技術』，2012年02期，pp.11-18。

7　『中村達太郎　日本建築辞彙〔新訂〕』（2011年）の「あまぐみ」「つめぐみ」項目を参考。

類型Ⅲ・類型Ⅳ[8]の中備組物を用いるものは柱と柱の間にも組物を置くが、詰組系建築に分類されないのは妥当である。

上記によって、柱上組物と中備は建築様式を区分する最も重要な要素の一つであると言っても過言ではない。そのため本章では、日中の現存する木造建築を柱上組物と中備の構成によって以下のように分類する。

A. 柱上組物と中備装置がそれぞれに統一されるもの：日本の和様・大仏様建築、そして四面同様の組物構成を示す唐代から金代までの一部の中国遺構を含む。

B. 柱上組物は統一されるが、中備にバリエーションが現れるもの：立面によって異なる組物構成を表す中国唐代から金代までの多数の遺構と中世以降の日本和様建築の一部を含む。

C. 柱上組物と中備ともにバリエーションが現れるもの：現存一部の遼・金代遺構に見られる。

C´. 出跳しない中備を用いながら、柱上組物を立面によって区別するものとして、幾つかの遺構が確認される。それらの遺構はCの構成方式と共通性をもつため、C´と表記する。

D. 柱間に中備組物を配し、柱上組物と統一した外観を持たせるもの、すなわち詰組：日本禅宗様建築と宋式以降の中国官式建築はそれに該当する。

上記の中で、本論文で研究対象として採り上げるのは詰組を除いた類型A・B・Cに該当するものである。すなわち一棟の建物の側廻りに異なる外観の組物を用いる形式をすべて「組物多様化」として扱う。ここで遺構からみた4類型の組物構成を、前章で検討した中備の構造発展と合わせて［表2］にまとめる。そして［表2］に基づき、組物の構成類型における発展の様相を考察していく。

類型Aは、唐代中期の小規模建築に多く見られ、その後鎮国寺万仏殿（五代963年）や独楽寺山門（遼984年）から、遼代後期の閣院寺文殊殿（遼1114年頃）まで見られた。柱上組物よりも構造的格式の低い中備を用いる構成が主流であった。時代が下った金代においては、中備組物がすでに発達していたが、金代の晋祠献殿（金1168年）では、宋代の聖母殿を真似して造られたものとして、聖母殿と呼応するように柱上組物と中備組物に差異をつけている。

類型Bに属する遺構に、中備におけるすべての発展段階に当たる様々な中備が見られる。類型Bは遼・北宋・金代の北方地方に長年流行した、最もバリエーションの多い構成類型で、南禅寺大殿にすでに見られ、金代後期に至っても組物構成の主流であり続けた。南禅寺大殿（唐782年）は正面と背面の中央間にのみ、壁付通肘木に中備と見られる翼形栱の浮き彫りが施されている。同じく唐代の仏光寺大殿（唐857年）は側廻りに四手先の柱上組物と二手先の中備組物を交互に配しているが、正面の中備組物にのみ翼形栱を一手目の上にのせ、ほかの立面と区別しようとしている。組物の構造発展に従い、類型Ⅲ・Ⅳの中備組物が登場して以後は、一棟の建物の中に用いられる側廻り組物のバリエーションは更に豊富になった。その代表的

8　第5章及び表1を参照。

図 7-1 組物多様化の構成分類

な事例は遼代の善化寺大殿（遼 12 世紀）[9] や金代の仏光寺文殊殿（金 1137 年）[10] が挙げられる。

類型 C の最も代表的な遺構として、正定隆興寺摩尼殿身舎（北宋 1052 年）[11] と崇福寺弥陀殿（金 1143 年）[12] が挙げられる。両者とも斜栱をもつ柱上組物を用いる事例で、架構形式に制限されなく側廻り組物をより自由にアレンジしており、高度な組物技術を用いたと見られる。この 2 棟の遺構について、後章で個別研究として採り上げて詳しく分析する。

そして、特筆すべき C´ の構成方式を示している遺構として、北宋末期の金洞寺転角殿と金代の回龍寺大殿が挙げられる。金洞寺転角殿は方三間の入母屋造で、柱上のみに出跳する組物を配している。正面の組物は平出仮昂の上に下昂形の木鼻を用いていると対照に、背面の組物は肘木のみで構成されている。格式的にその間に考えられるのは側面の組物で、肘木の手先の上に批竹形木鼻と呼ばれる先端が尖っている木鼻を用いている。また、回龍寺大殿は前廊をもつ切妻造で、前面の側通と入側通にのみ組物を用いており、背面では梁尻を大斗に直接のせている。

類型 D の詰組は南方で 10 世紀後期という早い時期の遺構に見られるが、北方では北宋と隣接する地域に位置する 12 世紀以降の遺構に確認される。金代以降、詰組は組物多様化と併存していたと考えられる（図 6－1）。

9　第 8 章の図 8－3 を参照。
10　第 8 章の図 8－6 を参照。
11　第 9 章の図 9－5 を参照。
12　第 8 章の図 8－6 を参照。

表 2 組物多様化様式の構成分類

No.	建　物	年　代	所在地	屋根形式	中備類型	分類	配置ルール
1	南禅寺大殿	唐782	山西省五台山	入母屋	浮彫	B	正方位性、中心性
2	広仁王廟大殿	唐831	山西省芮城縣	入母屋	浮彫	A	各立面同様
3	仏光寺大殿	唐857	山西省五台縣	入母屋	Ⅰ	B	正面性
4	開元寺鐘楼　二重楼閣	唐898	河北省正定縣	入母屋	浮彫	A	各立面同様
5	天台庵正殿	晩唐	山西省平順縣	入母屋	浮彫	A	各立面同様
6	龍門寺西配殿	五代925	山西省平順縣	切妻	浮彫	A	各立面同様
7	大雲院弥陀殿	五代940	山西省平順縣	入母屋	Ⅲ・Ⅳ	B	各立面同様、中心性
8	鎮国寺万仏殿	五代963	山西省平遥縣	入母屋	Ⅰ	A	各立面同様
9	華林寺大殿	五代964	福建省福州市	入母屋	なし・Ⅳ	B	正面性
10	独楽寺観音閣　二重楼閣	遼984	天津市薊縣	入母屋	浮彫・Ⅰ・Ⅰ・Ⅳ	B	正方位性、中心性
11	独楽寺山門	遼984	天津市薊縣	寄棟	Ⅱ	A	各立面同様
12	崇明寺中殿	北宋991	山西省高平市	入母屋	Ⅱ	A	各立面同様
13	梅庵大殿	北宋996	広東省肇慶	入母屋(復原)	Ⅳ	D	各立面同様
14	保国寺大殿	北宋1013	浙江省寧波市	入母屋	Ⅳ	D	各立面同様
15	元妙観三清殿	北宋1015	福建省莆田市	入母屋	Ⅲ	A	各立面同様
16	奉国寺大殿	遼1020	遼寧省義縣	寄棟	Ⅲ	A	各立面同様
17	広済寺三大士殿	遼1024	天津市宝坻区	寄棟	Ⅱ	A	各立面同様
18	下華厳寺薄伽教蔵殿	遼1038	山西省大同市	入母屋	Ⅱ	A	各立面同様
19	隆興寺摩尼殿　裳階付	北宋1052	河北省正定縣	入母屋	Ⅲ	C	各立面同様(正面庇大きい)
20	開善寺大殿	遼1055以前	河北省新城縣	寄棟	Ⅱ	B*	各立面同様*
21	佛宮寺釈迦塔　八角形五重塔	遼1056	山西省応縣	宝形	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ	B	正方位性
22	保聖寺大殿	北宋1073	江蘇省角直鎮	入母屋	Ⅳ	D	各立面同様
23	開化寺大殿	北宋1073	山西省高平市	入母屋	浮彫	B	四面同様、中心性
24	青蓮寺大殿	北宋1089	山西省晋城市	入母屋	浮彫	A	各立面同様
25	二仙観正殿	北宋1097	山西省晋城市	入母屋	浮彫	B	各立面同様、中心性
26	龍門寺大殿	北宋1098	山西省平順縣	入母屋	浮彫	B	各立面同様、中心性
27	晋祠聖母殿　裳階付	北宋1102再建	山西省太原市	入母屋	浮彫・Ⅲ	B	正面性、中心性
28	開元寺毘盧殿	遼1109	河北省易縣	入母屋	Ⅳ	D	各立面同様
29	開元寺観音殿	遼1109	河北省易縣	入母屋	Ⅳ	B	各立面同様、中心性
30	開元寺薬師殿	遼1109	河北省易縣	寄棟	Ⅳ	D	各立面同様
31	閣院寺文殊殿	遼1114頃	河北省淶源縣	入母屋	Ⅱ	A	各立面同様
32	善化寺大殿	遼12世紀初頭	山西省大同市	寄棟	Ⅲ	B	正方位性、中心性
33	善化寺普賢閣	遼建金修	山西省大同市	入母屋	Ⅲ・Ⅳ	B	正方位性、中心性
34	回龍寺大殿	金代初期	山西省平順縣	切妻	なし	C´	正面性
35	浄土寺大殿	金1124	山西省応縣	入母屋	Ⅳ	D	各立面同様
36	少林寺初祖庵大殿	北宋1125	河南省登封縣	入母屋	Ⅳ	D	各立面同様
37	金洞寺転角殿	北宋末期	山西省忻州市	入母屋	なし	C´	正面性
38	龍岩寺中殿	金1129	山西省陵川縣	入母屋	浮彫・Ⅳ	B	正方位性
39	仏光寺文殊殿	金1137	山西省五台縣	切妻	Ⅲ	B	正面性、出入口を強調
40	上華厳寺大殿	金1140再建	山西省大同市	寄棟	Ⅲ	B	正方位性、中心性
41	善化寺三聖殿	金1143頃	山西省大同市	寄棟	Ⅲ	B	正方位性
42	善化寺山門	金1143頃	山西省大同市	寄棟	Ⅳ	D	各立面同様
43	崇福寺弥陀殿	金1143	山西省朔州市	入母屋	Ⅲ	C	正面性、出入口を強調
44	崇福寺観音殿	金1143頃	山西省朔州市	入母屋	Ⅲ・Ⅳ	B	正方位性
45	二仙宮中殿	金1156～1161	山西省高平市	入母屋	浮彫・Ⅲ	B	正面性、中心性
46	文廟大成殿	金1163	山西省平遥市	入母屋	浮彫・登梁	B	各立面同様、中心性
47	晋祠献殿	金1168	山西省太原市	入母屋	Ⅲ	A	各立面同様
48	奉先寺三清殿	金1184	河南省済源市	入母屋	Ⅳ	D	各立面同様
49	龍門寺天王殿	金年代不詳	山西省平順縣	切妻	浮彫・Ⅲ	B	正面性、中心性
50	洪福寺大殿	金年代不詳	山西省定襄縣	切妻	Ⅲ	C	正面性

*開善寺大殿は額を掛けるために、正面の中央間に出跳しない中備を用いている。

3　組物多様化の要素

組物の多様化を成立させたのは組物における外観の差異である。組物の外観差異を生み出す要因を追究すると、まず注目するべきなのは組物における構造発展であろう。前章の考察によって、柱上に出跳する組物が用いられるようになった後でも、中備は長い間、出跳しない平面的な装置であったことが分かる。そして、出跳する中備組物の登場から詰組の定着まで、類型ⅠとⅡの中備組物は柱上組物より構造的格式の低いものである。そのため、組物廻りの外観は、当初組物における構造面の要因に大きく左右されたと考えて差し支えない。しかし、類型Ⅲ・Ⅳの中備組物は、詰組と同等の発展段階に到達した一方、詰組と異なる外観意匠を表している。そのため、組物の諸要素を探求する際に、組物における構造発展のほかに、組物外観のディテールに影響を与えた意匠的工夫も重視しなければならない。以下、構造的発展と意匠的工夫の両面から、組物の外観に差異を与えた様々な要素を考察する。

洪福寺大殿のような柱上組物の手先数が異なる例もあるが、側廻り組物における構造上の差異は一般的に柱上組物と中備の間に現れる。そのため、類型Ⅲの中備組物における柱上組物との相違点をまとめた［表 3］を参考に、以下の 5 つの組物要素に対して考察を行う。

3–1　大斗下の支持材（図 7－2）

遺構からみた大斗下の支持材はすべて中備組物に用いられ、主に［束のみ］・［束＋蟇股］・［蟇股のみ］の 3 種類が見られる。第 6 章の台輪に関する考察によって、大斗下の支持材における形式の変遷は中備組物の構造発展に関連していることが分かる。

まず、大斗下の束に対して考察する。遺構から見ると、束は五代の鎮国寺万仏殿においてすでに用いられているが、枓眼壁の中に収められているため、外側からその姿が見えない。それと同様に、遼代の独楽寺観音閣・山門と開善寺大殿では、通肘木の幅より薄く、壁の中に隠される束を用いている。一方、広済寺三大士殿と下華厳寺薄伽教蔵殿では、通肘木の幅よりも厚く、外側から見える束が確認される。また、応県釈迦塔と閣院寺文殊殿の［束＋蟇股］は、いずれも厚い材で、外側から見えるようにされている。

ここでまず注目したいのは、蟇股の登場という点である。敦煌石窟の唐代壁画を観察すると、通肘木の上にのせる中備装置において、その下に蟇股を用いるものが多く見られる。一部の蟇股は人字形割束と極めて類似する形をしている。蟇股と人字形割束の関連性については、張十慶氏の先行研究が挙げられる。その研究によれば、人字形割束は最初から装飾性重視の部材として登場し、後に元々は架構の節点に用いられる「駝峰」の形を吸収し、最終的に蟇股の形に到達した[13]。

13　張十慶：「古代建築象形構件的形制及其演変 — 従駝峰与蟇股的比較看中日古代建築的源流和発展関

鎮国寺万仏殿（五代963年）の外側から見えない束
（唐聡提供）

薄伽教蔵殿（遼1038年）の外側から見える束
（筆者撮影）

閣院寺文殊殿（遼1038年）の［束＋蟇股］
（筆者撮影）

釈迦塔2重平座（遼1056年）の蟇股
（筆者撮影）

莫高窟148窟東壁（唐代中期）の蟇股模様
（『敦煌石窟全集建築画巻』）

莫高窟361窟南壁（唐代後期）の巻斗をのせない蟇股
（『敦煌石窟全集建築画巻』）

図 7-2 大斗下の支持材

係」『古建園林技術』，1994 年 03 期，p. 12-15。

また、蟇股の様相についても検討する余地がある。張十慶氏の検討は、あくまでも蟇股を一つの木製部材であることを前提に行われているため、蟇股における一部の様相しか解明していない。注意すべき点は、敦煌壁画の中で、木製部材と異なる彩色を使っている蟇股、又は上に斗をのせない蟇股が多数確認される。推論にすぎないが、中国北方建築の場合、組物の間に栱眼壁を詰め込むことは一般的であるため、敦煌壁画の蟇股は木製の部材だけではなく、彩色で表現された可能性が考えられる。そのため、遺構に見られる栱眼壁の中に隠された束は、単なる構造上の補強であり、その表面の壁に蟇股などの彩色模様が施された可能性が高い。

一方、13 世紀前半に建立された日本の法界寺阿弥陀堂では、入側通の頭貫の上に束を用い、束の両側に「笈形」とも呼ばれる[14]彩色模様が施されている。同じものは興福寺北円堂の内陣にも確認される。ここで改めて下華厳寺薄伽教蔵殿のような見える束を検討すると、その両側の壁に「笈形」のような彩色が施された可能性がなくはない。また、現存する閣院寺文殊殿の［束＋蟇股］とその周りの壁に見られる一体化の彩色を参考に、組物の間の彩色模様と木製部材の蟇股は同じ装飾要素であると考えられる。

後に、中備組物は構造発展を行い、柱上組物と同じ鋪作数に達した。類型Ⅲの中備組物がもつ大斗下の蟇股は、上述の類型ⅠとⅡの中備組物から継承してきたものと考えて良い。それらの蟇股は装飾効果が求められているため、中備組物の大斗の下に用い続けられたと考えられる。

3−2　木鼻（図 7－3）

木鼻は本来、組物内側の材が外側に伸びて形成されたものである。柱上組物の木鼻は本来梁鼻に該当し、内部構造を反映している。類型Ⅱの中備組物の場合、柱上組物より鋪作数が少ないため、木鼻の有無で柱上組物との構造的差異を表している。一方、類型Ⅲの中備組物は柱上組物と同じ鋪作数をもつが、現存する類型Ⅲの中備組物を用いる遺構の中では、柱上組物と中備組物における木鼻の相違が多く見られる。

まず、尾垂木を用いる場合、木鼻は外側から付けられたものになる。例えば、仏光寺文殊殿の柱上組物は尾垂木の上に尾垂木形の木鼻を用い、その上にさらに雲形の梁鼻をのせている。また善化寺三聖殿では、尾垂木をもつ中備組物は雲形の木鼻を用い、柱上組物は梁鼻を出して菱形にしている。

一方、尾垂木を持たずに木鼻に差異をつける事例も挙げられる。例えば上華厳寺大殿の場合、ほぼ同じ外観の二手先組物を側廻りに配し、柱上にのせる梁鼻は三角形だが、中備組物は雲形の木鼻を用いている。

上述の遺構からみると、側廻り組物における木鼻の差異は、最初は組物の構造的差異に関連していたが、後世には構造機能を果たす上で、意匠材としても扱われていたと考えられる。

14　近藤豊：『古建築の細部意匠』，東京：大河出版，pp. 65-66，1972（初版 1967）。

下華厳寺薄伽教蔵殿（遼1038年）
（筆者作成）

仏光寺文殊殿（金1137年）
（筆者撮影）

善化寺三聖殿（金1143年）
（『中国建築史』第三巻）

上華厳寺大殿（金再建）
（筆者撮影）

図 7-3 木鼻

3–3 翼形栱（図 7－4）

翼形栱の使用による組物外観の差異は幾つかの遺構に見られる。肖旻氏は論文「翼形拱探析」[15] の中で、翼形栱における横栱（秤肘木）及び斗と組み合せる横材の構造上の通用性を指摘し、さらに雲形木鼻や蟇股との関連性を主張し、中国建築に用いられる装飾性重視の部材における変形・転移について見解を述べている。肖旻氏の先行研究によって、翼形栱における装飾性を重視する性質は明らかである。以下で筆者は、軒廻りに用いられる翼形栱に注目し、翼形栱の使用によって組物の外観に差異を付ける手法について考察する。

積み重ねた通肘木に肘木の浮彫を施し、それに合わせて通肘木の間に斗を配して組物の手先を表現する手法は、唐代中期の壁画又は仏光寺大殿（唐 857 年）以降の遺構に多く見られる。通肘木に彫刻される翼形栱の模様は、南禅寺大殿（唐 782 年）に確認され、大殿の正面と背面の中央間にのみ用いられている。それを受け継ぎ、山西省東南部に現存する宋金遺構の中では、中央間と脇間に浮彫の翼形栱と菱形栱を使い分けている事例が多く見られる。奉国寺大殿（遼 1020 年）に見られる中備組物の大斗にのせる壁付き翼形栱は、通肘木に彫刻されたものの発展形として扱うのは妥当であろう。また、独楽寺観音閣（遼 984 年）や晋祠聖母殿（北宋 1102 再建）では、翼形栱と秤肘木の浮彫を組み合せ、柱間によって異なる模様を表す形式も確認される。浮彫の翼形栱における装飾的意義を表している。

15　肖旻：「翼形拱探析」『古建園林技術』，1997 年 01 期。

南禅寺大殿（唐782年）通肘木に施す
（筆者撮影）

奉国寺大殿（遼1020年）角材に施す
（筆者撮影）

独楽寺観音閣（遼984年）通肘木に施す
（出典：『薊県独楽寺』）

晋祠聖母殿裳階（北宋1102年修理）通肘木に施す
（筆者撮影）

①浮彫の翼形栱

仏光寺大殿（唐857年）一手目にのせる
（筆者撮影）

大雲院弥陀殿（五代940年）二手目にのせる
（筆者撮影）

仏宮寺釈迦塔（遼1056年）一手目にのせる
（筆者撮影）

晋祠聖母殿身舎（北宋1102年修理）一手目にのせる
（筆者撮影）

②手先の上にのせる翼形栱

図 7-4　翼形栱

一方、独立の部材として、手先の上にのせる翼形栱は仏光寺大殿（唐 857 年）以降も多くの遺構において確認される。手先の上にのせる翼形栱は肖旻氏が指摘している通り、組物における「偸心造」から「計心造」への中間形態を表している。一手目の手先の上に秤肘木をのせる「計心造」は組物の装飾性を強化する手法として一般的に考えられるため、翼形栱の使用は「計心造」と同様に構造的要求ではなく、意匠的要求であると考えられる。

3–4　斜栱（図 7－5）

斜栱は遼・北宋・金代の建築に多く見られ、組物多様化様式において重要な要素の一つである。斜栱は元来、斜めに跳出する肘木の名称だが、このような肘木を用いる組物も斜栱と呼ばれている。斜栱の出現時期は不明だが、蕭黙氏は著書『敦煌建築の研究』[16] において、敦煌 146 窟の五代壁画に描かれている斜栱と考えられる組物を 2 点挙げている。現存遺構から見ると、斜栱は中備組物に登場し始めたと考えられ、通肘木から跳出する中備組物の中にすでに用いられていた。

遺構に確認される斜栱は 45°と 60°の二種類に大きく分けられ、斜め肘木の本数によって「単瓣」・「双瓣」、さらに「三瓣」までのものが存在する。斜栱は一般的に中備組物として用いられ、その構造的利点は先行研究において言及されているが [17]、定説になっておらず、それとは対照的に斜栱における装飾性は普遍的に認められている。

現存建物の特定部位に斜栱を用いる手法、または一棟の建物の中に何種類の斜栱を用いる手法は、ほとんどの遼・金代の遺構に見られる。遼代の善化寺大殿に、外部にのみ斜栱をもつ中備組物が見られる。これは明らかに外部装飾を図るための手法である。また、金代建築の斜栱は遼代・北宋の建築より更に装飾化され、善化寺三聖殿のような三瓣斜栱は構造に大きな負担をかけていたと先行研究にも指摘されている [18]。つまり、斜栱は最初に構造的利点があったが、早い段階でそれを失い、装飾材として遼・北宋・金代建築に用いられ、発達を遂げたと言える。

3–5　尾垂木（図 7－6）

第 2 章において尾垂木の変遷を検討した通り、遼代以降に尾垂木の構造的役割が退化していくと共に、外部では挿昂や仮昂などの装飾尾垂木が登場し始めた。

尾垂木形式をもって組物の外観に差異を付ける実例として、晋祠聖母殿と献殿は柱上と柱間に交互に真昂と平出仮昂を配している。また、二仙宮中殿の場合は、出跳する中備組物は正面の中央間にのみ用いられているが、2 本仮昂をもつ柱上組物とは対照的に尾垂木をもっていない。また、特筆すべき崇福寺弥陀殿では、中備組物は六鋪作だが、柱上組物は 2 本の尾

16　蕭黙：『敦煌建築研究』，北京：機械工業出版社，p. 240，2002。
17　前掲注 2 陳薇；注 3 沈聿之。
18　前掲注 2 陳薇。

莫高窟146窟（五代）
（『敦煌建築研究』）

仏宮寺釈迦塔2重（遼1056年）
（『応県木塔』筆者加筆）

善化寺大殿（金12世紀）
（『中国建築史』第三巻）

善化寺三聖殿（金1143年）
（『中国建築史』第三巻）

図 7-5 斜栱

晋祠聖母殿（北宋1102年再建）
（『中国古代建築史』第三巻）

二仙宮中殿（金12世紀中期）
（筆者作成）

崇福寺弥陀殿（金1143年）
（『朔州崇福寺』）

図 7-6 尾垂木

垂木を用いることによって七鋪作となっている。この場合、尾垂木の使用が鋪作の数を増やし、最上の手先に秤肘木と木鼻を加えることを可能にした。その秤肘木は丸桁を直接受ける梁尻を安定させる役割を果たすほかに、尾垂木形の木鼻と共に立面的装飾効果も発揮し、3 本尾垂木を用いているように見せている。

表 3 類型Ⅲの中備組物における柱上組物との相違点

No.	建　物	年　代	大斗下支持材	木鼻	翼形栱	斜栱	尾垂木
1	大雲院弥陀殿　脇間	五代940		●	●		
2	元妙観三清殿	北宋1015	●				
3	奉国寺大殿	遼1020	●		●		
4	隆興寺摩尼殿	北宋1052				●	
5	仏宮寺釈迦塔　裳階中央間	〃	●	●		●	
6	〃　2階平座	〃	●				
7	〃　3階平座正方位	〃				●	
8	〃　3階屋根	〃	●			●	
9	〃　4階平座	〃				●	
10	〃　4階屋根	〃	●				
11	〃　5階屋根	〃	●		●		
12	晋祠聖母殿　身舎正面	北宋1102		●			●
13	〃　裳階正面	〃		●			●
14	善化寺大殿	遼12世紀初	●			●	
15	善化寺普賢閣　2階屋根 正面･背面中央間	金12世紀再建				●	
16	仏光寺文殊殿	金1137		●		●	
17	上華厳寺大殿	金1140再建	●	●		●	
18	善化寺三聖殿	金1143再建		●		●	
19	崇福寺弥陀殿	金1143頃		●		●	●
20	崇福寺観音殿　側面	〃		●			●
21	二仙宮中殿　正面中央間	金1161				●	●
22	晋祠献殿	金1168		●			●
23	龍門寺天王殿	金年代不詳				●	
24	洪福寺大殿	金年代不詳				●	●

＊前の例と共通する情報を「〃」で省略する。

以上の考察によって、大斗下の支持材と木鼻は最初から柱上組物と中備組物の構造的差異を忠実に反映し、異なる外観を表していることが分かる。後に装飾化される傾向は明らかであるが、依然として柱上組物と中備組物の差異を付ける要素として用いられ続けた。一方、翼形栱と斜栱は最初から構造的需要より装飾的意図に応じて出現したため、柱上組物と中備、又は中備組物の間の外観差異を表す要素として用いられていた。最後の尾垂木においては、構造材から造作材への変化を経たり、柱上組物から中備組物への移転を行ったりによって、各発展段階の中で様々な形式を示しているため、組物の多様化の発生及び発展において重要な要素として注目されるべきである。

4　おわりに

本章では、組物の構成方式に対して分類を行った上で、「組物多様化」の様相を明らかにした。また、組物の多様化を成立させた様々な組物要素を採り上げて考察を行い、側廻り組物におけるバリエーションの発生と発展を解明した。

図 7-7 組物多様化の位置付け

組物要素に対する考察から明らかなように、柱上組物と中備組物の発展過程は異なるため、その構造上の差異は外観に反映されるのが必然であった。宋・遼・金代よりも前はこの原則であった。そして 11 世紀以降に、柱上組物と相等しい構造まで発展した中備組物を用いる建築が主流となった。その後、宋式建築は意図的に側廻り組物の外観を統一させたが、それと対照的に、北方建築は様々な組物要素に差異を持たせて、意図的に側廻り組物のバリエーションを追求していた。

宋式建築の均等化された詰組は後世の官式建築に受け継がれ、中国の広い範囲に普及したため、宋・遼・金代中国の建築技術と意匠を代表する組物様式として重要視されている。一方、これまで等閑視されてきた北方建築における組物の多様化は、古くから宋式の詰組も併存し、北方地方の広い範囲に亘って伝播・発展していたため、中国建築史において不可欠な一部として位置づけるべきと思う。

第8章　組物多様化の論理

1　はじめに

前章では組物多様化の構成、及び組物の多様化現象を成立させた様々な組物要素を考察し、北方建築における側廻り組物のバリエーションは、組物の多様性を追求する意匠に従ったということを解明した。組物の多様化現象が確認される類型A・B・Cの組物構成の中で、類型Aは柱上組物と中備組物がそれぞれ統一する形式で、詰組と最も近似する意匠と考えられる。一方、類型B・Cの場合は、柱上組物と中備組物の内部で差異が現れるため、この類型B・Cのバリエーションは、組物における配置方法と関連することとなる。組物の配置について、漢宝徳氏は詰組を組物意匠の完成形と主張し、一棟の建物の中に多様な組物を用いる北方建築を「北彊民族之自由創作」と評価している一方[1]、それら北方建築において、主に大殿に用いられる多様化組物は詰組よりも格式が高い可能性も指摘している[2]。

実際に遺構から見ると、類型B・Cの組物構成をもつ建築において、大きく2種類の配置ルールの存在が分かる。それは第一に、立面によって組物構成を区分する方法、そして第二に、同一立面の中で組物構成を区別する方法である。このような組物の配置ルールは、建築の位置に従って活用され、時代によって発展・変化もしていく。そのため、一つの建築群の中に、幾つかの配置ルールが同時に用いられることは多く見られる。

本章では、組物多様化様式における組物の配置ルールを考察し、北方建築の中で、詰組系建築と異なる設計原則がかつて存在したことを検証しつつ、北方建築の設計原則における発展・変化の様相を考察し、組物多様化の論理を解明する。

2　各立面を区分する原則

組物形式を立面によって区分する手法は、唐代遺構にすでに見られ、金代建築にまで受け継がれている。その配置ルールは①正面・背面と側面を区分する、②正面をほかの立面と区分するという2種類に分けられる。その中で、①は建築の正方位性を表していると対照に、②は建築の正面性を追求していると考えられる。

2−1　建築の正方位性

中国に現存する最古の木造遺構である南禅寺大殿は方三間の小規模な仏殿で、正面と背面

1　漢宝徳：『斗栱的起源與発展』，台北：境與象出版社，p. 92，1988（初版 1982）。
2　前掲注 1，漢宝徳：p.101。

図 8-1　浮彫中備からみた建築の正方位性

の中央間に浮彫の翼形栱を施して側面と区別している。また、独楽寺観音閣初層では、中備はすべて通肘木に彫刻された肘木形の浮彫だが、正面・背面は側面と異なる模様が施されている。南禅寺大殿の各立面における翼形栱の有無は単に意匠に従って決められているが、独楽寺観音閣の場合、正面・背面と側面の柱間隔は異なるため、浮彫の肘木は柱間隔に応じて模様の組合せを調整したと考えられる（図８－1）。

後に遼・北宋・金代になると、架構形式の発展に従い、軒廻り組物は構造発展を行った。この時期に、龍岩寺中殿のような柱間における組物の使用・不使用、あるいは崇福寺観音殿のような中備組物における尾垂木の有無で、正面・背面を側面と区分する事例が現れる（図８－2）。また、善化寺大殿・善化寺普賢閣・上華厳寺大殿・善化寺三聖殿のような正面と背面のみに斜栱を対称に用いる事例が顕著になっている（図８－3）。その中で、善化寺大殿・上華厳寺大殿・善化寺三聖殿の３例は、いずれも 12 世紀の初頭から半ばまでに、山西省大同に建てられた５間以上の大殿である。以下においてこの３例の遺構における斜栱を用いる位置に注目し、その共通点を探りたい。

まず、［図８－3］から見ると、善化寺大殿と上華厳寺大殿は類似する組物構成を表してい

図 8-2　中備組物からみた建築の正方位性

ることが分かる。善化寺大殿は間口 7 間、奥行 5 間の長方形平面をもつ大殿で、正面第 2・4・6 の柱間に出入口を設けているが、背面に出入口はない。善化寺大殿は正面と背面に、第 4 柱間の中央間に 60°の斜栱を、第 3・5 柱間に外側のみの 45°斜栱を用いている。近年の実測図から善化寺大殿の屋根は化粧垂木をもっているように見える[3]。一方、上華厳寺大殿はより規模の大きい間口 9 間、奥行 5 間の大殿で、解体修理の際に発見された建具の取付痕跡により、再建当初は正面第 1・3・5・7・9 の柱間に出入口を設け、背面中央間の一箇所に板扉があったという[4]。上華厳寺大殿は正面と背面の第 3・7 柱間に 45°の斜栱、そして中央間に 60°の斜栱を配している。

興味深いところは、善化寺大殿の斜栱は出入口のある第 2・6 の柱間ではなく、出入口のな

3　『中国古代建築史』第三巻に掲載されている善化寺大殿の断面図において、屋根構成や鴟尾の位置は営造学社の実測図と異なっているが、それに関する説明は提示されていない。

4　大同市上華厳寺修繕工程資料編輯委員会：『大同華厳寺（上寺）』，北京；文物出版社，p.34，p.167，2008。

善化寺大殿（遼11世紀）

善化寺普賢閣上層（金代再建）

善化寺三聖殿（金1143頃）

上華厳寺大殿（金1140再建）

図 8-3 斜栱からみた建築の正方位性

図 8-4 仏殿における斜栱の意味

い第 3・5 の柱間に用いられているところである。つまり、善化寺大殿の斜栱は出入口の位置と関係ないであろう。時代が下った善化寺三聖殿は間口 5 間、奥行 4 間の仏殿で、正面と背面の中央間に 2 組の中備組物を設け、第 2・4 柱間に豪華な三瓣斜栱を用いている。中央間に 2 組の中備組物を配する手法は宋式建築と同様で、宋の地からの影響を受けていた可能性が考えられる。脇間は三瓣斜栱を用いることで、視覚的インパクトはむしろ中央間よりも強く感じられる（図 8－4）。

上述 3 例の斜栱の用いられた位置を外部から考察すると、屋根の形・棟の長さとの関連性が浮かび上がる。3 例はいずれも寄棟造で、正面と背面の斜栱を用いる区間は棟の長さとほぼ一致している。また、現存する上華厳寺大殿の五仏像は明代に入れ替えられたが、善化寺大殿と三聖殿の仏像は遼・金代建立当初のものと考えられている[5]。第 6 章に検討された釈迦塔の斜栱における空間的意味を参考に、これらの仏殿の斜栱は内部仏壇の配置との関連性も考

5　梁思成・劉敦楨：「大同古建築調査報告」『中国営造学社彙刊』第四巻第三・四期，中国営造学社，1934

釈迦塔3重平座組物
（『応県木塔』筆者加筆）

釈迦塔3重の側通・入側通組物
（『応県木塔』筆者加筆）

図 8-5 釈迦塔の組物が示す正方位性

えられる。釈迦塔において、外部から見られる 10 層の様々な形式を用いる側廻り組物の中で、三重の軒廻り組物と平座組物とともに四正方位と四隅方位を区別している。また、三重の入側通にも、四正方位と四隅方位に異なる形式の中備組物が用いられている（図 8－5）。上述 3 例の仏殿は、三体あるいは五体の仏像を一列に並べて安置しているため、方位性をもつのは必然であり、斜栱を用いて建築の方位性を示す手法は釈迦塔と共通している。そのため、これら斜栱は単たる立面的装飾ではなく、前後で呼応して建築の方位性を表すと同時に、屋根の形にも合わせ、仏殿全体における立体的・空間的標記として用いられている可能性を指摘しておきたい。

2−2　建築の正面性

建築の正面性を表す組物配置とは、正面の組物をほかの立面と区別する手法である。この手法を用いる最古の遺構として、仏光寺大殿（唐 857 年）が挙げられる。仏光寺大殿は柱上より格式の低い中備組物を用い、正面の中備組物にのみ一手目の上に翼形栱をのせている。仏光寺東大殿は伽藍の最後尾に位置する大殿であるため、強い正面性を持たされたと考えられる。

華林寺大殿（五代 964 年）は現存する唯一の宋代以前の南方建築であるほかに、正面すべての柱間に高級な中備組物を配し、ほかの三面は中備を持たないため、正面性を表す現存する唯一の南方建築でもある。また、北宋の晋祠聖母殿は、伽藍の中心軸線の最後尾に位置し、前廊の正面と側面第 1 間にのみ出跳する中備組物を用い、ほかの柱間では通肘木に浮彫を施している。上述 2 例はいずれも中備組物の使用・不使用で正面をほかの立面から区分し、強い正面性を表している。

斜栱が発達した後、仏光寺文殊殿・龍門寺天王殿のような斜栱を用いて正面性を示す事例が出現した。2 例とも切妻造である。仏光寺文殊殿は中心軸線に面して建てられた配殿で、正面すべての柱間に斜栱を配しているが、背面は中央間一箇所にのみ斜栱を用いている。一方、龍門寺天王殿は伽藍の中軸線に鎮座する最初の建物で、正面と背面の中央間に斜栱を共に設

図 8-6 組物配置からみた建築の正面性

けているが、正面は二瓣斜栱を用いて格式を高めている。

さらに北宋の後期から、金洞寺転角殿・回龍寺大殿・洪福寺大殿、又は崇福寺弥陀殿のような、柱上組物にも差異を付けて正面性を示す事例が確認される（図８－６）。

東アジアの木造建築における正面性について、日本建築の古代から中世にかけて空間的性質の変化を語った井上充夫氏による研究は先駆的である。井上充夫氏は、日本の古代建築は対称性・独立性の強い造形を表していると指摘している。そして時代の下るとともに、古代建築の強い対称性は次第にくずれ、建築にとっての「向き」すなわち「正面性」が発生したと主張している[6]。

中国建築の場合、中世以降に架構の非対称化発展は確認されるが、組物構成に見られる建築の正面性は、建築自身の空間的性質よりも伽藍の中に所在する位置の方とより深く関係していると考えられる。

3 同一立面の中で区別する

上述のような多様な組物を用いて各立面を区別する手法以外に、同一立面の中で異なる組物構成を用いて各柱間を区別する手法も、現存する北方建築に多く見られる。この柱間を区別する手法は、四面同様な組物構成をもつ建物にも、各立面が区別される建物にも共に確認される。遺構から見ると、多様な組物を用いて柱間を区別する手法から、①立面の中央と端を区別する、または②出入口を強調するという２種類の意図が捉えられる。

3−1 建築の中心性

前出の南禅寺大殿の正面と背面に注目すると、中央間だけに中備を用いる手法は建築の立面における中心性を表していることが分かる（図８－１）。また、唐代後期の天台庵大殿は四面の中央間に浮彫の肘木を施している。天台庵大殿と類似する、中央間と脇間に異なる浮彫中備を用いる方三間の建物は、北宋と金代遺構の中に多数存在する（図８－７）。また、独楽寺観音閣の初層（図８－１）と上層、そして晋祠聖母殿の裳階（図８－７）では、端の間がほかの柱間より幅が狭く、ほかと異なる中備を施す手法も確認される。特殊な例として平遙の文廟大成殿は、端の間以外の柱間に登梁の鼻を外部に持ち出している。これは軒廻り組物に見られる中心性を果たした構造的要因を示している。

さらに、中央間に組物を用い、脇間に浮彫の中備を施す事例として、前述の二仙宮中殿と龍門寺天王殿が挙げられる。２例とも多様な組物を用いて建物における正面性と中心性を同時に表現している（図８－８）

すべての柱間に出跳する中備組物を用いる事例の中で、大雲院弥陀殿（五代 940 年）は最

6 井上充夫：『日本建築の空間』，東京：鹿島出版会，pp. 106-116，1972（初版 1969）。

図 8-7 浮彫中備からみた建築の中心性

（筆者作成）

図 8-8 中備組物からみた建築の中心性

古の一例として挙げられる。大雲院弥陀殿は四面同様に中央間と脇間の中備組物を区分している。また、前述の善化寺大殿と上華厳寺大殿において、斜栱を用いる位置から建築の正方位性を捉えられるほかに、中央間の 60° と脇間の 45° の斜栱の形式区分によって建築中心性も現している。第 6 章に既に述べたが、60° と 45° の斜栱はそれぞれり六角形と八角形の構造から誕生したと推測できる。釈迦塔三重の入側通の場合に、四正方位に 67.5° の斜栱を、四偏方位に 45° の斜栱を配置する現象から、67.5° の斜栱は 45° のものより高級である可能

性がある。これらの斜栱は多角形構造に登場したが、後に四方平面の仏殿にも用いられた際に、計算の便利性を考慮して整数の 60°と 45°が選出され、その角度による等級差も保留されたと仮設すると、仏殿における中央間の 60°と脇間の 45°斜栱は柱間の等級差を示していると考えられる。特に善化寺大殿の場合に、正面と背面の 4 種類の中備組物に対して、中央から端へ順次に組物の格式を落とした結果としか解釈できないだろう（図 8－3）。

3―2　出入口の強調

特殊な組物を用いて出入口を強調する手法は、金代遺構である仏光寺文殊殿と崇福寺弥陀殿に確認される。仏光寺文殊殿は前述のとおり正面すべての柱間に斜栱を置いて正面性を表すほかに、正面中央三間の出入口の上方に二瓣斜栱を用いて正面の出入口をほかの柱間と区別し、背面でも中央の出入口の上に単瓣斜栱を配して出入口を強調している。一方、崇福寺弥陀殿は、斜栱をもつ柱上組物を用いて正面を荘厳にし、背面は出入口の 3 箇所にのみ斜栱を配している（図 8－6）。

第 4 章でも検討したが、中国の寺院建築は伽藍配置と動線計画に力を入れている。このように特殊な組物を用いて建物の出入口を強調する手法は、組物構成の面で動線誘導の意図を示していると考えられる。

また、金代以降の北方建築において、組物多様化意匠が発展していくと対照的に、宋代以降の南方建築は統一した軒廻り組物を用いることが一般的である。その組物意匠的な差異は、建築の立面を構成する素材にも関係している可能性がある。北方建築の立面では、重々しい土壁と建具の対比がより強烈で、組物形式をもって視覚のバランスを取る意図は考えられる。

4　組物多様化意匠における時代的発展

ここまでは、実物が確認される唐代以降の遺構を中心に、組物の多様化における配置ルールを考察したが、一棟の建物の中で多様な中備装置を用いる事例は唐代以前の石刻や壁画の中でも多く見られる。

まず、平面的な中備装置を用いる事例を見ると、四川省の漢代石闕の中で、高頤石闕は同一立面の中で中央部と隅部に異なる形式の双斗を用いている。四川省宜賓黄傘溪崖墓は正面を三間に分け、中央間に脇間より豪華な中備を用いている。北方の大同で発掘された北魏の宋紹祖墓石椁は三間の前廊をもち、その中央間だけに人字形割束を配している。また、隋代莫高窟第 314 窟に描かれている仏殿は、正面に平三斗の中備を用いているが、側面には人字形割束を設けている。時代が下り、中備の組物化に伴い、多様な組物を用いる事例は唐代の敦煌壁画に確認される。例えば唐代中期の莫高窟第 445 窟と唐代後期の莫高窟第 85 窟南壁に描かれている仏殿は、中央間にのみ出跳する中備組物を用いている。

一方、［表 2］を参照すると、唐代以降の多様化組物の構成において、時代に従った発展

が見られる。唐・五代の遺構において、類型Aの組物構成が主流であったが、各立面を区別する事例として、南禅寺大殿・仏光寺大殿・華林寺大殿が正面性を示す事例として挙げられる。また、大雲院弥陀殿のような中央間と脇間を区別する中心性を表す事例も見られる。

遼・宋以降、組物の構造発展によって、斜栱などの新たな組物形式が用いられるようになった。この時期の南方遺構はすべて詰組系の建物だが、北方では遼と北宋の建築はともに多様な組物を用いている。さらに遼代建築と北宋建築の間には相違が見られる。北宋遺構においては、四面同様な組物構成が主流である。その代表的な例である隆興寺摩尼殿は、直交組物と斜栱を交互に配置できるように、柱上と中備の組物形式を入れ替える工夫までしている。晋祠聖母殿のような特例もあるが、聖母殿は仏光寺大殿と同様に伽藍の中心軸線の最後尾に位置するため、強い正面性を示している。一方、遼代建築では、正方位性を示すものは多いが、正面性をもつ事例は未だ確認されていない。

金代に至ると、正面性を示す組物配置が多く見られるようになった。さらに、同一の立面の中で柱間を区別する手法はほとんどの遺構に用いられ、出入口に斜栱を配置する新しい手法も出現した。また、善化寺三聖殿や崇福寺観音殿の中央間に配置される2組の中備組物、及び浄土寺大殿・善化寺山門の詰組は、金代建築における宋式の詰組系建築から受けた影響を表しているだろう。

また、日本建築の軒廻り組物意匠を考察すると、前述のとおり、和様建築はほとんど類型Aに該当する組物構成を用いるが、中世以降に建築の正面性や中心性を示す組物も確認される。長弓寺本堂（1279年・奈良）は正面の中備はすべて蟇股だが、側面と背面には間斗束を用いている。また霊山寺本堂（1283年・奈良）は正面中央間にのみ蟇股の中備を用いている。日本建築の中に見られる正面性や中心性を示す中備と、中国唐代以前の多様な中備との関連性は不明だが、東アジア木造建築における組物意匠の通用性を示している。

5 おわりに

本章では、組物多様化現象が見られる北方遺構に対して、その組物の配置法を考察することを通して、北方建築の組物意匠は宋式建築の詰組と異なる原則に従っていたということを解明した。その考察結果は以下の3点に要約される。

①北方建築に用いられるバリエーションの多い組物形式は、ただの「自由創作」ではなく、幾つかの原則に従って配置されている。それらの原則は建築の正面性や中心性、内部空間の性質など、様々な要素を表現するための工夫であると認められる。

②組物の多様化意匠は、組物構造が成熟する前にもすでに中国の広い範囲に存在しており、組物構造が成熟した後に、北方と南方に組物意匠の分岐が生じ、多様化意匠は北方建築に受け継がれたと考えられる。

③建築の正面性や中心性を示す意匠は前代の建築から継承したと考えられるが、宋・遼・金の時代の中で、出入口を強調する新手法の出現など、組物意匠における発展が見られる。

宋・遼・金代の中国建築においては、建築生産の規格化を目的とし、宋式建築制度の成立は疑いもなく最も重要な出来事で、後世における建築制度の制定に大きく影響を及ぼした。その上で、本論文のこれまでの考察によって、詰組系の宋式建築と同時代に、北方建築に活用された組物多様化意匠も併存していたことが分かった。本論文が注目している組物意匠における北方建築と宋式建築の相違は、建築がそれぞれ地方の美意識に従って発展してきた結果であると考えられる。宋代の絵画作品から、宋式建築は発達した木造技術に基づき、建築単体の平面及び立体構成を多様化したことが推察される。一方、遼・金代建築が代表する北方建築は伝統的な長方形平面を墨守しながら、発展した木造技術を利用して建築の外観に装飾を施すことに力を入れていた[7]。すなわち、10世紀以降の中国建築における技術発展は建築意匠に様々な可能性を与えた。その結果、宋式建築と北方建築は異なる意匠に従って発展し続けた。

7　郭黛姮:『中国古代建築史』第三巻 宋、遼、金、西夏建築，北京:中国建築工業出版社，pp. 752-754, 2003

第9章　晋祠聖母殿の組物

1　はじめに

晋祠聖母殿は山西省太原市の西南部に位置し、身舎５間×４間、四面裳階付きの入母屋造である。身舎は殿堂式の架構形式を用い、その正面１間は吹放しとなり、裳階と一体化している。遼・宋・金代の裳階付きの殿堂建築は晋祠聖母殿のほか、河北省の正定に位置する同じく北宋建築である隆興寺摩尼殿、そして蘇州に所在する南宋時代に建立された玄妙観三清殿が挙げられる。これらの遺構はいずれも貴重な実物として中国建築史の中に位置づけられている。

表４ 晋祠聖母殿建立関連年表

年　代		事　件	出　典	詳　細
979 ～984	北宋太平興国 四年～九年	建立説①：唐叔虞を奉るために建立	『太原縣志』に収録されている「新修晋祠碑銘並序」（984年・現存せず）	「太平興國九年甲申五月丁丑朔平……觀夫正殿中啟，長廊周布。連甍蓋日，翼檐而翬飛；巨棟横空，蜿蜒而虯龍。欄堂延而□□……況復前臨曲沼，泉源鑒澈與白尋；後擁危峰，山岫屏開於萬仞。」
1023 ～1032	北宋天聖年間	建立説②：唐叔虞を母の邑姜とともに奉ることになる	『山西通志』	「晉源神祠，在太原縣西南十里晉祠内。宋天聖間建女郎祠於水源之西。」
			『太原縣志』	「晉源神祠在晉祠，祀叔虞之母邑姜。宋天聖間建」
1038	北宋景佑四年	震度7.3の地震	『山西通志』・『太原縣志』	
1068 ～1077	北宋熙寧年間	主神を聖母と変更する、聖母の座を設置	『宋会要輯稿』	「神宗熙寧十年封昭濟聖母」
			『山西通志』	「熙寧中守臣請封號顯靈昭濟聖母，廟額曰惠遠。」
			『太原縣志』	「熙寧中以禱應始，加號昭濟聖母。
1087	北宋元祐二年	前面の側柱に龍六匹を加え、後に二匹の龍をさらに加える	聖母の座椅背の南面に発見された墨書	「元祐二年四月十日，獻上聖母太原府人在府金龍社人呂吉等，今月賽晉祠昭濟聖母殿繳柱龍六條，今再賽給聖母座物椅」
			聖母の座椅背の北面に発見された墨書	「在前件項眾志人並足」
1102	北宋建中靖國元年	震度6.5の地震	『山西通志』・『太原縣志』	
1102	北宋崇寧元年	大修理	母屋桁下墨書	「大宋崇寧元年九月十八日奉敕重修」
			『太原縣志』	「崇寧初敕重建。」
1120	北宋宣和二年	背面の中央間に入口が存在	背面中央間の板扉跡が発見された壁に書かれた墨書（1994年の修理）	
1123	北宋宣和五年	聖母と唐叔虞を共に奉る	「晋祠謝雨碑文」（1123年）	致祭於顯靈昭濟聖母 汾東王之祠
1267	蒙古至元四年	背面の中央間に入口が存在	背面中央間の板扉跡のある壁に書かれた墨書（1994年の修理に発見された）	

聖母殿の建立年代をめぐっては諸説があり、後世による修理や改造も多く行われた。その建立及び修理の経緯を把握するために、従来の文献史料と調査成果を整理し、当初の様子を反映できる年表を作成した（表4）。この年表によれば、聖母殿は10世紀末期にはすでに建立され、1038年と1102年に起きた2回の大地震で激しい破損が生じたため、1102年に部材を大量に入れ替える解体修理が行われた。そのため、現存する聖母殿を「1102年に古材を多く利用して修理された建物」と考えるのは妥当である。

聖母殿の組物についての先行研究として、祁英涛氏と彭海氏の論文が挙げられる[1]。これらの先行研究は、聖母殿の組物形式と架構との関係性を述べているほか、組物における用材の大きさに注目し、聖母殿の組物における時代的・地域的特徴を指摘している。聖母殿の組物多様化現象について、その様相が記述されているが、組物意匠面からの解釈はされていない。

同時代・同地域の遺構と比較して見ると、聖母殿の組物は、その構造的発展段階を判明できるほかに、「非詰組系」に属していることが分かる。本章は聖母殿の組物形式と組物配置を同時代・同地域の遺構と比較して考察する。そして、聖母殿の組物意匠を抽出し、その意匠を実現させた技術手法を明らかにする。

2　組物形式の考察

聖母殿には裳階が付いているため、組物形式には身舎・裳階による等級差が現れる。身舎に三手先、裳階に二手先組物を用いて格式を明確に区別するほかに、身舎と裳階の組物の様々な要素における相違も注目を集めている。その詳細は以下の通りである。

身舎の場合、柱上組物に下昂が用いられているが、第2章で考察されたとおり、梁が直接丸桁を受けるように発展したため、下昂は短く、柱の直上までしか伸ばしていない。その下昂の上には下昂形木鼻があり、下昂形木鼻の上に菱形の梁鼻が出ている。中備組物は二手目と三手目の肘木を平出仮昂とし、その上に菱形の木鼻を設けている。

一方、裳階の組物に見られる尾垂木の構成は身舎と真逆である。柱上組物の一手目と二手目の肘木を平出仮昂の形と造り出し、その上の梁鼻を雲形に加工している。中備組物は母屋桁まで伸ばした下昂を二手目とし、その上に下昂形の木鼻をのせている。

上述のように、聖母殿は使用位置によって異なる形式の組物を用いている。それらの組物の相違は、主に尾垂木形式と木鼻形式に現れる。そのため、以下では聖母殿の組物における尾垂木形式と木鼻形式に対して考察を行い、その歴史的様相を解明する。

1　祁英涛：「晋祠聖母殿研究」『文物季刊』，pp. 50-68，1992年第1期；彭海：「晋祠聖母殿観測収穫―聖母殿創建年代析」『文物』，pp. 66-80，1996年第1期。

① 崇明寺中殿 中備組物の平出仮昂
（筆者作成）

② 晋祠聖母殿身舎 中備組物の平出仮昂
（『中国古代建築史』第三巻）

③ 蘇州玄妙観三清殿
柱上組物及び中備組物の平出仮昂
（『中国古代建築史』第三巻）

④ 晋祠聖母殿裳階 柱上組物の平出仮昂
（『中国古代建築史』第三巻）

⑤-1 少林寺初祖庵大殿 柱上組物の挿昂
（『中国古代建築史』第三巻）

⑤-1 善化寺三聖殿 柱上組物の挿昂
（『中国古代建築史』第三巻）

⑤-2 龍岩寺中殿 柱上組物の下向き仮昂
（筆者作成）

⑤-2 玄妙観三清殿 裳階柱上組物の下向き仮昂
（『中国古代建築史』第三巻）

図 9-1 仮昂形式の変遷

2−1　平出仮昂

晋祠聖母殿の場合、平出仮昂は身舎の中備組物と、裳階の柱上組物とに用いられている。平出仮昂に対して、筆者は 2 つの問題点に注目している。第一は、平出仮昂と下向き仮昂の関係性である。第二は、柱上組物あるいは中備組物に用いられる平出仮昂の意義である。

第 2 章でも説明したとおりに、平出仮昂は、肘木の先端を水平の尾垂木状にした擬似尾垂木の形式であり、後世に多く見られる下向き仮昂との区別は、擬似尾垂木の角度のみである。仮昂を用いる遺構の年代を見ると、下向き仮昂は金代以降に出現した形式で、遼代の遺構には確認されていない。また、崇明寺中殿（北宋 991 年・山西省）の事例から見ると、擬似尾垂木を加工する際に、肘木材をそのまま水平に伸ばした平出仮昂のほうが自然であり、材木の節約にも有利であるため、平出仮昂は仮昂における最初の形態であると考えられる。

なお、中国に現存する平出仮昂を用いる建築は、ほかに忻州金洞寺転角殿（北宋・山西省）・

蘇州玄妙観三清殿（南宋・江蘇省）・武都広巌院前殿（南宋・甘粛省）などが挙げられる。南方と北方ともに実例が存在することによって、平出仮昂は地方技法の可能性が低く、宋の広い地域に普及した技術であると考えられる。

宋・金代の遺構から、仮昂の用い方における変遷過程を以下のように整理する（図 9-1）。

①―崇明寺中殿の柱上組物と中備組物の形式に注目すると、柱上組物は真昂を用いる高級なものだが、中備組物は未だ構造発展の中間段階にある。だから中備組物と柱上組物とが呼応するために、平の肘木に斜材の彫刻を施したのだと考えられる。

②―聖母殿の身舎では、梁の発展に従い、柱上組物の下昂は構造機能を失っているが、下昂の形式を保有している。また、中備組物の内側は未だ発展していなかったため、依然として伝統的な平出仮昂を用いて柱上組物の下昂と呼応している。

③―蘇州玄妙観三清殿の身舎の場合、構造的に下昂を使用する必要がなく、柱上組物に仮昂が登場し、伝統的な平出仮昂を用いている。中備組物は柱上組物と全く同様な構造形式を用いながら、外観にも同じく平出仮昂を用いている。このような柱上組物と中備組物の外観を統一する意匠が同じ江南建築である保国寺大殿にも確認される。

④―聖母殿の裳階の場合、柱上組物は玄妙観三清殿と同様に平出仮昂を用いているが、その中備組物に構造発展による変化が見られる。その中備組物は母屋桁を直接受けるようになったため、真昂を用いている。この段階では、第 2 章で述べた下昂の機能における柱上組物から

図 9-2 北方系と南方系の下昂形木鼻

表 5 唐代から金代まで下昂をもつ遺構の下昂・木鼻形式

No.	建　物	年　代	所在地	柱上組物		中備組物	
				下昂	木鼻	下昂	木鼻
1	仏光寺東大殿	唐857	山西省五台縣	真昂	雲形	−	批竹形
2	鎮国寺万仏殿	五代963	山西省平遥市	真昂	批竹形	−	批竹形
3	華林寺大殿 正面	五代964	福建省福州市	真昂	下昂形	真昂	下昂形
4	独楽寺観音閣 2階屋根	遼984	天津市薊縣	真昂	方形	−	−
5	崇明寺中殿	北宋991	山西省高平市	真昂	菱形	平出仮昂	菱形
6	梅庵大殿	北宋996	広東省肇慶市	真昂	肘木	真昂	肘木
7	保国寺大殿	北宋1013	浙江省寧波市	真昂	雲形	真昂	雲形
8	元妙観三清殿	北宋1015	福建省莆田市	真昂	下昂形	真昂	下昂形
9	奉国寺大殿	遼1020	遼寧省義縣	真昂	方形	真昂	方形
10	隆興寺摩尼殿	北宋1052	河北省正定縣	真昂	下昂形	真昂	下昂形
11	仏宮寺釈迦塔 1階屋根	遼1056	山西省応縣	真昂	方形	※真昂	−
12	〃 2階屋根	〃	〃	真昂	方形	−	−
13	保聖寺大殿	北宋1073	江蘇省甫直鎮	真昂	−	真昂	−
14	開化寺大殿	北宋1073	山西省高平市	真昂	下昂形	−	
15	青蓮寺大殿	北宋1089	山西省晋城市	真昂	下昂形	−	
16	二仙観正殿	北宋1097	山西省晋城市	真昂	下昂形	−	
17	龍門寺大殿	北宋1098	山西省平順縣	真昂	下昂形	−	
18	晋祠聖母殿 身舎	北宋11世紀	山西省太原市	真昂	下昂形	平出仮昂	菱形
19	〃 裳階	〃	〃	平出仮昂	雲形	真昂	下昂形
20	金洞寺転角殿 正面	北宋後半	山西省忻州市	平出仮昂	下昂形	−	
21	浄土寺大殿	金1124	山西省応縣	挿昂	菱形	挿昂	菱形
22	少林寺初祖庵	北宋1125	河南省登封市	挿昂	菱形	真昂	菱形
23	龍岩寺中殿 正面・背面	金1129	山西省陵川縣	下向き仮昂	菱形	真昂	菱形
24	仏光寺文殊殿	金1137	山西省五台縣	真昂	下昂形	−	菱形
25	善化寺三聖殿	金1143再建	山西省大同市	挿昂	菱形	真昂	雲形
26	善化寺山門	金1143再建	山西省大同市	下向き仮昂	菱形	挿昂	菱形
27	崇福寺弥陀殿	金1143頃	山西省朔州市	真昂	下昂形	−	−
28	崇福寺観音殿 正面･背面	金1143頃	山西省朔州市	真昂	下昂形	真昂	下昂形
29	二仙宮中殿 正面	金1161以前	山西省高平市	下向き仮昂	菱形	−	菱形
30	文廟大成殿	金1163	山西省平遙市	真昂	下昂形	−	
31	晋祠献殿	金1168	山西省太原市	平出仮昂	菱形	真昂	下昂形
32	玄妙観三清殿 身舎	南宋1179	江蘇省蘇州市	平出仮昂	出ない	平出仮昂	出ない
33	〃 裳階	〃	〃	下向き仮昂	雲形	真昂	雲形
34	奉先寺三清殿	金1184年	河南省済源市	挿昂	菱形	真昂	菱形
35	龍門寺天王殿	金年代不詳	山西省平順縣	挿昂	菱形	−	
36	洪福寺大殿 正面	金年代不詳	山西省定襄縣	真昂	下昂形	−	雲形
37	広巖院前殿	南宋	甘粛省武都縣	平出仮昂	−	平出仮昂	−

＊上と同一建物である場合、同じ情報を「〃」で省略する。

＊「−」は部材自体が存在しないと示す。

＊菱形木鼻は中国建築用語で「蚱蜢頭形」という。

金洞寺転角殿　正面柱上組物
（「忻州金洞寺転角殿勘察簡報」『文物世界』）

図 9-3 下昂形木鼻と平出仮昂の混用

中備組物への転移に当たり、柱上組物と中備組物の尾垂木形式における差異が改めて現れた。

⑤―上述の④と同じ構造発展の段階に属する少林寺初祖庵大殿（北宋・河南省）と善化寺三聖殿（金・山西省）は、聖母殿の対処法と異なり、柱上組物に挿昂を用いて真昂もちの中備組物に合わせるように工夫した。それと類似した龍岩寺中殿（金・山西省）と玄妙観三清殿の裳階は柱上組物に下向きの仮昂を用いて、中備組物の真昂に合わせている。

ここまでの考察では、限られた遺構の情報に基づき、その年代・地域にとらわれず、仮昂形式の変遷における一種の仮説を述べた。仮昂形式は実際に発生・変化・伝播をした際に、各時代・各地域に混在していたということは勿論考えられる。

2―2　下昂形木鼻

聖母殿の場合、真昂をもつ身舎の柱上組物と裳階の中備組物には、共に下昂形木鼻を用いている。下昂形木鼻は敦煌石窟第 172 窟南壁壁画（8 世紀初頭）の中備組物にすでに見られる。後世のものと大きく異なっている点は、下昂と同時に用いていないことである。唐代中期以降、五代までの壁画に、下昂とセットで用いられる下昂形木鼻が出現し、宋・金代においてもまだ主流であり続けたと見られる。このような下昂の上に加えられる下昂形の木鼻は、手先を増やさずにより高級な組物を見せる効果を果たしていると考えられる。

中国に現存する建物から見ると、下昂形木鼻の形式は大きく北方と南方の 2 つの系統に分けられる。北方系の下昂形木鼻は山西省東南部に現存する北宋と金代遺構に多く見られる。その特徴は、内側は下昂と共に梁の下面で止まっていることである。一方、南方系の下昂形木鼻は五代の華林寺大殿（964 年）をはじめ、梅庵大殿（北宋 996 年）・元妙観三清殿（北宋 1015 年）においても確認される。南方系下昂形木鼻の内側は下昂と平行して母屋桁まで伸びており、第 2 章で検討した「挑斡」に相当すると考えられる。手先を増やさない以外、丸桁と母屋桁の荷重を直接受けている点は下昂と全く同様であるため、南方系下昂形木鼻は原始的尾垂木を受け継いだ形式であると考えられる（図 9-2）。

晋祠聖母殿の組物配置

晋祠聖母殿の組物形式

晋祠聖母殿の組物立面構成

図 9-4 聖母殿の組物形式及び組物配置図

摩尼殿身舎の組物見上げ図

摩尼殿の組物配置図

摩尼殿側面
（『正定隆興寺』、筆者加筆）

図 9-5 隆興寺摩尼殿の組物配置

以下では遺構に見られる下昂と木鼻の形式をまとめた［表 5］を参照に、下昂形木鼻の用い方を整理する。まず下昂形木鼻を用いている遺構の中で、柱上組物と中備組物が異種の尾垂木形式をもつのは晋祠の聖母殿と献殿のみである。山西省の東南部に現存する宋・金代の小規模な遺構は、聖母殿のような北方系下昂形木鼻をもつが、出跳しない中備装置を用いるのが一般的である。また、晋祠より北方にある金洞寺転角殿（忻州）は興味深い一例として挙げられる。金洞寺転角殿は北宋末期に建立されたと推測され[2]、その正面の柱上組物は平出仮昂を用いながら、挑斡を外側に持ち出し、下昂形木鼻としている（図 9-3）。四川省に現存する磚造の無量宝塔（北宋 960）にも同じような磚造の組物が確認される。この 2 例を聖母殿とを合わせて考えると、宋代建築には下昂形木鼻と平出仮昂の共存していたことが確認される。ただし聖

2　李艶蓉・張福貴「忻州金洞寺転角殿勘察簡報」『文物世界』，2004 年 06 期，pp. 38-41。

母殿の場合、平出仮昂の水平材系統と、下昂及び下昂形木鼻の斜材系統とを分別しているが、金洞寺転角殿のように平出仮昂と下昂形木鼻とを一組の組物の中で混用する事例も存在する。この現象は、宋代建築における仮昂の主流形式は平出仮昂であると証明するほかに、木鼻形式の高い自由度を示している。

3　組物配置の考察（図 9-4）

3-1　身舎と裳階の等級差

上述のとおり、聖母殿は身舎に三手先の組物、裳階に二手先組物を用いることで、身舎と裳階に等級差をつけている。また尾垂木と木鼻の形式から見れば、身舎と裳階は水平材系統の組物と斜材系統の組物を上下交互にずれた位置に配している。

聖母殿と同じような組物配置をもつ同時代の遺構は存在しないが、組物の形式にバリエーションを付けることで立面表現を行う手法は、第 6・7 章で検討したように、遅くとも漢代以後の建築に確認されている。

また、相隣地域の河北省に位置する隆興寺摩尼殿は、同じく北宋時代の裳階付きの殿堂建築として、聖母殿と比較される好例である。隆興寺摩尼殿は身舎と裳階とも 2 本下昂をもつ二手先組物を用いている。そして中備組物にさらに 45°の斜材を加えて、柱上組物と区別している。漢宝徳氏には、それは柱上組物を視覚の中心とした従来の秩序に反し、中備組物を軒廻りの視覚の中心としたと指摘している[3]。

さらに、隆興寺摩尼殿の組物においては、いままでの先行研究では解釈されなかった特殊な手法が用いられている。それは、身舎側面の中央間に配置される柱上組物と中備組物の形式を交換する手法である。隆興寺摩尼殿では、裳階の四面の中央にさらに孫庇を付けて出入口を設けている。それら出入口の内部空間を確保するために、側面の柱間に対して調整を行った結果、側面は［2-1-2-1-2］の比例関係をもつ 5 つの柱間に分けられている。しかし、このような不均等の柱配置にとらわれず、身舎側面の組物はほかの立面と同様に、直交斗栱と斜栱を等間隔で交互に配置している（図 9-5）。このような手法は、組物の外観意匠を最優先にして、架構をそれに合わせて調整する工夫であると考えられる。

上述のとおり、聖母殿と隆興寺摩尼殿は、柱上組物と中備組物の主従関係に変化が生じ始めた時代に当たり、バリエーションのある組物を意図的に用いている。さらに、時には組物意匠に合わせて、架構の面でも工夫を施して建築を表現していた。

3-2　中備のバリエーション

聖母殿は、出跳する 2 種類の中備組物を前面部分に用いて、側面と背面には通肘木に様々

3　漢宝徳：『斗栱的起源与発展』，台北：境与象出版社，p.100，1988（初版 1982）。

翼形栱と菱形栱の配置

翼形栱と菱形栱の高さ位置

聖母殿の前廊（筆者撮影）

図 9-6　聖母殿の翼形栱と菱形栱

な肘木模様の浮彫を施し、通肘木の間に置かれた巻斗と合わせて組物を表現している。その中備装置の配置から建築における正面性と中心性が読み取れる。

①正面性

身舎と裳階はともに正面すべての柱間、そして側面の前方1間の柱間に出跳する中備組物を用いて、それ以外の柱間には浮彫の中備を施している。聖母殿の後方は山と隣接し、唐代の仏光寺大殿と同様に伽藍の最奥に位置している。仏光寺大殿では正面の中備組物のみに翼形栱を用いて正面性を強調しているが、聖母殿は正面部分のみに中備組物を用いてさらに正面性を徹底している。このように、聖母殿における中備組物を用いる原則は、構造的需要と全く関係なく、その装飾的効果を求めるためだけである。

また、裳階の組物以外の浮彫中備の場合は、［図9-4］に示すように、合計4種類の模様が用いられている[4]。そのため、中備組物と浮彫の中備を合わせて見ると、聖母殿における正面・側面・背面の組物配置はそれぞれ異なっている。このような手法は現存する遼代建築には確認されず、金代以降の建築と共通している。

②中心性

聖母殿の裳階では、正面すべての柱間に中備組物を配置しているが、端の間の中備組物の場合、壁付き一手目に秤肘木ではなく、翼形栱を用いて中央部分と区別している。また、背面すべての柱間では、通肘木に肘木模様の浮彫を施し、その肘木の長さと合わせて巻斗を設置し、組物を表現している。それらの浮彫の中では、端の間だけは平三斗の上に菱形栱を用いて差異を示している。

3−3　翼形栱と菱形栱における使用位置

聖母殿には、上述の浮彫の翼形栱と菱形栱以外に、手先の上にのせられる翼形栱と菱形栱も多く用いられている。これらの装飾的要素から聖母殿の組物意匠を覗くことが出来る。

まず、浮彫の翼形栱は側面の柱間に用いられる［重栱＋翼形栱］・［単栱＋通肘木＋翼形栱］2種類の浮彫組物に見られ、いずれも最上層の通肘木に施されている。また、背面の端の間は［単栱＋通肘木＋菱形栱］の組合せを用いて、側面端の間の［単栱＋通肘木＋翼形栱］と呼応しながら、使い分けている。

また、手先の上にのせられる翼形栱と菱形栱においては、その使用位置は意図的に区別されている。翼形栱は身舎のみに用いられている。身舎の外側では、柱上組物と中備組物とは、ともに一手目の上に翼形栱を用いている。それとは対照的に、身舎の内側では、柱上組物はすべて三手目の上に翼形栱を設けているが、前廊正面と側面に用いられている中備組物は内側の二手目の上に菱形栱をのせている。さらに、裳階の組物を考察すると、前廊の中備組物

4　これまで発表された晋祠聖母殿に関する先行研究は、浮彫中備を十分に重視しておらず、情報の誤りが多い。筆者は、複数回の現場での観察に基づき、浮彫中備に関する情報をこのように訂正する。

は内側の二手目の上に菱形栱を用いている。

上述の翼形栱と菱形栱の配置を［図 9-6］のように表記して考察を行う。身舎の部分に注目すると、一手目に翼形栱、二手目に菱形栱、三手目にまた翼形栱をのせていることにより、翼形栱と菱形栱を交互に用いるルールが見い出せる。また、身舎前廊の内側では、柱上に翼形栱を、柱間に菱形栱を配置している。

ここで、翼形栱と菱形栱の格式について検討を行う。聖母殿には、より格式の高い部位に翼形栱を用いる傾向が見られる。山西省東南部に現存する聖母殿と同時代の宋・金代遺構の中で、開化寺大殿（北宋 1073 年）・龍門寺大殿（北宋 1098 年）・二仙宮中殿（金 12 世紀）など、方三間の仏殿は浮彫の翼形栱と菱形栱を同時に用いる場合、中央間に翼形栱、脇間に菱形栱を施すことが一般的である。よって、同じ装飾要素としても、翼形栱は菱形栱よりも高い格式を示す可能性があると考えられる。

上述のとおり聖母殿は、身舎組物の外側と内側に翼形栱を用いて組物の装飾性を高めるほかに、前廊の内部に翼形栱及び菱形栱を用いながら、その配置に工夫を施し、前廊内部の空間を荘厳にしている。

4　おわりに

本章で考察したとおり、聖母殿は組物の手先数・尾垂木形式・木鼻形式に差異を付けることによって身舎と裳階の等級差を表現している。また、中備組物の有無で建築における正面性を示すほかに、中備組物と浮彫中備の形式のバリエーションで建築の中心性を表している。

聖母殿に見られるこれらの組物形式及び組物配置の特徴は、『営造法式』が代表する北宋の官式建築と大きく異なるが、同地域の北宋・金代遺構との関連性が明らかに見られる。

また、聖母殿の主神である聖母は北宋時代に度々、冊封されることからも、その建物の格式における高級性が推察できる。このような高級建築は『営造法式』に記載されている官式建築と全く異なる組物意匠をもつ。このことから、『営造法式』のほかに、別系統の建築が北宋地域にかつて存在していたと考えられるのである。

第10章　崇福寺弥陀殿･観音殿の組物

1　はじめに

崇福寺は山西省北部の朔州に位置している。先行研究によって、崇福寺は唐代に建立された際に、「蔵経閣」と記載されている大規模な楼閣を中心建築とした寺院である可能性が高いと推測されている[1]。金代に増築を行った際に、元来の大殿の後ろに弥陀殿を建設し、崇福寺を浄土宗の寺院と確立させた。現存する伽藍の中では、金・明・清の歴代に増築・改築された建物が多数現存しており、その中で弥陀殿を除き、観音殿も金代遺構と判別されている[2]。弥陀殿の木製部材に残された墨書や瓦の刻字などから、金代皇統三年（1143 年）に造営工事が始まり、1153 年までに彩色工事が行われ、十年に渡り建設されたことが確認される[3]。現存する弥陀殿は間口 7 間、奥行 4 間の入母屋造で、高さ 2.53 mの基壇の上に建てられ、前方に広い月台が設けられている。1988 年に、崇福寺は全国重点文物保護単位と指定され、同年から 1991 年まで弥陀殿に対する解体修理が行われた。

一方、弥陀殿の後方にある観音殿は、弥陀殿と一体化した基壇の上に配置されているため、同時代のものと考えられているが、文献史料の中に関連する記載は確認されていない。観音殿は弥陀殿より規模の小さい仏殿で、間口 5 間、奥行 3 間の入母屋造である。

本章では、崇福寺の弥陀殿と観音殿の建築群全体を研究対象として採り上げ、それぞれの組物形式及び組物配置の特徴に注目し、建築群内部に用いられた組物意匠における関連性を探求する。さらに金代建築を代表する遺構として、弥陀殿と観音殿を遼・北宋建築と比較して、宋・遼・金の時代に見られた組物意匠の変遷を解明する。

2　組物形式

2―1　軒廻り組物と梁構造の分離

第 4 章で述べた通り、10 世紀以降の中国北方建築における組物の発展において、軒廻り組物と梁構造の分離は最も重要な出来事と言っても良い。弥陀殿と観音殿とは共に、軒廻り組物と梁構造とが分離した後の発展段階に属すると考えられる。

弥陀殿がもつ 2 つの特徴から梁構造の成熟が見られる。第一の特徴は、移柱法・減柱法の

1　柴沢俊：『朔州崇福寺』，北京：文物出版社，p. 4，1996。
2　前掲注 1，柴沢俊：p. 6。
3　前掲注 1，柴沢俊：pp. 5-6。

使用である。傅熹年氏は弥陀殿と仏光寺文殊殿を採り上げ、それらの遺構に見られる移柱法及び減柱法の本質に注目している。傅熹年によれば、弥陀殿と仏光寺文殊殿では、「縦架」である入側通の桁行方向の構造が発達したため、その下に配置されるはずの柱は移動又は撤去されるようになった[4]。移柱法・減柱法の使用により、梁構造は組物層に制約されず、自立しているという性質が捉えられる（図 10－1）。

弥陀殿に見られる第二の特徴は、柱上組物に用いられている斜栱である。第 7 章で述べた組物の構成分類から見ると、弥陀殿は類型 C に属する。すなわち柱上組物と中備組物はそれぞれにバリエーションを表している。弥陀殿には 2 種類の柱上組物が見られ、背面と側面の柱上組物は、上下 2 本の繋ぎ梁を通して、側柱と連結されている。一方、正面の柱上組物は外部及び内部共に 45° の斜栱を用いながら、組物の上に 1 本の繋ぎ梁をのせている。正面の入側柱は移柱法又は減柱法によって調整されているため、正面の繋ぎ梁は必ず入側柱と繋がるとは限らず、前述した「縦架」の上に架けるものもある。そのため、正面の柱上組物は梁との関係が弱く、形式の自由度が高い（図 10－2）。

なお、現存する柱上組物に斜栱を用いる事例には、弥陀殿以外に、前章で解説した隆興寺摩尼殿が挙げられる（図 9－5 を参照）。隆興寺摩尼殿の身舎に見られる柱上組物と中備組物の形式の交換も、間違いなく梁構造と軒廻組物の分離を前提とした手法であろう。

一方、第 3 章で検討した通り、観音殿は 11 世紀以降の主流であった非対称的な架構形式を用いている。扠首構造を架構の片方に取り入れて殿内前面の空間を広げるという、ほかの事例に見られない特殊的な手法が用いられている。観音殿のこのような架構形式からも梁構造の自立性が見られる（図 10－3）。

2−2 梁鼻と木鼻の併存

本論文でここまで討論された木鼻は、ほとんど組物の最上の手先にのせられているものであり、最上層の鋪作に当たるものではない。『営造法式』による組物の最上層の鋪作は襯方頭[5]である。襯方頭に関しては、「凡襯方頭、施之於梁背耍頭之上、其広厚同材。前至橑檐方、後至昂背或平棊方」[6]と『営造法式』に記載されている。

最上の手先に秤肘木と共に木鼻を用いることは宋代までに一般的となり、その上にのせる丸桁より前へ出ない襯方頭が主流であった。現存する遺構の中で、最古の襯方頭木鼻は仏光寺大殿の背面柱上組物に見られ、雲形木鼻と共に用いられている。遼代にも仏宮寺釈迦塔では、

4 傅熹年：「宋代建築構架的特点与「減柱」問題」『宿白先生八秩華誕記念文集』，北京：文物出版社，pp. 291-306，2002。

5 読み「しんぽうとう」、斗栱の一番上に重ねる材で、組物押えに当る（竹島卓一：「用語解説」『営造法式の研究』三）。

6 『営造法式』巻五大木作制度二の「梁」項目を参照。訳文：凡て襯方頭は、これを梁の上に施す。その広さと厚さとは材と同じにし、前方は橑檐方から、後方は昂の背か、或は平棊方に達せさせる（竹島卓一氏『営造法式の研究』二から引用）。

傅熹年氏による仏光寺文殊殿・崇福寺弥陀殿の架構分析
（「宋代建築構架的特点与「減柱」問題」）

図 10-1 金代建築の減柱法と移柱法

（『朔州崇福寺』）

図 10-2 弥陀殿の柱上組物

断面a　　（『朔州崇福寺』）

図 10-3 観音殿の架構形式

二重の軒廻り柱上組物と中備組物と共に翼形の襯方頭木鼻を用いている。類似する襯方頭木鼻は日本の大仏様建築である東大寺南大門と、朝鮮半島の浮石寺無量寿殿・修徳寺大雄殿など高麗時代の遺構にも確認される。その共通点としては、梁（大仏様の場合は貫）が最上手先上の秤肘木と交差し、その上にさらに巻斗を置いて襯方頭と丸桁を受けている。

金代以降の一部の建物においては、発展した梁が襯方頭の位置まで上がったため、梁が丸桁を直接受けるようになった。その実例として、仏光寺文殊殿・崇福寺弥陀殿と観音殿・平遙文廟大成殿が挙げられる。これらの遺構には、最上層の鋪作としての梁鼻とその下の組物木鼻が併存している。なお朝鮮半島では、観龍寺薬師堂・松広寺国師殿をはじめ、朝鮮時代以降の柱心包建築に、梁鼻と木鼻が併存する形式が多く確認される。さらに、中国の金代遺構と比べると、朝鮮建築は、梁鼻と木鼻を金代建築よりも装飾性の高い模様に加工する傾向があることが明らかに分かる。

ただし、元代以降の中国建築において、梁鼻の発展は上述と異なる方向に進んだと見られる。それは梁鼻の拡張と言っても良い過程であると思う。まず、背の高い梁が梁鼻を持出す実例が、遼代中期の独楽寺山門にすでに確認される。独楽寺山門の梁は先端を二分して、木鼻と襯方頭の両方になっている。なお、北宋の少林寺初祖庵大殿は、手先より高い位置に梁をのせているが、秤肘木に合わせて梁の先端を削り、肘木と同じ高さの梁鼻を持ち出し、さらにその上に襯方頭を用いている。以上の二例と異なり、金代の善化寺三聖殿は襯方頭を用いずに、2鋪作の高さに相当する梁をそのまま組物の外部に持ち出し、先端を肘木とほぼ同じ高さの木鼻に加工している。このような手先の上にのせる大きな梁鼻が後世に発展し続けた結果、清代官式建築の柱頭科（柱上組物）に到達した。

上述のとおり、組物の発展史から見ると、木鼻の上に出現した襯方頭木鼻は元々付加された部材であることが分かる。襯方頭木鼻は日本の大仏様と朝鮮半島の高麗時代の建築にも受け継がれている。後に、崇福寺弥陀殿においては、梁鼻が襯方頭木鼻の代わりに組物における最上層の鋪作とされ、梁鼻と木鼻とが併存する組物形式が現れた。このような梁鼻と木鼻が併存している組物は、朝鮮時代の建築に更なる発展を遂げたため、広い地域に伝播した形式であったと考えられる。一方、手先の上にのせられる大きな梁鼻も金代に発展し始め、後世に普及して中国官式建築の要素として定着した（図10－4）。

2—3 斜栱形式の変化

弥陀殿に用いられている斜栱は、前述の釈迦塔を含め、同時代の遺構に見られる斜栱よりさらに発展したものであると考えられる。具体的には以下の3点に要約される。

①弥陀殿の斜栱は尾垂木と結合される。弥陀殿は正面の柱上組物に斜栱と尾垂木を同時に用いている。それは現存する遺構の中でも唯一の実例であり、前述した梁と軒廻り組物層との分離を前提に考えると、軒廻り組物が多大な自由度を得られた結果であると考えられる。

②組物の外部意匠と共に、内部意匠も重視されている。同時代の仏光寺文殊殿・善化寺三

Ⅰ-①　Ⅰ-②　Ⅰ-③　Ⅰ-④　Ⅰ-⑤

Ⅰ-① 仏光寺大殿背面（『仏光寺東大殿建築勘測研究報告』）
Ⅰ-② 釈迦塔二重軒廻り（『応県木塔』）
Ⅰ-③ 東大寺南大門（『奈良六大寺大観』9）
Ⅰ-④ 浮石寺無量寿殿（『韓国の古建築』5）
Ⅰ-⑤ 修徳寺大雄殿（『韓国の古建築』4）

Ⅱ-①　Ⅱ-②　Ⅱ-③　Ⅱ-④　Ⅱ-⑤

Ⅱ-① 仏光寺文殊殿（『五台山仏光寺』）
Ⅱ-② 崇福寺弥陀殿（『朔州崇福寺』）
Ⅱ-③ 崇福寺観音殿（『朔州崇福寺』）
Ⅱ-④ 観龍寺薬師堂（『韓国の古建築』6）
Ⅱ-⑤ 松広寺国師殿（『韓国の古建築』2）

Ⅲ-①　Ⅲ-②　Ⅲ-③　Ⅲ-④　Ⅲ-⑤

Ⅲ-① 独楽寺山門（『中国建築史』第三巻）
Ⅲ-② 少林寺初祖庵大殿（『斗栱』）
Ⅲ-③ 善化寺三聖殿（『中国建築史』第三巻）
Ⅲ-④ 永楽宮無極門（『中国建築史』第四巻）
Ⅲ-⑤ 清代工程做法柱頭科（『斗栱』）

図 10-4 襯方頭木鼻の発展

聖殿・龍門寺天王殿の斜栱形式を見ると、これらの遺構は二瓣又は三瓣の斜栱を用いて外部を荘厳にしているが、内部ではいずれも単瓣斜栱を用いている。それとは対照的に、弥陀殿は外部及び内部共に二瓣斜栱を用いている。外部と同等の組物を内部に用いることは、内部意匠を重視していることのあらわれである。

③斜栱に合わせて施された組物細部の工夫である。それは具体的に、斜栱と並ぶ秤肘木と巻斗の向きに表現され、「看面抹斜」と呼ばれる手法である。釈迦塔の場合、第 8 章で述べたとおり、斜栱における架構との関連性が捉えられるため、釈迦塔の斜栱は形式発展の初期段階に位置付けられる。釈迦塔においては、斜栱の向きに合わせている巻斗が確認されるが、斜栱と交差する秤肘木はまだ出現していない。金代再建の上華厳寺大殿では、斜栱と交差する

釈迦塔の斜斗
（筆者撮影）

上華厳寺大殿の「看面抹斜」
（筆者撮影）

（筆者撮影）

（『朔州崇福寺』筆者加筆）

弥陀殿の斜栱と対称する角度をもつ「看面抹斜」

図 10-5 弥陀殿の斜栱における発展

秤肘木とその上の巻斗は斜栱と平行に加工されている。なお、弥陀殿の場合に、斜栱と交差している秤肘木とその上の巻斗は斜栱の角度と向き合うように加工されている。このような手法を用いることで、従来斜栱と平行する部材を用いるよりも正面から見える部材の面が増し、組物の装飾性を高める効果があると思う（図 10－5）。

3　組物配置（図 10－6）

第８章でも触れた通り、崇福寺弥陀殿と観音殿は共に組物多様化の代表的な実例である。［表1］を参照しつつ、弥陀殿と観音殿の組物意匠を以下のようにまとめる。

弥陀殿は組物における構成分類の類型Ｃに当たり、その柱上組物と中備組物とには共にバリエーションが見られる。弥陀殿に見られる主な組物意匠として、①正面の柱上組物のみに

組物配置
（筆者作成）

弥陀殿の組物形式（『朔州崇福寺』）

観音殿の組物形式（『朔州崇福寺』）

図 10-6 弥陀殿・観音殿の組物配置

斜栱を用いて建築の正面性を表す、そして②背面の出入口の上に斜栱をもつ中備組物を設けて出入口を強調する、という2つの特徴が捉えられる。

観音殿の場合に、柱上組物の形式は統一しているが、中備組物は正面と背面のものだけが尾垂木を用いている。そのため、観音殿は組物構成分類の類型Bに属している。正面・背面を側面と区分する手法から建築の正方位性を表していると考えられる。

上述の結論は、弥陀殿と観音殿をそれぞれに採り上げて分析し、一棟の建物の中で成立している組物意匠を検討した結果である。本章では、建築群の視点から両建築を一つの全体として採り上げて、建築群の中で用いられている組物配置のルールを探求する。その際に、主に以下の3点に注目する。

①弥陀殿は間口7間の大殿で、観音殿は一つ下のランクの5間の仏殿である。両建築は共に多様な組物を用いているが、観音殿の組物外観は2種類しかないのと対照的に、弥陀殿は4種類の外観を表す組物を用いている。また、観音殿の正面と背面は外観が統一している組物を均等に配している点から、宋式詰組系からの影響が考えられる。漢宝徳氏は善化寺の大殿と山門の組物に注目し、最高級の大殿にバリエーションの多い組物、格式の低い山門に詰組を用いる現象から、北方建築においては、「自由な組合」をもつ組物が整然とした組物より高級である可能性を指摘している[7]。漢宝徳氏の仮説を参考にして考察すると、弥陀殿と観音殿の等級差は組物のバリエーションの多寡にも反映されていると言える。

②両建築の柱上組物はすべて下昂をもつものに統一されている。弥陀殿の柱上組物は建築群の中でも、最高級の下昂形木鼻付き2本下昂持ちの四手先組物である。その中で、正面の柱上組物は斜栱を用いながらも、「2本の下昂と下昂形木鼻をもつ」という柱上組物の基本形式を守っている。それとは対照的に、弥陀殿背面の出入口の上に置かれている中備組物は、斜栱を用いているが、下昂を持たず、正面の柱上組物の格式を超えないように配慮している。

③観音殿側面の組物における下昂の有無は、弥陀殿の側面の組物と呼応している。それは、側面から両建築を望むときに、一体感を創り出すために施した工夫であると考えられる。

4　おわりに

本章の考察に基づいて、崇福寺弥陀殿と観音殿の建築群は、組物多様化意匠の集大成であると言っても良いであろう。

組物形式の面では、梁の成熟に伴い、軒廻り組物における装飾性が前代の建築よりも強化された。木鼻・斜栱・「看面抹斜」の肘木などの組物における装飾的要素は更なる発展を遂げた上で、建築の外部意匠だけではなく、内部意匠の創作にも重要な役割を果たした。

組物配置の面では、正方位性・正面性を示したり、出入り口を強調したりするために多種

7　漢宝徳：『斗栱的起源與発展』，台北：境與象出版社，p. 101，1988（初版 1982）。

の組物意匠を用いながら、建築群の内部では組物の等級を示すルールに従っている。さらに、組物の配置を調整することによって、建築群としての外観に配慮している。

一方、弥陀殿と観音殿の建築群には宋式建築からの影響が確認される。これらの建築においては、宋式建築の特徴を組物多様化意匠の中に取り入れ、詰組を組物意匠におけるバリエーションの一種として活用していた。

結　論

1　研究の成果

本論文は東アジア建築史に視野を据え、東アジアの内部で共同研究を推進するために、中国建築史における体系化研究を第一の課題として提起した。中国建築史研究の中では、近年日本建築との比較研究を契機に、多大な成果を得た福建建築や江南建築などの南方建築体系が構築されたと対照に、中国北方建築を中心とした体系化研究は今だに空白である。そのため、本論文は中国北方建築における系統性を検証する上で、北方建築体系を構築することを目的としている。研究対象として選定されたのは、東アジア建築における二大組物体系である「疎組系」と「詰組系」の間に位置づけられる、宋・遼・金代の北方建築に見られる組物多様化現象である。

本研究の成果としては、従来の『営造法式』を中心とした宋・遼・金代の建築における語り方を再検討し、『営造法式』が代表とする詰組系建築とともに、多様な組物を用いる北方建築体系の併存を指摘した。それらの北方建築の組物に対して、その系統性を見い出した上で、組物の多様化における成立の経緯及び変遷の過程を明らかにした。これによって、本論文は東アジア建築史研究を推進するための中国建築体系化研究の第一歩と位置付けられる。本論文の主たる内容は以下のように総括することができる。

1−1　組物の要素分析から見た組物形式の成立

論文の第一部では、組物を様々な構成要素に分解し、組物形式の変化、特に組物がもつ構造性と装飾性の消長について考察を行った。このような考察を通して、本論文が注目する「組物多様化現象」を成立させる組物形式の多様性の由来が解明された。

考察の結果として、各要素は様々な起源を持ちながら、異なる発展過程を経って、構造性とともに装飾性も組物に持たせたことが分かった。各要素の中で、構造要素は組物の構造発展に制約されるため、共通する時代性を示すが、それと対照的に、装飾要素は建築における自然や社会環境に適応する美意識を反映しているため、より多くのバリエーションを表している。また、第 1 章の考察は、時代に従って組物の内部で起きた装飾要素の増加、又は構造要素の装飾化発展によって、組物全体が装飾化していくという過程を明らかにすることもできた。

さらに、様々な組物の構成要素の中で、最も複雑な変遷を見せたのは尾垂木である。そのため、第一部の第 2 章では尾垂木を抽出し、その形式の変遷に注目した。尾垂木形式の変遷について考察した結果、尾垂木における構造機能の弱化は架構形式の変化に従っていたことが分かった。

1−2 架構形式の変化に従った組物の構造発展

論文第二部では、10 世紀以降の日中建築において、仏殿内部空間の変化とともに架構形式の変化に着目し、架構形式の革新に従った中国建築における組物の発展過程を考察した。

10 世紀までは、古代的［身舎＋庇］架構形式は日中建築の主流であり続け、そして少なくとも横材体系と斜材体系という二つの系統に分けられる。10 世紀以降に、横材体系に属する中国の北方建築において、成熟した梁構造を用いる屋根構造は一体化し、組物層の上にのせるようになった。一方、斜材体系である江南建築の中で、屋根構造とは別系統として配置された軒廻り組物が見られる。同じく斜材体系に属する同時代の日本建築では、野小屋技術は普及し、屋根構造と軸部はそれぞれ独立した。すなわち、日中建築の軒廻り組物はともに屋根構造の制約から解放され、「構造と意匠の乖離」を実現した。

このような背景の中で、閉鎖的な内部空間をもつ日本中世仏堂は、内部意匠に力を入れ、外部では簡単な組物を用いるようになった。それと対照的に、宋・遼・金代の仏殿において、内部と外部の空間は伽藍を回遊する動線の一部として計画され、建築の外観は終始重視されていた。そのため、中国建築の格式を反映する不可欠な外観要素として、軒廻り組物はさらに発展した。

1−3 宋・遼・金代建築における組物意匠の分岐

柱上組物における構造機能の弱化は、架構形式の考察を通して解明されたが、それに伴い、元来補助的な構造である中備組物における 10 世紀以降の飛躍的発展について、第 5 章で考察を行った。10 世紀以降に、柱上組物と相等する構造、または柱上組物を越える構造をもつ中備組物が出現した。その後、柱上組物と中備組物とは同じ外観を示すかどうかによって、軒廻り組物に様々なバリエーションが見られる。

中備組物の構造発展を考察した結果によると、柱上組物と中備組物は最初に構造が異なっていたため、その外観に差異が現れるのは当然であると言える。後に、中備組物は柱上組物と相等する構造まで発展したとは言え、柱上組物と同じ外観にする意匠、すなわち詰組は、あくまでも一つの選択肢に過ぎないのだろう。様々な先行研究によって、「詰組は組物の構造発展の完成形である」という観点は主張されているが、本論文はそれに対して反論を提起した。

また、一棟の建築の中で、浮彫中備を多様化する手法は中国最古の木造遺構である 8 世紀の南禅寺大殿にすでに確認されている。三百年後の晋祠聖母殿に、多様な浮彫中備は、柱上組物と相等する構造をもちながら、異なる外観を示す中備組物と同時に用いられている。すなわち、軒廻り組物を多様化する意匠は、中備組物が発展する前からすでに存在し、中備組物の構造発展に従ってさらに発展し、宋・遼・金代に亘って詰組意匠と併存していた。

1−4 組物多様化の意匠と論理

宋・遼・金代建築の組物意匠の中で、『営造法式』が代表する詰組は多く語られているが、組物を多様化する意匠はこれまで「未熟な地方技術」や「秩序のない自由創作」として等閑視されていた。それら北方建築の組物多様化意匠は、詰組と異なる体系として自律性を持つことが、論文の第三部の検討によって明らかにされた。

論文の第三部は組物多様化意匠に対して、その系統性の解明、そしてその論理の解読を行った。具体的に、第7章は遺構からみた様々な組物配置法を類型化し、「組物多様化」に属する類型を抽出し、その特徴を考察した。結果として、組物の構造差異を反映する外観差異、そして意匠によって付けられた差異はいずれも組物多様化の要素であることを確認した。前述した組物における装飾要素の増加、又は構造要素の装飾化は、組物多様化意匠において、宋・遼・金代の更なる発展を可能にした不可欠な必要条件でもある。

詰組において軒廻りに同じ外観の組物を用いる原則とは対照的に、組物多様化意匠は意図的に多様な軒廻り組物を用いている。特に中備組物の間に現れる差異は殆ど意匠によって付けられたものと考えられる。第8章では、多様な組物を用いる遺構の組物配置を考察することによって、一見バリエーションの多い組物は、一定の原則に従って配置されていることを解明した。その成果として、それら遺構の多様な組物は「各立面を区分する」と「同一立面の中で区別する」という二種類の目的に従い、建築の正方位・正面を強調する原則、そして立面の中央又は出入口を強調する意図に従って配置されていると解釈できる。さらに、組物多様化意匠の配置ルールは建築における伽藍の中の位置と深く関連することも明らかになった。

また、各時期の遺構を考察すると、組物多様化意匠の内部では、論理の伝承と発展も見られる。そのため、北方建築の組物多様化現象は組物の構造発展から相対的に独立し、自律性をもつひとつの意匠体系として評価されるべきである。

2 展開の可能性

本論文は中国建築の体系化研究に目指し、中国建築における特質を見いだすために、組物を中心に日中建築の比較研究を行った。それを契機に、日本建築様式体系に対しても初歩的考察を行い、東アジア建築の全体について検討するような視野を広げることができた。

東アジア建築における様式体系の研究は、最初に西洋建築の様式論の影響を受けた日本の建築史家によって作り上げられた。それ以来、東アジア建築史は日本建築史の研究を土台にし、高度に体系化された枠組となっている。しかし、これまでの日中建築の比較研究は、単一の価値観の下で行われた中国建築史研究の現状に制約されていることを痛感した。そのため、より多元かつ立体的な研究の枠組が求められる。

本論文が行った中国の北方建築における体系化研究は、多視点下の中国建築体系を構築する試みであり、今後中国の国内でも、東アジアの視野でも展開の可能性を見せつつ、新たな

課題を多く提示している。以下に、本論文における今後の展開方向と課題を提言する。

①近年の中国に積極的に行われてきた地方様式の研究に注目しつつ、先行研究によって考察された江南・福建建築体系、そして本論文が提起した北方建築体系を含め、中国建築史研究における枠組みの体系化を推進する。それに基づき、中国建築における発展・変容の経緯を再解釈し、中国建築の全体像をより鮮明にしたい。

②日本建築と朝鮮建築における様式体系は、各時代の特定地域の中国建築に影響されながら独自な発展経緯をもっている。そのため、中国建築史の枠組みをベースにすることによって、日本と朝鮮の建築様式に対して再評価することは可能である。そのような研究は、各国の建築史研究に新たな刺激を与えるほかに、「東アジア建築史」の構築においても有意義な試みであると考える。

付録

750 800 850 900 950 1000 1050 1100 1150 1200

遼（916～1125）

金（1115～1234）

遼984
天津市薊県
独楽寺観音閣

遼984
天津市薊県
独楽寺山門

遼1020
遼寧省義県
奉国寺大殿

遼1024（現存せず）
天津市宝坻区
広済寺三大士殿

遼1038
山西省大同市
下華厳寺薄伽教蔵殿

遼1055以前
河北省新城県
開善寺大殿

遼1056
山西省応県
佛宮寺釈迦塔

遼1109（現存せず）
河北省易県　開元寺
毘盧殿・観音殿・薬師殿

遼1114頃
河北省涿源県
閣院寺文殊殿

遼12世紀初
山西省大同市
善化寺大殿

遼建金修
山西省大同市
善化寺普賢閣

金初期
山西省平順県
回龍寺大殿

金1124
山西省応県
浄土寺大殿

金1129
山西省陵川県
龍岩寺中殿

金1137
山西省五台県
仏光寺文殊殿

金1140再建
山西大同
上華厳寺大殿

金1143頃
山西省大同市
善化寺三聖殿

金1143頃
山西省大同市
善化寺山門

金1143
山西省朔州市
崇福寺弥陀殿

金1143頃
山西省朔州市
崇福寺観音殿

金1156～1161
山西省高平市
二仙宮中殿

金1163
山西省平遥
文廟大成殿

金1156～1161
山西省高平市
二仙宮中殿

金1163
山西省平遥市
文廟大成殿

金1168
山西省太原市
晋祠献殿

金1184
河南省済源市
奉先寺三清殿

金不詳
山西省平順県
龍門寺天王殿

金不詳
山西省定襄縣
洪福寺大殿

唐（618～907）　五代（907～979）

北宋（960～1127）　南宋（1127～1279）

唐782
山西省五台山
南禅寺大殿

唐831
山西省芮城県
広仁王廟大殿

唐857
山西省五台県
仏光寺東大殿

唐898
河北省正定県
開元寺鐘楼

唐末期
山西省平順県
天台庵正殿

五代925（後唐）
山西省平順県
龍門寺西配殿

五代940（後晋）
山西省平順県
大雲院弥陀殿

五代963（北漢）
山西省平遥県
鎮国寺万仏殿

五代964（呉越）
福建省福州市
華林寺大殿

北宋991
山西高平市
崇明寺中殿

北宋996
広東省肇慶市
梅庵大殿

北宋1013
浙江省寧波
保国寺大殿

北宋1015
福建省莆田市
元妙観三清殿

北宋1052
河北省正定県
隆興寺摩尼殿

北宋1073
山西省高平市
開化寺大殿

北宋1073（現存せず）
江蘇省角直鎮
保聖寺大殿

北宋1089
山西省晋城市
青蓮寺大殿

北宋1097
山西省晋城市
二仙観正殿

北宋1098
山西省平順県
龍門寺大殿

北宋1102再建
山西省太原市
晋祠聖母殿

北宋1125
河南省登封県
少林寺初祖庵大殿

北宋末期
山西省忻州市
金洞寺転角殿

820年頃の唐代
『世界美術大全集』東洋編４を参照に作成

付録Ⅱ　　遺構分布図―唐代

五代十国時代の10世紀初頭
『世界美術大全集』東洋編５を参照に作成

付録Ⅱ　　遺構分布図―五代

遼・北宋時代
『世界美術大全集』東洋編５を参照に作成

付録Ⅱ　　遺構分布図―遼宋時代

宋・金時代
『世界美術大全集』東洋編６を参照に作成

付録Ⅱ　　遺構分布図―宋金時代

参考文献

古文献

李誡『営造法式』北宋 1103 年刊行（四庫全書本・丁本・陶本・故宮本・張蓉鏡本）
脱脱『遼史』元 1344 年（中華書局出版 , 1974）

著作・共著

關野貞『支那の建築と芸術』東京：岩波書店 , 1938
竹島卓一『遼金時代の建築と其佛像』東京：龍門書局 , 1944
田邊泰『日本建築の性格』東京：相模書房 , 1942
太田博太郎『日本建築史序説』増補第二版，東京：彰国社，2005（初版 1947）
浅野清『法隆寺建築総観　昭和修理を通じて見た法隆寺建築の研究』東京：便利堂 , 1953
飯田須賀斯『中国建築の日本建築に及ぼせる影響』東京：相模書房 , 1953
伊藤延男『中世和様建築の研究』東京：彰国社 , 1961
近藤豊『古建築の細部意匠』東京：大河出版 , 1972（初版 1967）
井上充夫『日本建築の空間』東京：鹿島出版会 , 1972（初版 1969）
竹島卓一『営造法式の研究』一・二・三，東京：中央公論美術出版 , 1997（初版 1970-1974）
関口欣也『日本建築史基礎資料集成』仏堂Ⅳ，東京：中央公論美術出版 , 1975
工藤圭章「古代の建築技法」『文化財講座日本の建築』古代Ⅱ・中世Ⅰ，東京：第一法規 , 1976
清水擴「平安時代の寺院建築」『文化財講座日本の建築』古代Ⅱ・中世Ⅰ，東京：第一法規 , 1976
太田博太郎「概説」『文化財講座日本の建築』中世Ⅱ，東京：第一法規 , 1977
鈴木嘉吉「中世の寺院建築（大仏様・和様）」『文化財講座日本の建築』中世Ⅱ，東京：第一法規 , 1977
岡田英男『大和古寺大観』第 2 巻　当麻寺，東京：岩波書店 , 1978
澤村仁『日本建築史基礎資料集成』仏堂Ⅰ，東京：中央公論美術出版 , 1981
陳明達『営造法式大木作研究』北京：文物出版社 , 1981
伊東忠太『東洋建築の研究』東京：原書房 , 1982（初版 1936）
工藤圭章『日本の美術』197，東京：至文堂 , 1982
梁思成『営造法式注釈』巻上，北京：中国建築工業出版社 , 1983
劉敦楨『中国古代建築史』（第二版）北京：中国建築工業出版社 , 1984
劉致平『中国建築類型及結構』（新一版）北京：中国建築工業出版社 , 1987
楊鴻勲『建築考古学論文集』北京：文物出版社 , 1987
漢宝徳『斗栱的起源與発展』台北：境與象出版社 , 1988（初版 1982）

村田治郎『中国建築史叢考』東京：中央公論美術出版 , 1988
田中淡『中国建築史の研究』東京：弘文堂 , 1989
山岸常人『中世寺院社会と仏堂』東京：塙書房 , 1990
陳明達『中国古代木結構建築技術　戦國―北宋』北京：文物出版社 , 1990
藤井恵介『日本建築のレトリック――組物を見る』東京：INAX, 1994
田中淡「五代・北宋・遼の建築」『世界美術大全集』東洋編 5, 東京：小学館 , 1998
大森健二『社寺建築の技術―中世を主とした歴史・技法・意匠』東京：理工学社 , 1998
柴沢俊『柴沢俊古建築文集』北京：文物出版社 , 1999
田中淡「南宋・金時代の建築」『世界美術大全集』東洋編 6, 東京：小学館 , 2000
梁思成『梁思成全集』第七巻 , 中国建築工業出版社 , 2001
傅熹年『中国古代建築史』第二巻　両晋、南北朝、隋、唐建築, 北京：中国建築工業出版社, 2001
朱光亜「第九章　建築結構与装修技術：第一節大木技術」『中国古代建築史』第四巻元、明建築 , 北京：中国建築工業出版社 , 2001
傅熹年『中国古代城市規劃、建築群布局及建築設計方法研究』北京：中国建築工業出版社 , 2001
孫儒僩・孫毅華『敦煌石窟全集 建築画巻』香港：商務印書館 , 2001
太田博太郎「夢殿」『奈良六大寺大観』法隆寺 五 , 東京：岩波書店 , 2001
傅熹年「宋代建築構架的特点与「減柱」問題」『宿白先生八秩華誕記念文集』北京：文物出版社 , 2002
孫大章『中国古代建築史』第五巻 清代建築 , 北京：中国建築工業出版社 , 2002
蕭默『敦煌建築研究』北京：機械工業出版社 , 2002
郭黛姮『中国古代建築史』第三巻 宋、遼、金、西夏建築 , 北京：中国建築工業出版社 , 2003
張十慶『中日古代建築大木技術的源流与変遷』天津：天津大学出版社 , 2004
潘徳華『斗栱』南京：東南大学出版社 , 2004
潘谷西・何建中『営造法式解読』南京：東南大学出版社 , 2005
岡田英男『日本建築の構造と技法』東京：思文閣出版 , 2005
澤村仁『日本建築史基礎資料集成』仏堂Ⅱ , 東京：中央公論美術出版 , 2006
梁思成『梁思成全集』第十巻 , 北京：中国建築工業出版社 , 2007
田中淡「大仏様建築―宋様の受容と変質」『論集　鎌倉期の東大寺復興―重源上人とその周辺』（ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集第五号）京都：法蔵館 , 2007
傅熹年『中国科学技術史』建築巻 , 北京：科学出版社 , 2008
賀大龍『長治五代建築新考』北京：文物出版社 , 2008
項隆元『「営造法式」与江南建築』杭州：浙江大学出版社 , 2009
陳述・朱子方『遼会要』上海：上海古籍出版社 , 2009
国立歴史民俗博物館『日本建築は特異なのか――東アジアの宮殿・寺院・住宅』2009
陳明達著、丁垚等整理『営造法式辞解』天津：天津大学出版社 , 2010
関口欣也『中世禅宗様建築の研究』東京：中央公論美術出版 , 2010
中村達太郎『日本建築辞彙〔新訂〕』東京：中央公論美術出版 , 2011

関口欣也『江南禅院の源流、高麗の発展』東京：中央公論美術出版 , 2012

論文

梁思成「薊県独楽寺観音閣山門考」『中国営造学社彙刊』第三巻第二期 , 1932.6
梁思成・劉敦楨「大同古建築調報告」『中国営造学社彙刊』第四巻第三・四期 , 1933.12
劉敦楨「河北省西部古建築調査紀略」『中国営造学社彙刊』第五巻第四期 , 1935.6
関口欣也「高麗末李朝前期における詰組系様式の系統」『仏教芸術』113, 東京 : 毎日新聞社, 1977.6
傅熹年「福建的幾座宋代建築及其与日本鎌倉大仏様建築的関係」『建築学報』1981.4
陳薇「斜栱発微」『古建築園林技術』1987.4
藤井恵介「平安初期礼堂試論」『日本建築学会大会学術講演梗概集（中国）』1990.10
田中淡「中国建築の伝統とその優越性―東アジア建築文化の諸相」『国際交流』第 56 号 , 1991.7
祁英涛「晋祠聖母殿研究」『文物季刊』1992.1
張十慶「古代建築象形構件的形制及其演変-従駝峰与蟇股的比較看中日古代建築的源流和発展関係」『古建園林技術』1994.3
沈聿之「斜栱演変及普拍枋的作用」『自然科学史研究』1995.2
彭海「晋祠聖母殿観測収穫―聖母殿創建年代析」『文物』1996.1
肖旻「翼形拱探析」『古建園林技術』1997.1
村田健一「古代建築における三手先建物について」『奈良国立文化財研究所年報』1997
村田健一「薬師寺式三手先と法隆寺式組物」『奈良国立文化財研究所年報』1998
Timothy Reuter「Medieval: Another Tyrannous Construct?」『The Medieval History Journal』vol.1 No.1, 1998
田中淡「中国建築史からみた〈大仏様〉」（建築歴史・意匠部門研究協議会「大仏様の源流を求めて」）『建築雑誌』1999.2
韓一城「斗栱的結構、起源、与『営造法式』―“鋪作”与“跳、鋪之作”辨析」『古建築園林技術』2000.1
何建中「疑義相与析―読「斗栱的的結構、起源、与『営造法式』」」『古建築園林技術』2001.1
張十慶「南方上昂与挑斡作法探析」『建築史論文集』2002.2
張勃「漢伝仏教建築礼拝空間源流概述」『北方工業大学学報』Vol.15 No.4, 2003.12
田中淡「中国建築の年代学的通史を如何に叙述するか」『建築雑誌』vol.119 No.1514, 2004.2
肖旻「山西応県木塔的尺度規律」『西南交通大学学報』2004.6
李艶蓉・張福貴「忻州金洞寺転角殿勘察簡報」『文物世界』2004.6
藤井恵介「最近のアジア建築史交流動向」『建築雑誌』〈特集 建築年報〉2007.9
張十慶「『営造法式』八稜模式与応県木塔的尺度設計」『建築史』2009 年 02 期
張延・周海軍「中国伝統仏道建築中拡大前部礼拝空間形式初探」『建築史』第 26 輯,

2010
荷雅麗（Alexandra Harrer）「両種使用斜栱的重要且成熟的設計概念：「扇形斗栱」和「如意斗栱」」『古建園林技術』2012 年 02 期
永昕群・侯衛東「応県木塔観察測絵研究回顧」『中国文物報』2013 年 8 月 30 日
藤井恵介「夢見と仏堂―その礼堂の発生に関する試論―」『空間史学叢書 1　痕跡と叙述』東京：岩田書院，2013

学位論文

Alexandra Harrer『Fan-shaped Bracket Sets and Their Application in Religious Timber Architecture of Shanxi Province』University of Pennsylvania, 2010.12

実測調査・修理工事報告書

陳明達『応県木塔』北京：文物出版社，1980
柴沢俊・李正雲『朔州崇福寺弥陀殿修繕工程報告』北京：文物出版社，1993
柴沢俊『朔州崇福寺』北京：文物出版社，1996
柴沢俊・李在清・劉秉娟・任毅敏・柴玉梅『太原晋祠聖母殿修繕工程報告』北京：文物出版社，2000
河北省正定県文物保管所編著『正定隆興寺』北京：文物出版社，2000
楊新編『薊県独楽寺』北京：文物出版社，2007
大同市上華厳寺修繕工程資料編輯委員会編『大同華厳寺（上寺）』北京：文物出版社，2008
建築文化考察組編『義県奉国寺』天津：天津大学出版社，2008
張映塋・李彦主編『五台山仏光寺』北京：文物出版社，2010
遼寧省文物保護中心・義県文物保管所編著『義県奉国寺』北京：文物出版社，2011
清華大学建築設計研究院・北京清華城市規劃設計研究院文化遺産保護研究所『仏光寺東大殿建築勘察研究報告』北京：文物出版社，2011
張十慶著『寧波保国寺大殿勘測分析與基礎研究』南京：東南大学出版社，2012
劉智敏編著『新城開善寺』北京：文物出版社，2013

『国宝興福寺東金堂修理工事報告書』奈良：国宝興福寺東金堂修理事務所，1940
『国宝建造物醍醐寺五重塔修理工事報告書』京都：京都府教育庁文化財保護課，1960
『国宝当麻寺本堂修理工事報告書』奈良：奈良県教育委員会事務局文化財保存課，1960
『国宝法隆寺金堂修理工事報告書』東京：法隆寺国宝保存委員会，1962
『国宝東大寺鐘楼修理工事報告書』奈良：奈良県教育委員会，1967
『国宝元興寺極楽坊五重小塔修理工事報告書』奈良：奈良県教育委員会，1968
『国宝西明寺本堂他一棟修理工事報告書』大津：滋賀県教育委員会，1982
『国宝室生寺金堂修理工事報告書』奈良：奈良県教育委員会，1991
『国宝唐招提寺金堂修理工事報告書』奈良：奈良県教育委員会，2009
『鑁阿寺本堂調査報告書』栃木：足利市教育委員会，2011

図面・表目次

図 1-1 楊鴻勲による組物の起源説
図 1-2 漢代の組物
図 1-3 傅熹年氏による北朝建築の構造分類
図 1-4 構造材として登場した通肘木
図 1-5 通肘木の間に出現する組物要素
図 1-6 組物の構造発展
図 1-7 組物の装飾化
図 1-8 梁思成氏による「鋪作」の計算方法
図 1-9 跳出材のバリエーション
図 1-10 横材の発展
図 1-12 『営造法式』による通肘木の構成類型
図 1-13 日中建築における通肘木の組物化
図 1-14 法隆寺夢殿における通肘木構成の変更

図 2-1 尾垂木における起源と発展
図 2-3 日本古代建築の下昂
図 2-2 中国建築の庁堂系下昂
図 2-4 中国建築の殿堂系下昂
図 2-5 独楽寺観音閣の 2 種類の四手先
図 2-7 庁堂系下昂の変遷
図 2-6 殿堂系下昂の変遷
図 2-8 装飾下昂の出現
図 2-9 中備組物の下昂における発展過程
図 2-10 漢代石闕の外部上昂と法式上昂
図 2-11 陳明達氏による法式上昂の復原
図 2-12 遺構における手先の高さを調整する手法
図 2-13 上昂を用いる禅宗様柱上組物
図 2-14 尾垂木をもつ中備組物の分類
図 2-15 擬似上昂と溜金斗科
図 2-16 日本禅宗様建築の装飾尾垂木
図 2-17 『営造法式』の華頭子
図 2-18 華頭子を持たない尾垂木の架け方
図 2-19 二段華頭子をもつ日中建築

図 3-1 日本の仏堂における礼堂の変遷
図 3-2 仏殿前方の月台
図 3-4 中国仏殿の内部動線
図 3-3 奉国寺大殿の空間構成
図 3-5 身舎庇架構の分類と発展
図 3-6 福建省の遺構の前後非対称の処理手法
図 3-7 対称的架構形式に見られる非対称性

図 3-8 方三間仏殿の非対称的架構形式
図 3-9(1) 遺構における架構分析
図 3-9(2) 遺構における架構分析
図 3-10 日本の中世建築における架構の変化

図 4-1 簡単な組物の実例
図 4-3 中国建築の枓口跳
図 4-2 日本建築の出三斗
図 4-4 二手先組物と梁の関係
図 4-5 四手先組物と梁の関係
図 4-6 組物層から独立した梁
図 4-7 北方建築と南方建築の架構体系
図 4-8 架構の簡略化と組物の衰退
図 4-9 保国寺大殿の架構技術革新

図 5-1 跳出する組物に至るまでの中備
図 5-2 類型Ⅰの中備組物
図 5-3 類型Ⅱの中備組物
図 5-4 類型Ⅲの中備組物における柱上組物との差異
図 5-5 『営造法式』による台輪の使用
図 5-6 台輪及び中備組物下方支持材の変遷

図 6-1 釈迦塔の外部組物
図 6-2 釈迦塔の内部組物
図 6-3 張十慶による釈迦塔の寸法構成についての分析
図 6-4 釈迦塔の三重における平面構成分析図
図 6-5 斜栱の角度の形成

図 7-1 組物多様化の構成分類
図 7-2 大斗下の支持材
図 7-3 木鼻
図 7-4 翼形栱
図 7-5 斜栱
図 7-6 尾垂木
図 7-7 組物多様化の位置付け

図 8-1 浮彫中備からみた建築の正方位性
図 8-2 中備組物からみた建築の正方位性
図 8-3 斜栱からみた建築の正方位性
図 8-4 仏殿における斜栱の意味
図 8-5 釈迦塔の組物が示す正方位性
図 8-6 組物配置からみた建築の正面性
図 8-7 浮彫中備からみた建築の中心性
図 8-8 中備組物からみた建築の中心性

図 9-1 仮昂形式の変遷
図 9-2 北方系と南方系の下昂形木鼻
図 9-3 下昂形木鼻と平出仮昂の混用
図 9-4 聖母殿の組物形式及び組物配置図

図 9-5 隆興寺摩尼殿の組物配置
図 9-6 聖母殿の翼形栱と菱形栱

図 10-1 金代建築の減柱法と移柱法
図 10-2 弥陀殿の柱上組物
図 10-3 観音殿の架構形式
図 10-4 襯方頭木鼻の発展
図 10-5 弥陀殿の斜栱における発展
図 10-6 弥陀殿・観音殿の組物配置

表 1 跳出する中備組物を用いる唐・五代・遼・北宋・金代遺構情報一覧表 81
表 2 組物多様化様式の構成分類 103
表 3 類型Ⅲの中備組物における柱上組物との相違点 111
表 4 晋祠聖母殿建立関連年表 127
表 5 唐代から金代まで下昂をもつ遺構の下昂・木鼻形式 131

付録Ⅰ 遺構年表 153
付録Ⅱ 遺構分布図一唐代 154
付録Ⅱ 遺構分布図一五代 155
付録Ⅱ 遺構分布図一遼宋時代 156
付録Ⅱ 遺構分布図一宋金時代 157